

統計手法を用いた  
諸方言アクセント分類の実証的研究  
—京阪式アクセントと讃岐式アクセントを中心に—

村 田 真 実

徳島大学大学院総合科学教育部

平成 25 年度 博士学位請求論文

統計手法を用いた  
諸方言アクセント分類の実証的研究  
—京阪式アクセントと讃岐式アクセントを中心に—

村 田 真 実

徳島大学大学院総合科学教育部

平成 25 年度 博士学位請求論文

本研究を進めるにあたって、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費、研究課題番号：12J01578、2012 年度）「多変量解析を用いた諸方言アクセント区画モデル化構築の研究」の援助を受けました。心より御礼申し上げます。

# 目次

---

初出一覧	vi
図一覧	x
表一覧	xii
略語一覧	xiii

## 序章 統計的手法を取り入れた新たなアクセント研究へ 1

- 0.1 目的
- 0.2 研究の背景
  - 0.2.1 消滅の危機に瀕する伝統的アクセント
  - 0.2.2 ケーススタディとして徳島方言を取り上げることの意義
- 0.3 本研究の位置づけと、筆者の立場
- 0.4 研究の手法
  - 0.4.1 データと手法
  - 0.4.2 主な使用ツール「R」
- 0.5 本論文の構成

## 第1章 徳島県下のアクセント体系の実態 5

- 1.1 京阪式アクセント－徳島型の実態
- 1.2 讃岐式アクセント－池田型の実態
- 1.3 変種アクセントの実態
  - 1.3.1 垂井式アクセントの実態
  - 1.3.2 山城谷アクセントの実態
    - 1.3.2.1 貞光の山城谷アクセントの実態
    - 1.3.2.2 一宇の山城谷アクセントの実態
  - 1.3.3 出合アクセントの実態
- 1.4 まとめ

<b>第2章 研究史</b>	<b>19</b>
2.1 徳島県下の諸アクセントの研究	
2.2 京阪式アクセントー徳島型の研究	
2.3 讃岐式アクセントー池田型の研究	
2.4 変種アクセントの研究	
2.4.1 垂井式アクセントの研究	
2.4.2 山城谷アクセントの研究	
2.4.3 出合アクセントの研究	
2.5 まとめ	
<b>第3章 同一類内の語のアクセント分裂に対する統計的試論</b>	<b>32</b>
3.1 目的	
3.2 前提	
3.2.1 徳島県吉野川流域の様相	
3.2.2 アクセント変化の前提	
3.3 アクセントの分裂現象	
3.3.1 徳島方言ー加藤(1968)による問題提起ー	
3.3.2 類例ー富山方言その他の場合ー	
3.4 徳島方言における分裂現象ー再考ー	
3.4.1 2009年調査の概要と結果	
3.4.2 音韻条件の検証と仮説	
3.4.3 ロジスティック回帰分析	
3.4.3.1 データ	
3.4.3.2 試行	
3.4.3.3 結果	
3.5 まとめ	
<b>第4章 多変量解析によるアクセント境界線認定</b>	<b>42</b>
4.1 目的	
4.2 先行研究	

- 4.3 調査の概要
- 4.4 調査の結果と分析
  - 4.4.1 グロットグラム
  - 4.4.2 多変量解析の結果から得られた散布図とデンドログラム
    - 4.4.2.1 コレスポネンス分析の結果から
    - 4.4.2.2 クラスタ分析の結果から
- 4.5 まとめ

## **第5章 多変量解析によるアクセント区画の再整理** **50**

- 5.1 先行研究
- 5.2 多変量解析によるアクセント区画の再整理
  - 5.2.1 データの概要と分析の方法
  - 5.2.2 分析結果と解釈
    - 5.2.2.1 多重対応分析による解析結果と解釈
    - 5.2.2.2 自己組織化マップ (SOM) による解析結果と解釈
- 5.3 アクセントデータに多重対応分析及び SOM を応用することの妥当性と有意性
- 5.4 まとめ

## **終章 本研究の意義** **63**

- 6.1 本研究のまとめ
- 6.2 本研究の意義
- 6.3 今後の展望
  - 6.3.1 同一類内のアクセント分裂現象について
  - 6.3.2 日本諸方言アクセント区画の再整理
  - 6.3.3 アクセント以外の項目への応用
  - 6.3.4 <数理方言学>の構築に向けて

- 7.1 はじめに
  - 7.1.1 目的と意義
  - 7.1.2 変化の要因と筆者の立場
    - 7.1.2.1 内的要因
    - 7.1.2.2 外的要因
    - 7.1.2.3 筆者の立場
- 7.2 近畿中央部のアクセント変化
  - 7.2.1 目的
  - 7.2.2 取り扱うデータ
  - 7.2.3 分析
    - 7.2.3.1 1980 年代後半の大阪のアクセント
    - 7.2.3.2 2011 年の大阪府・奈良県のアクセント
    - 7.2.3.3 中井（1988）から見る京都旧市内の状況
  - 7.2.4 結論
- 7.3 近畿周辺部のアクセント変化
  - 7.3.1 目的
  - 7.3.2 取り扱うデータ
  - 7.3.3 分析
    - 7.3.3.1 分析（三重県）
    - 7.3.3.2 分析（徳島県）
  - 7.3.4 結論
- 7.4 京阪式アクセントとそれに接触する異体系アクセント地域の状況
  - 7.4.1 目的
  - 7.4.2 取り扱うデータ
  - 7.4.3 分析
    - 7.4.3.1 分析（名古屋市・東京式アクセント—内輪系）
    - 7.4.3.2 分析（岡山県・東京式アクセント—内輪系）
    - 7.4.3.3 分析（徳島県西部／香川・讃岐式アクセント）

7.4.4 結論

7.5 おわりに

**参考文献** **86**

**資料** **99**



# 初出一覧

---

本論文における各章は、それぞれ以下の発表・論文をもとに、大幅な加筆と修正を加えたものである。

## 序章 統計的手法を取り入れた新たなアクセント研究へ：

【論文・査読有・日本学術会議傘下の学会】村田真実「徳島県吉野川流域のアクセント—京阪式アクセントと讃岐式アクセントの境界—」『文理シナジー』16-2、文理シナジー学会、2012年10月刊行

## 第1章 徳島県下のアクセント体系の実態：

【卒業論文】村田真実「徳島市の方言アクセントについて」、早稲田大学第一文学部提出、2008年

【報告・査読無】村田真実「東祖谷のアクセントについての一考察」『東祖谷のことば』、徳島大学国語学研究室、pp. 198-208、2008年3月

【発表・査読無】村田真実「東祖谷のアクセント」、徳島大学国語国文学会第38回研究会、於徳島大学、2008年6月

【報告・査読無】福良真依子・村田真実「徳島県西部・香川県西部のアクセント」『徳島・香川両県西部のことば』、徳島大学国語学研究室、pp. 182-311、2009年2月

【修士論文】村田真実「吉野川流域の方言アクセント—京阪式アクセントと讃岐式アクセントの境界—」徳島大学大学院人間・自然環境研究科人間環境専攻提出、2010年

【論文・査読有】村田真実「徳島県旧貞光町端山の方言アクセント」『言語文化研究』(19)、徳島大学総合科学部、pp. 191-208、2011年12月

【発表・査読無】村田真実「徳島県旧貞光町端山の方言アクセント」近畿音声言語研究会月例会、於西宮市大学交流センター、2012年6月

【論文・査読無】村田真実「徳島県旧東祖谷山村のアクセント」『徳島大学国語国文学会』(25)、徳島大学総合科学部国語国文学会、pp. 62-77、2012年6月

## 第2章 研究史：

【卒業論文・前出】村田真実「徳島市の方言アクセントについて」、早稲田大学第一文学部提出、2008年

【報告・査読無・前出】村田真実「東祖谷のアクセントについての一考察」『東祖谷のことば』、徳島大学国語学研究室、pp. 198-208、2008年3月

【発表・査読無・前出】村田真実「東祖谷のアクセント」、徳島大学国語国文学会第38回研究会、於徳島大学、2008年6月

【報告・査読無・前出】福良真依子・村田真実「徳島県西部・香川県西部のアクセント」『徳島・香川両県西部のことば』、徳島大学国語学研究室、pp. 182-311、2009年2月

【修士論文・前出】村田真実「吉野川流域の方言アクセント—京阪式アクセントと讃岐式アクセントの境界—」徳島大学大学院人間・自然環境研究科人間環境専攻提出、2010年

【論文・査読有・前出】村田真実「徳島県旧貞光町端山の方言アクセント」『言語文化研究』(19)、徳島大学総合科学部、pp. 191-208、2011年12月

【発表・査読無・前出】村田真実「徳島県旧貞光町端山の方言アクセント」近畿音声言語研究会月例会、於西宮市大学交流センター、2012年6月

【論文・査読無・前出】村田真実「徳島県旧東祖谷山村のアクセント」『徳島大学国語国文学会』(25)、徳島大学総合科学部国語国文学会、pp. 62-77、2012年6月

## 第3章 同一類内の語のアクセント分裂に対する統計的試論：

【発表・査読無】村田真実「吉野川中流域のアクセント接触—美馬市脇町と阿波市阿波町でのアクセント調査より—」、徳島大学国語国文学会第41回研究会、於徳島大学、2009年12月

【修士論文・前出】村田真実「吉野川流域の方言アクセント—京阪式アクセントと讃岐式アクセントの境界—」徳島大学大学院人間・自然環境研究科人間環

境専攻提出、2010年

【発表・査読有】村田真実「同一類内の語のアクセント分裂に対する統計的試論—徳島県吉野川中流域をケーススタディとして—」、第17回日本語日本文化教育研究会、於大阪大学 CJLC ホール、2013年6月

#### **第4章 多変量解析によるアクセント境界線認定：**

【修士論文・前出】村田真実「吉野川流域の方言アクセント—京阪式アクセントと讃岐式アクセントの境界—」徳島大学大学院人間・自然環境研究科人間環境専攻提出、2010年

【発表・査読有・日本学術会議傘下の学会】村田真実「徳島県吉野川流域のアクセント—京阪式アクセントと讃岐式アクセントの境界—」『日本方言研究会』第91回研究発表会、於愛知大学、2010年10月

【論文・査読有・日本学術会議傘下の学会・前出】村田真実「徳島県吉野川流域のアクセント—京阪式アクセントと讃岐式アクセントの境界—」『文理シナジー』16-2、文理シナジー学会、2012年10月

#### **第5章 多変量解析によるアクセント区画の再整理：**

【発表・査読無】村田真実「統計的手法を用いたアクセントデータによる方言区画のモデル化」、関西音韻論研究会（PAIK）、於神戸大学、2013年5月

#### **終章 本研究の意義：**

【論文・査読有・日本学術会議傘下の学会・前出】村田真実「徳島県吉野川流域のアクセント—京阪式アクセントと讃岐式アクセントの境界—」『文理シナジー』16-2、文理シナジー学会、2012年10月

#### **付録論文 京阪式アクセントにおける2拍名詞の類の統合状況と低起無核型の消失傾向—大阪・奈良・三重・徳島方言を中心に—：**

【論文・査読有・日本学術会議傘下の学会】岸江信介・村田真実「京阪式アクセントにおける2拍名詞の類の統合状況と低起無核型の消失傾向—大阪・奈良・三重・徳島方言を中心に—」『音声研究』日本音声学会、第16巻第3号、

pp. 34-46、2012 年 12 月刊行

# 図一覽

---

図 1: 徳島県下のアクセント概観	6
図 2: 3 拍名詞第 4 類「宝が」のアクセント	8
図 3: 3 拍名詞第 7 類「(この)鯨は」のアクセント	8
図 4: 3 拍動詞第 2 類「余る」のアクセント	9
図 5: 3 拍動詞第 2 類「起きる」のアクセント	10
図 6: 3 拍動詞第 2 類「落ちる」のアクセント	12
図 7: 東祖谷山村の集落	13
図 8: 貞光町端山と一字村の位置	15
図 9: 徳島香川西部の 1 拍名詞第 1 類	25
図 10: 徳島香川西部の 1 拍名詞第 2 類	26
図 11: 徳島香川西部の 2 拍動詞第 2 類 1 段活用	27
図 12: 徳島香川西部の 3 拍動詞第 2 類 1 段活用	28
図 13: 徳島香川西部の 3 拍動詞第 3 類	28
図 14: 吉野川流域を中心とした徳島県下のアクセントの現状	33
図 15: 2009 年調査の結果	38
図 16: ロジスティック回帰分析の試行	40
図 17: 試行の結果	40
図 18: 調査地点	44
図 19: 4 語の境界	45
図 20: 1~3 拍名詞の結果から得られた散布図	47
図 21: デンドログラムから見える分類	48
図 22: 森の方言区画	51
図 23: 多重対応分析による徳島県内のアクセントデータの分析	54
図 24: 徳島型グループの拡大図	54
図 25: クラスタ分析の結果	56
図 26: SOM 分析による結果 1	58

図 27: SOM の結果 2	60
図 28: SOM の結果 3	60
図 29: 2 拍名詞第 4 類の音調型の世代変異 (大阪市男性) 岸江 (1997) を 一部修正	70
図 30: 2 拍名詞第 4 類の音調型の世代変異 (大阪市女性) 岸江 (1997) を 一部修正	71
図 31: 第 4 類「息を」のグロットグラム	73
図 32: 2 拍名詞第 4 類(助詞付)の音調型の出現率	74
図 33: 第 5 類「窓」のグロットグラム	74
図 34: 第 4 類「箸を」のグロットグラム調査結果	77
図 35: 岸江他(2001b)より 2 拍名詞類別体系	80
図 36: 真田他(1993)より「息が」のグロットグラム	81
図 37: 岸江他(2010)より「傘が」のグロットグラム	83
図 38: 岸江他(2010)より「(この)跡が」のグロットグラム	83

# 表一覽

---

表 1: 徳島県下のアクセント分布	5
表 2: 徳島型の 1 拍名詞	7
表 3: 徳島型の 2 拍名詞	7
表 4: 徳島型の 3 拍名詞	8
表 5: 徳島型の 2 拍動詞	9
表 6: 徳島型の 3 拍動詞	9
表 7: 池田型の 1 拍名詞	10
表 8: 池田型の 2 拍名詞	11
表 9: 池田型の 3 拍名詞	11
表 10: 池田型の 2 拍動詞	12
表 11: 池田型の 3 拍動詞	12
表 12: 一字アクセントの 2 拍名詞	17
表 13: 一字アクセントの 3 拍名詞	17
表 14: 徳島香川西部の 2 拍動詞の体系	26
表 15: 徳島香川西部の 3 拍動詞の体系	27
表 16: 池田型と徳島型の 2 拍名詞の音調	34
表 17: 加藤(1968)の 2 拍名詞第 3 類の調査結果	35
表 18: アクセント変化の方向と音韻条件	36
表 19: 松江方言の 2 拍名詞第 3 類	37
表 20: 珠洲方言の 2 拍名詞第 2 類と第 3 類	37
表 21: 徳島県下のアクセント 4 分類	61
表 22: 2 拍名詞のアクセント変化	68

# 略語一覽

---

H	高拍
L	低拍
F	拍内下降
R	拍内上昇
—	助詞
「R」	統計ソフト「R」



# 序章 統計的手法を取り入れた新たなアクセント研究へ

---

## 0.1 目的

本研究は、統計的手法を以って新たな方言区画のモデルを構築することを目的としている。具体的には、ケーススタディとして徳島方言を取り上げ、徳島県内の記述された方言アクセントデータをもとに、統計的手法によって新しい方言区画を生み出す。

日本諸方言アクセントに関する研究は、萌芽期から現在に至るまで体系記述的研究が主流であった。そのような流れの中で、本土方言の記述は、伊吹島<sup>1</sup>を頂点としてほぼ完成したと言って良い（上野善道・1985a、上野善道・1985b、上野善道・1987）。これからのアクセント研究には、地理的研究をベースとした計量言語学的な見地からの方言区画モデルの構築を目指した研究が必要であると考えられる。統計的手法を用いることで、他の分野の研究者や研究に従事しない人（たとえばある地域の方言話者）が見ても理解出来るような散布図やグラフを描くことが出来、そこから議論が発展し、新しい分析が可能となるからである。

本研究では、伝統的なアクセント研究を背景に、コンピュータを用いた分析を行う。本研究は、地域科学の理念に基づき、方言学という地域性豊かな伝統的な学問と、言語処理・統計などの最新の技術を駆使した科学が文理融合を果たした学際的な研究である。

## 0.2 研究の背景

### 0.2.1 消滅の危機に瀕する伝統的アクセント

危機言語として現在特に注目されているのは琉球方言であるが、消滅の危機に

---

<sup>1</sup> 香川県観音寺市伊吹町。下降式音調が聞かれ、日本で唯一第1次アクセントの体系を有する。

瀕しているのは実は琉球方言だけではない。日本本土でも全国的に共通語化が起きており、全国各地の伝統的アクセントは次第に失われつつある。半世紀後には日本本土の伝統的アクセントはほぼ全て消滅すると言っても過言ではないだろう。

その実例として、本研究の着目地域である徳島県を例に挙げる。徳島アクセントを京都アクセントと対照してみると、徳島アクセントには『補忘記<sup>2</sup>』の時代のアクセント体系が保存されていることが分かる。徳島はアクセントの変化の速度が京都より遅く、古い時代のアクセントが化石のように残っており、現在でもそれを聞くことが出来るのである。しかし、この伝統的なアクセント体系を保持しているのは、中年層（40歳～60歳）以上の人に限られており、若年層には継承されていない（上野和昭/仙波・1993、上野和昭・1994b）。このように見てみると、世代変化が著しく、消滅の危機に瀕しており、まだまだ記述し、保存しなければならない方言が日本列島本土にも多く残されていることが分かる。

### 0.2.2 ケーススタディとして徳島方言を取り上げることの意義

今回ケーススタディとして徳島方言として取り上げることに意味がある。まず、徳島県は異体系アクセントが並立している非常に特殊な地域であるということが挙げられる。これについては第1章で詳述する。異体系アクセントが並立する地域を対象とすることは、今後の研究の拡張可能性に繋がる。本研究では徳島県のみを取り扱うが、四国全域、西日本全域、日本全域へと範囲を広げ、統計的手法を用いることでそれぞれのレベルのアクセント区画の方法をより客観的に見直すことも可能である。

更に、徳島県西部に存在するアクセントの分析例を提示することで、ユレが激しく、音調型がとらえにくいアクセントの処理の仕方を提案することが出来る。諸方言のアクセント体系を明らかにするためには、安定した音調型が前提条件となるが、本研究で扱う徳島県内のアクセントの中には、音調型にユレが現れるものが県西部に多く存在する。このようなアクセントの場合、アクセント体系の位置づけが難しいものもあり、白黒がはっきりしない、いわばグレーゾーンに位置すると見なさざるを得ないケースも少なからず存在する。方言区画を行う上でこのようなユレがみられる方言アクセントも含めて全体を網羅した区画整理が出来

---

<sup>2</sup> 近世初期頃の京都アクセントの体系が分かる史料。

れば、体系のみに主眼を置いたアクセント区画を違った視点から見直すことに繋がる。

### 0.3 本研究の位置づけと、筆者の立場

先行研究の中には、統計的な手法を用いて方言を分析したものも勿論存在する。フィールドワークで得たデータを多変量解析の手法を用いて分析したもので、その先駆的研究として、江川（1973a・1973b）、野元/江川（1974）、野元（1974）、江川/米田（1975a・1975b）、井上（2001）などがある。また、本研究と同様にアクセントを分析対象としたものに田中（1999）があり、これは首都圏西部域高年層を対象としたフィールド調査によるアクセントデータを、数量化第Ⅲ類及びクラスター分析を用いて分類したものであった。本研究は、上述のようなフィールドワークの結果を多変量解析によって分析するというスタイルの研究の流れの中に位置づけられる。

世代変化という視点も交えながら広義の危機言語とされる方言アクセント体系を記述する作業を進めつつ、アクセント研究の新しい手法を提案するというのが筆者の立場である。

## 0.4 研究の手法

### 0.4.1 データと手法

本研究では、徳島県下各地で収集したアクセントデータを用いて、統計的手法による方言区画の再整理を試みる。分析には、主に多変量解析を利用する。多変量解析は、多次元のデータ（ケース）間の相関を、2次元上にマップすることの出来る技法であり、方言などの地域差を明示する際にも適応することが可能である。この方法の最大の特徴は、バリエーションに富む大量のデータ相互の相関関係を重視しつつ、似た関係にあるもの同士を平面上で近くに位置づけるという点である。この利点を活用し、京阪式、讃岐式、その変種など徳島県下に存在する多様なアクセントのデータから方言区画の再整理を試みる。なお、アクセントデータは、たとえば2拍名詞だけを扱うのではなく、1拍から3拍名詞のほか、動詞、形容詞のデータも分析の対象とした。

#### 0.4.2 主な使用ツール「R」

本論文内ではいくつかの統計手法を用いているが、その計算にはすべて統計解析ソフト「R<sup>3</sup>」を利用した。現行バージョンは「R (3.0.1)」であるが、本論文では「R (2.13.0)」を用いた。当然のことながら、バージョンの違いは計算結果に影響を与えない。

#### 0.5 本論文の構成

序章「統計的手法を取り入れた新たなアクセント研究へ」では、研究の背景を踏まえた上で本研究の目的を述べ、新たなアクセント研究の手法を提案する。また、ケーススタディとして徳島方言を取り上げることの意味、方法論、使用するツールについても記す。第1章「徳島県下のアクセント体系の実態」と第2章「研究史」では徳島県のアクセントについて概観する。第1章では、筆者が集めたデータをもとに現状を解説する。第2章は先行研究のまとめであり、通時的に徳島県のアクセントを見たものである。第3章「同一類内の語のアクセント分裂に対する統計的試論」では、ロジスティック回帰分析を用いて、境界地帯の同一類内の語のアクセント分裂現象を説明する。先行研究で音韻的にも文法的性格からも説明がつかなかったとされる現象について、ロジスティック回帰分析を手掛かりに音韻面から再検証した結果を提示する。第4章「多変量解析によるアクセント境界線認定」と第5章「多変量解析によるアクセント区画の再整理」では、多変量解析を用いてアクセント体系の再分類を試みる。第4章では、吉野川流域の京阪式アクセント徳島型と讃岐式アクセント池田型の境界地帯をグレーゾーンとして設定し、統計的手法による分類を行う。第5章では、第4章で用いた手法を応用し、徳島県下のアクセント体系すべてを対象としたアクセント区画の再整理を行う。そして最後に、終章「本研究の意義」で、本論文全体を総括するとともに、今後の展望などについて言及する。付録論文「京阪式アクセントにおける2拍名詞の類の統合状況と低起無核型の消失傾向—大阪・奈良・三重・徳島方言を中心に—」は、京阪式アクセント地域一円に起こりつつある現象について述べたものである。徳島県の位置づけを確認するためにも、本論文に付録する。

---

<sup>3</sup> <http://www.r-project.org/>

# 第 1 章 徳島県下のアクセント体系の実態

本章では徳島県下に存在するアクセント体系（表 1・図 1）について概観し、その実態に迫る。1.1 では、徳島県東部から中部にかけて分布する京阪式アクセント徳島型<sup>4</sup>について述べる。1.2 では、吉野川中流域から県北西部にかけて分布する讃岐式アクセント池田型<sup>5</sup>について述べる。これは香川県からの影響を受けたとみられるアクセントである。池田型の南部周辺には変種アクセントが分布する。1.3 ではこの変種アクセント 3 種について述べる。変種アクセントとは、三好市西祖谷山村・東祖谷山村・那賀町木頭村などの山間部で聞かれる垂井式アクセント、一字村、山城町で聞かれる山城谷アクセント、三好市池田町出合地区のみで聞かれる出合アクセントのことである。

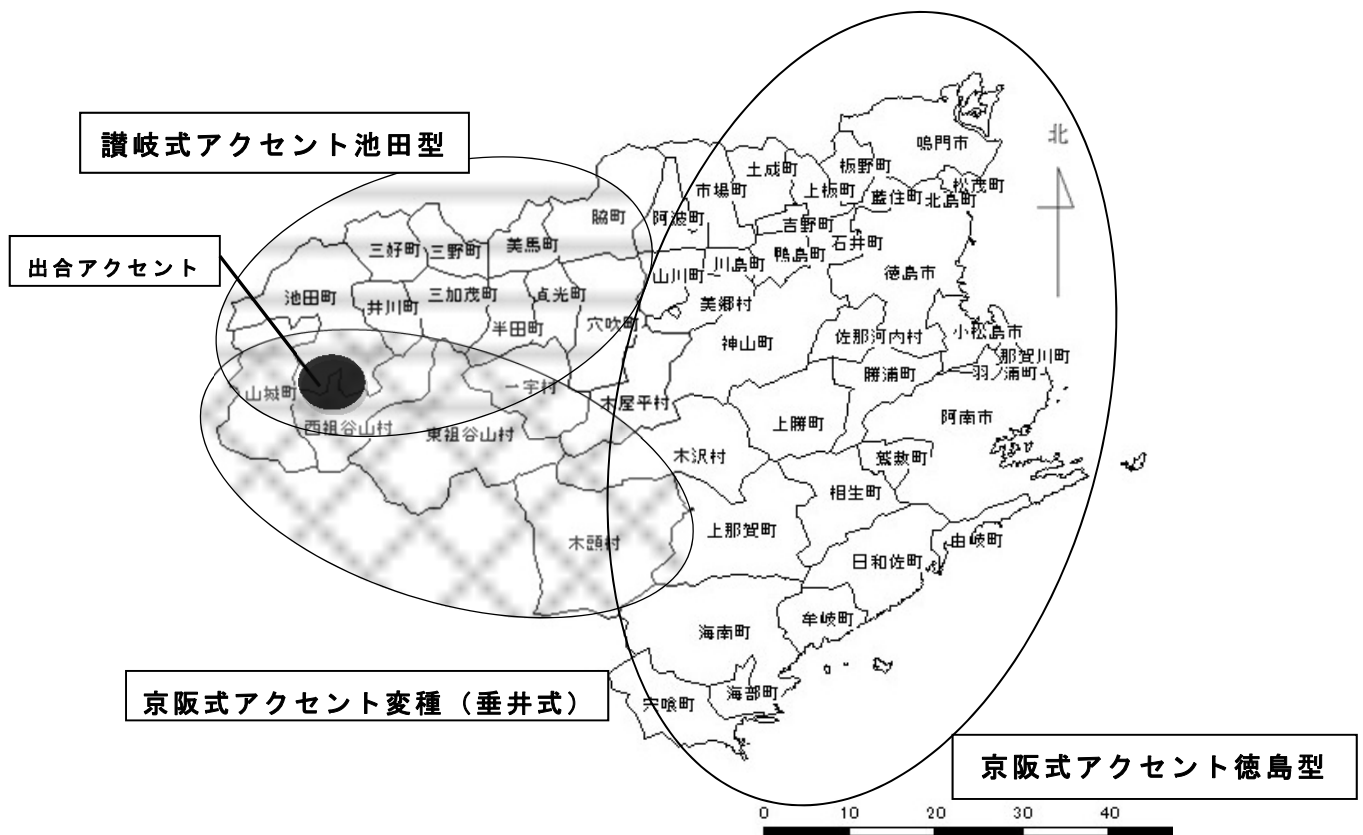
<表 1：徳島県下のアクセント分布<sup>6</sup>>

京阪式（徳島型）		県東部および中部
京阪式 変種	垂井式	三好市西祖谷山村・東祖谷山村 那賀郡那賀町木頭
讃岐式（池田型）		県西部
讃岐式 変種	山城谷式	美馬郡つるぎ町一字・貞光・半田の一部 三好市山城町
	出合式	三好市池田町出合

<sup>4</sup> 以下、本論文では一貫して徳島型と略す。

<sup>5</sup> 以下、本論文では一貫して池田型と略す。

<sup>6</sup> 先行研究で記された地名はすべて、2011年4月時点の市町村名に直した。生田・1951、山名・1956、森・1982、上野善道・1987、上野和昭/仙波/森・1991、上野和昭・1997a、石田/岸江・2001 ほかによる。



<図1：徳島県下のアクセント概観>

### 1.1 京阪式アクセント—徳島型の実態

徳島県の東部域から中部域の大半の地域では、安定した音調型が保たれており、体系的には京阪神地区のアクセントと同種のもので分布している。京阪式アクセントは、その名の通り近畿中央部を中心に分布するアクセント体系であり、式の対立を有し、核の位置によって弁別される。2拍名詞の類の統合状況は4(1/2・3/4/5)となっている。また、徳島県東部で聞かれる京阪式アクセント徳島型は現代京都アクセントの体系の前体系を一部保存する。詳細を述べると、3拍名詞第4類をHHL、第7類をLHL、3拍動詞第2類をHLLと発音する。即ち、『補忘記』の時代のアクセントが残っているのである。これらの点以外では、現代京都アクセントとほぼ同じであると言って良い。

<表 2：徳島型の 1 拍名詞>

第 1 類	蚊、毛、血	H/HH、H-H/HH-H
第 2 類	葉、日、矢	H/F、H-L/F-L
第 3 類	絵、木、根	L/R、L-H/LL-H

1 拍名詞のアクセントは表 2 の通りである。1 モーラ語は長音化して 2 モーラになる場合がある。京阪神地区と同じく、徳島でも助詞が省略される形の文が実現される場合（「血が出る」が「チー出る」に、なる場合。日常的な会話の中で、このように助詞が省略されることは徳島でもよく聞かれることである）には、助詞の拍を補う為に前接の語が引かれることが多い。但し、特に高年層については、後続助詞の有無に関係なく長音化する。

<表 3：徳島型の 2 拍名詞>

第 1 類	竹、鳥、箱、端、鼻、水	HH、HH-H
第 2 類	歌、音、北、梨、夏、雪	HL、HL-L
第 3 類	朝、足、犬、亀、花、耳、山	
第 4 類	跡、息、糸、海、数、肩、空、箸	LH、LL-H
第 5 類	秋、井戸、声、猿、鍋、窓	LH、LH-L

2 拍名詞のアクセントは表 3 の通りである。第 4 類は若年層に音調の変化(LL-H > LH-L)が起きており、第 4 類が第 5 類と統合しつつあるのが近年の傾向である。この点については付録論文「京阪式アクセントにおける 2 拍名詞の類の統合状況と低起無核型の消失傾向—大阪・奈良・三重・徳島方言を中心に—」で詳述する。

3 拍名詞のアクセントは次頁の表 4 の通りである。第 4 類を HHL、第 7 類を LHL と発音するところに現代京都アクセントの体系の前体系を一部保存していることが分かる。

<表 4：徳島型の 3 拍名詞>

第 1 類	魚、子牛、車、子供、背中	HHH、HHH-H
第 2 類	毛抜き、二つ、二人	LHL、LHL-L
第 3 類	小麦、サザエ、力	HLL、HLL-L
第 4 類	頭、表、男、言葉	HHL、HHL-L
第 5 類	油、五つ、いところ、命	HLL、HLL-L
第 6 類	兎、蛙、雀、鼠、狐	LLH、LLL-H
第 7 類	苺、後ろ、兜、鯨、葉	LHL、LHL-L

3拍名詞第4類：宝が

	池田町 三瓶	池田町 津田	井川町 辻	三加茂町 加茂	三加茂町 江口	半田町 半田	真光町 真光	穴吹町 穴吹	川田町 川田	山川町 山川	山川町 山瀬	川島町 宇	川島町 川島	高森町 高森	輪島町 輪島	輪島町 牛島	石井町 須庄	石井町 石井	徳島市 徳島	徳島市 徳本	徳島市 佐古	徳島市 旧市内
90代	✓			✓		✓			✓	✓	✓		✓					♀		♀		
80代	✓	✓	✓	✓	✓	□	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓			♀		♀	
70代	✓	✓	✓	✓	✓		✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	♀				♀
60代	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	♀	♀	♀	♀	
50代	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	♀	♀			♀	♀
40代	✓	✓	✓	✓	✓	□	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	♀				♀
30代	✓	✓	✓	✓	✓		✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	♀	♀	♀	♀	♀	♀
20代																	♀	♀	♀	♀	♀	♀

凡例  
HHHH  
HLLL  
HHLL  
LHLL  
LHHH

<図 2：3 拍名詞第 4 類「宝が」のアクセント>

3拍名詞第7類：(この)鯨は

	池田町 三瓶	池田町 津田	井川町 辻	三加茂町 加茂	三加茂町 江口	半田町 半田	真光町 真光	穴吹町 穴吹	川田町 川田	山川町 山川	山川町 山瀬	川島町 宇	川島町 川島	高森町 高森	輪島町 輪島	輪島町 牛島	石井町 須庄	石井町 石井	徳島市 徳島	徳島市 徳本	徳島市 佐古	徳島市 旧市内
90代	□			□		□			□	□	□		□					□		□		
80代	□	□	□	□	□	□			□	□	□	□	□	□	□	□			□		□	□
70代	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
60代	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
50代	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
40代		□		□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
30代	□		□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
20代																						

凡例  
LLLL  
LHLL  
LHHH

<図 3：3 拍名詞第 7 類「(この)鯨は」のアクセント>

図 2・3<sup>7)</sup>にある通り、前体系の保存は、高年層から若年層に至るまで徹底しており、京阪神地区で起こっている変化に同調する兆しは見られない。

<sup>7)</sup> どちらの図も、村田 (2010) から。図 4・5・6 も同様。



<表 5 : 徳島型の 2 拍動詞>

第 1 類	5 段活用	売る、置く、買う、泣く	HH
	1 段活用	着る、煮る、似る、寝る	
第 2 類	5 段活用	打つ、書く、切る、飲む	LH
	1 段活用	得る、来る、出る、見る	

<表 6 : 徳島型の 3 拍動詞>

第 1 類	5 段活用	歌う、囲む、使う、並ぶ	HHH
	1 段活用	植える、着せる、負ける	
第 2 類	5 段活用	余る、思う、泳ぐ、困る	HLL / HHH
	1 段活用	落ちる、起きる、建てる	HLL / LLH
第 3 類	歩く、はいる		LLH

2 拍動詞は表 5、3 拍動詞は表 6 の通りである。既に述べたが、3 拍動詞第 2 類を HLL と発音するところに、現代京都アクセントの体系の前体系を保存している。しかし、図 4・5 を見れば分かるように、保存しているのは高年層のみで、中年層及び若年層は京阪神地区のアクセントと同じく、5 段活用は HHH、1 段活用は LLH と発音する。

3拍動詞第2類:余る

徳島市 三軒	志田町 志田	井川町 井	三拍動詞 加茂	三拍動詞 江口	半田町 半田	真光町 真光	穴吹町 穴吹	山田町 山田	山川町 山川	山川町 山	川島町 学	川島町 川島	鴨島町 西森	鴨島町 鴨島	鴨島町 生島	石井町 浦庄	石井町 石井	徳島市 国府	徳島市 巖本	徳島市 佐古	徳島市 旧市内	
90代	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	⊙	⊙	/	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	90代
80代	/	/	/	/	⊙	/	/	/	/	/	/	/	⊙	⊙	/	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	80代
70代	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	70代
60代	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	60代
50代	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	50代
40代	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	40代
30代	/	/	/	⊙	⊙	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	⊙	/	/	/	30代
20代	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	20代

HHH	/
HLL	⊙
LHL	○

<図 4 : 3 拍動詞第 2 類「余る」のアクセント>

3拍動詞第2類:起きる

	池田町 三原	志田町 志田	井川町 井	三加茂町 加茂	三加茂町 五口	半田町 半田	真光町 真光	穴吹町 穴吹	山川町 川田	山川町 山田	山川町 山原	川島町 学	川島町 川島	鴨島町 酒原	鴨島町 鴨島	鴨島町 牛島	石井町 源江	石井町 石井	徳島市 源江	徳島市 徳本	徳島市 佐古	徳島市 田市内	
90代	田			田		田			田	◎				◎				◎			◎		90代
80代		田	田	△	田	△	田					田	田		◎	◎			◎		◎		80代
70代	田	△			△			田					◎		◎	◎		◎					70代
60代	田	田	田	田	田	田	△									◎			田	田	田	田	60代
50代	△	田	田	△	田	田		田	田	◎			◎	田	田		田	田					50代
40代		田			◎	田	田			田						田			田				40代
30代	△		田	△	田	△		田		田			田	田	田		田	田	田	田	田	田	30代
20代									田			田					△						20代

凡例
HLL
LHL
LLH
LLL
◎
△
田
◎

<図 5 : 3 拍動詞第 2 類「起きる」のアクセント>

1.2 讃岐式アクセントー池田型の実態

県北西部にみられる讃岐式アクセント池田型とは、2拍名詞の統合状況が 4 (1・3/2/4/5) となっているものを指す。上野善道 (1987) によると、讃岐式アクセントは香川県と徳島県西部に分布しており、音調型によって高松型・丸亀型・観音寺型の 3 種に分類され、観音寺型のアクセントは下降式音調 (i) を有しているとされる。福良/村田 (2009) では、池田型は観音寺型に似たアクセント体系を有しているという結論に至ったため、池田型にも下降式音調がある可能性は高いと思われる。ただ、式対立の観点から考えると、当地域の上昇式に対立するもう一方の式が平進式であるか下降式であるかは音韻論的には特に意味を持たないのでこの議論については別稿に譲ることにしたい。

<表 7 : 池田型の 1 拍名詞>

第 1 類	蚊、毛、血	H、H-L
第 2 類	葉、日、矢	H、H-L
第 3 類	絵、木、根	L、L-H

1 拍名詞は表 7 の通りである。福良/村田 (2009) の結果を見る限り、池田型は、徳島型と違って 1 モーラ語を長音化して 2 モーラで発音することはそれほど盛んではないらしい。特に第 1 類と第 2 類については、香川県側の讃岐式アクセントでは長音化がよくあらわれるが、徳島県側の讃岐式アクセント (つまり池田型) では殆ど聞かれないようである (第 2 章で詳述)。

<表 8：池田型の 2 拍名詞>

第 1 類	竹、鳥、箱、端、鼻、水	HH、HH-H
第 2 類	歌、音、北、梨、夏、雪	HL、HL-L
第 3 類	朝、足、犬、亀、花、耳、山	HH、HH-H
第 4 類	跡、息、糸、海、数、肩、空、箸	LH、LL-H/LL-L
第 5 類	秋、井戸、声、猿、鍋、窓	LH、LH-L

<表 9：池田型の 3 拍名詞<sup>8</sup>>

第 1 類	魚、車、都、南	HHH、HHH-H
第 2 類	二つ、二人	LHL、LHL-L
第 3 類	サザエ、力	HLL、HLL-L
第 4 類	表、男、鏡、宝	HHH、HHH-H
第 5 類	油、五つ、いどこ	HHH、HHH-H
	姿、錦、きゅうり	HLL、HLL-L
第 6 類	兎、蛙、雀、鼠、狐	LLH、LLH-H
第 7 類	苺、後ろ、兜、鯨、菓	LHL、LHL-L

2 拍名詞は表 8、3 拍名詞は表 9 の通りである。池田型では、3 拍名詞の同一類内で語によってアクセントが異なる場合があり、類別体系を適応するのに無理があるように思われる。第 6 類について、京阪式アクセントのように助詞がついた場合に上昇位置を後ろに送ることはせず、名詞単独のアクセントを保持するところに、池田型の特徴がある。

<sup>8</sup> 村田（2010）の調査結果をもとに作成した。ここで挙げた語は右欄のアクセントで発言されることを確認しているが、ここに挙げていない語は同一類内であっても同じアクセントを持つとは限らない。

<表 10：池田型の 2 拍動詞>

第 1 類	5 段活用	売る、置く、買う、泣く	HH
	1 段活用	着る、煮る、似る、寝る	
第 2 類	5 段活用	打つ、書く、切る、飲む	LH
	1 段活用	得る、来る、出る、見る	

2 拍動詞は表 10 の通りである。一般に、讃岐式アクセント丸亀型では第 1 類は HL となるが、地理的により池田型に近い観音寺型では HH であり、観音寺型によく似た体系を持つ池田型も HH となる（福良/村田・2008）。

<表 11：池田型の 3 拍動詞>

第 1 類	5 段活用	歌う、囲む、使う、並ぶ	HHH
	1 段活用	植える、着せる、負ける	
第 2 類	5 段活用	余る、思う、泳ぐ、困る	LLH/LHL
	1 段活用	落ちる、起きる、建てる	
第 3 類	歩く、はいる		LLH

3 拍動詞は表 11 の通りである。第 2 類 1 段活用は、LLH で発音される場合と、LHL で発音される場合がある。図 5・6 を見ると、LLH と LHL のどちらが選ばれるかということに地域や世代は関係ないことが分かる。

3拍動詞第2類：落ちる

	池田町 三郷	池田町 赤田	井川町 辻	三加茂町 加茂	三加茂町 江口	半田町 半田	真光町 真光	穴吹町 穴吹	山川町 山川	山川町 山川	山川町 山瀬	川島町 字	川島町 川島	鶴島町 西井	鶴島町 鶴島	鶴島町 牛島	石井町 津庄	石井町 石井	徳島市 藤井	徳島市 藤本	徳島市 佐古	徳島市 旧市内	
90代	△			田		田			田	◎	◎			◎				◎			◎		◎
80代		田	田	△	田	△	田					田	田		◎	◎			◎		◎		◎
70代	田	△			△			田	田				田				◎						◎
60代	田	田	田	田	田	田	△		田	田			◎	田				田	田	田	◎		◎
50代	△	田	田	△	△		田	△	田	田			◎	田	田		田	田			田	田	田
40代		△				◎		田					田			田			田				田
30代	△		田	△	田	△		田	田			田	田	田	田		△	田	田	田	田	田	田
20代									田														

凡例

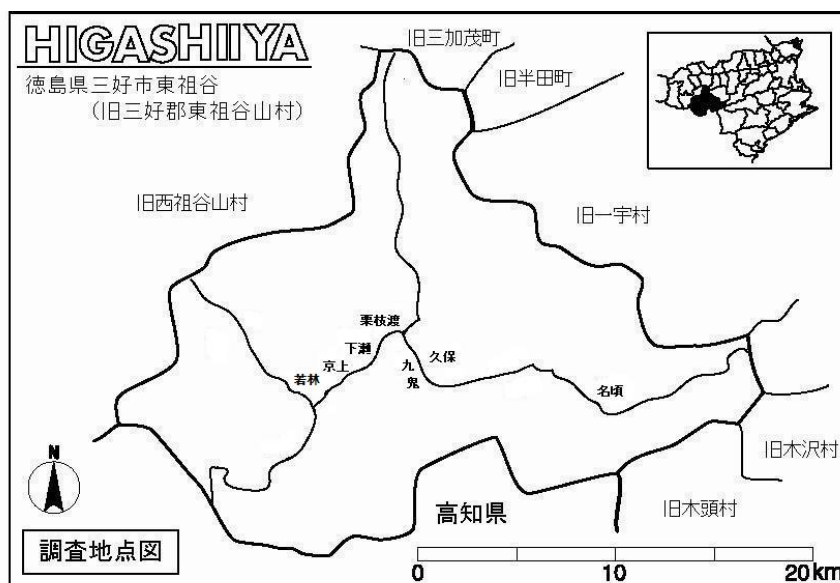
- ◎ HLL
- ◎ LHL
- ◎ LLH
- ◎ LLL

<図 6：3 拍動詞第 2 類「落ちる」のアクセント>

### 1.3 変種アクセントの実態

#### 1.3.1 垂井式アクセントの実態

三好市西祖谷山村・東祖谷山村・那賀郡那賀町木頭（旧木頭村）などの山間部では垂井式アクセントなどの京阪式アクセントの変種が聞かれる。ここで聞かれる垂井式アクセントとは、京阪式アクセントから平進／上昇の式対立をなくしたものである。村田（2012a）によると、東祖谷、少なくともその中央部では上昇式に所属する語の、上昇性が既に消滅しており、式対立がない<sup>9</sup>。生田（1951）及び村田（2012a）の分類によると、東祖谷のアクセントは垂井式-C型となる。垂井式-C型とは、1拍名詞の統合状況が2（1・3／2）、2拍名詞の統合状況が3（1・4／2・3／5）となるものを指す。



旧東祖谷山村

< 図 7 : 東祖谷山村の集落<sup>10</sup> >

概略は上記の通りであるが、村田（2012a）をもとに、東祖谷山村の集落間の違いについて詳述する。調査は2006年から2007年にかけて行った。調査地点は東祖谷山村に存する七つの集落で、集落名は、久保（くぼ）、九鬼（くき）、栗枝渡

<sup>9</sup> ただし、集落間でアクセント体系が異なる場合があるため、垂井式アクセント分布地域については改めて詳細な調査を行う必要がある。

<sup>10</sup> 岸江編（2008）より引用。地点番号は集落名に置き換えた。

(くりすど)、下瀬(しもせ)、京上(きょうじょう)、若林(わかばやし)、名頃(なごろ)である。それぞれの場所は前頁図7に示している。線で表したのは河川である。話者は各集落の生え抜きに限った。

1拍名詞を見ると、第1類については、久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林ではL-Hが多数、名頃はL-H・H-Lとなっている。第2類は全てH-L、第3類はL-Hとなっている。従って、1拍名詞の類の統合数は、久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林は2(1・3/2)、名頃は2(1・2/3)となる。2拍名詞については、全ての地点で第1類はLH-H、第2類・第3類はHL-L、第4類はLH-Hになっており、第5類はLH-Lが多数である。但し、名頃の話者からは第4類にLH・LL-Hが聞かれるなど、名頃では京阪式アクセントの面影が見られることが多々あった。3拍名詞についても同様の傾向が見られた。

以上のように、名詞については、名頃に京阪式アクセントの面影が見出せるのは特筆しておくべきポイントであろう。これは名頃が地理的にも他の集落から離れており、且つ東寄り(京阪式アクセント使用地域に近い)に位置することからも、不自然ではない。

2拍動詞第1類について、名頃の話者はHLと発音するのが優勢であった。これは香川県側の讃岐式アクセントと同じである。また、3拍動詞のアクセントはLHLと発音する。即ち、名頃という集落は、動詞の一部について讃岐式アクセントを有するのである。名頃の動詞のアクセント体系を調べたものに上野和昭(2000)があるが、そこで述べられている名頃の動詞アクセント体系についての記述についても、筆者の意見と論旨を異にするものではない。

以上、同じ東祖谷山村でも、久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林のアクセント体系と、名頃のアクセント体系は異なる。名頃のアクセント体系は、名詞は京阪式アクセント、動詞は讃岐式アクセントの色を見せるという複雑なアクセント体系を持つものなのである。

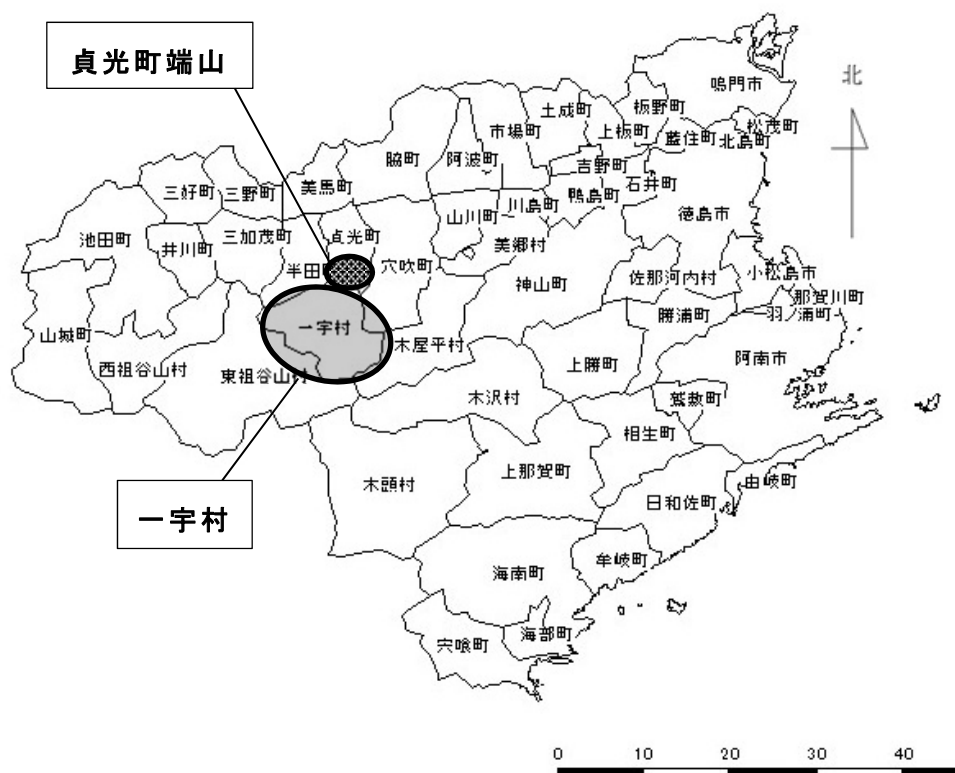
また、久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林と名頃でアクセント体系が異なることは式の対立の有無という点からも指摘出来る。京阪式アクセントでは、低く起こる語は「この」等に接続して句中にあっても低起性を保つものとされているが、東祖谷山村、少なくとも久保・九鬼・栗枝渡・下瀬・京上・若林では低起性が既に消滅しており、対立がない。名頃と菅生の間には式の対立の有無の境界線

を引くことが出来そうである。

### 1.3.2 山城谷アクセントの実態

徳島県西部平野部において、美馬郡つるぎ町一字・貞光・半田、三好市山城町では、讃岐式アクセントの変種である山城谷アクセントが聞かれる。山城谷アクセントとは、2拍名詞の類の統合状況が3(1・3・5/2/4)となっているものを指す。

以下、筆者が行った一字と貞光の調査結果をもとに、それぞれの山城谷アクセントの特徴について詳述する。



<図 8：貞光町端山と一字村の位置>

#### 1.3.2.1 貞光の山城谷アクセントの実態

貞光町とは、現在のつるぎ町字貞光にあたる。吉野川中流域の南岸に存在し、西に半田町、東に穴吹町、南に一字村と隣接し、吉野川を挟んで美馬町と向かい合っている。貞光町北部は平地、南部は山地となっており、前者は貞光町貞光、後者は貞光町端山（はばやま）というように区別される。貞光町貞光では池田型

アクセントが聞かれるが、貞光町の大部分を占める貞光町端山では讃岐式アクセントの変種が聞かれる（村田・2010 他）。これは先行研究でも明らかにされており、貞光町貞光と貞光町端山のアクセントが異なることは森（1958）、石田・岸江（2001）でも言及されている。森（1958）では、「三音節」（原文ママ）の3拍動詞第1類5段活用がHLLになる点において、讃岐式アクセントとも山城谷アクセントとも異なると指摘されている。他の山城谷アクセントが分布する地域（山城町・一字村など）では3拍動詞の統合状況は1（1・2・3）で、音調はLHLとなっているが、貞光町端山の場合は統合状況が2（1/2・3）で、音調は第1類がHLL、第2類及び第3類がLHLとなっているというのである。この点が端山の特徴である。但し、徳島県山間部のアクセントは音調が激しくユレる。

ここで用いるデータは、筆者が2011年に徳島県旧貞光町端山<sup>11</sup>で行ったアクセント調査で得たものである。話者は75歳以上<sup>12</sup>で、父母共に端山の出身、自身も端山生まれ端山育ちの人に限った。

論点は、2拍名詞第1類・第3類・第5類が本当に統合しているか（同質のものなのか）ということである。第5類は安定してLH、LH-Lが聞かれるが、第1類と第3類は基本的にLH、LH-Lが聞かれるものの、HH-H、LH-H、LH-Lの間でユレが生じている。第1類と第3類は、元々讃岐式アクセントでHH-Hだったものが下降式の影響を受けて有核化し、HH-Lになったところに語頭低下が起き、LH-L化したと考えるのが自然である。但し、これはアクセントの自律変化のみに目を向けた考え方である。これだけでは貞光町端山のアクセントは解き明かせない。

貞光町端山のアクセントは山城谷アクセントであり、森（1958）が指摘したように2拍名詞の統合状況は3（1・3・5/2/4）である。但し、第5類は表面上統合されているように見えるだけで、その振る舞いは第1類及び第3類とは異なると筆者は考える。そして、第1類及び第3類はユレ、第5類がユレない理由について言語地理学的に解釈が可能である。北に貞光町貞光（池田型アクセント）があり、南に一字村（山城谷アクセント）があるという地理的特徴から言語接触を起し、両アクセントの音調で異なる部分、つまり第1類及び第3類がユレてい

<sup>11</sup> 以下、説明の便宜上、「旧」表示を省き、市町村合併前の名称を用いる。他の地名も同様。

<sup>12</sup> 2011年当時。



ということが今回の調査結果から分かった。第5類は両アクセントで同じ音調であるため、安定している。つまり、端山の地理的特徴が、ユレの激しいアクセントを生み出していたのである。

### 1.3.2.2 一字の山城谷アクセントの実態

使用するデータは2010年に集めたもので、一字村生え抜きの84歳と75歳<sup>13</sup>のインフォーマントから得た。2拍名詞の統合状況は山城谷アクセントそのものであり、統合数は3で、(1・3・5/2/4)となっている。それぞれの音調は表12の通りである。3拍名詞は同一類内で異なるアクセントが聞かれる(表13)。

<表12：一字アクセントの2拍名詞>

第1類	
第3類	LH、LH-L
第5類	
第2類	HL、HL-L
第4類	LH、LL-H

<表13：一字アクセントの3拍名詞>

第1類	筏、柳、鯛、飾り、霞、形、着物、煙、子牛、都、氷、魚、机、鼻血、羊	x) LHL/LHL-L 或いは
第2類	間、小豆、毛抜き、釣瓶、蜥蜴、二つ、二人	y) LHH/LHH-H
第3類	黄金、小麦、力、二十歳、岬	HLL/HLL-L
第4類	頭、恨み、男、思い、表、女、言葉、刀、宝、鉄、東、光、袋、仏、鏡	LHL/LHL-L
第5類	朝日、命、胡瓜、心、姿、涙	x) LHL/LHL-L 或いは y) HLL/HLL-L

<sup>13</sup> 2010年当時。

第6類	兎、鰻、鳥、狐、高さ、鼠、雀、背中	LLH／LLL・H
第7類	苺、後ろ、蚕、鯨、薬、病、兜	LHL／LHL・L

### 1.3.3 出合アクセントの実態

三好市池田町出合のみ、京阪式アクセントや讃岐式アクセントとは異なる出合アクセント（2拍名詞の類の統合状況は3（1・2・3／4／5））が聞かれる。上野善道（1987）によると、山城谷アクセントと同様に、出合アクセントも下がり目の位置だけで解釈出来るもので、体系的には東京式アクセントと同じであるとされている。音調のユレが激しく、実態を掴むのが困難なアクセントである。

## 1.4 まとめ

以上が徳島県下に分布する諸アクセントの実態である。徳島県東部の徳島型は安定しているが、徳島県西部に分布する池田型・垂井式-C・山城谷・出合アクセントはユレが激しく、音調型や体系を定めるのが非常に難しい。また、山城谷地域の山城谷アクセント及び出合地区の出合アクセントについては、更に詳細な調査を行う必要がある。

## 第 2 章 研究史

---

本章では徳島方言アクセントに関する先行研究について体系別にまとめる。2.1 では徳島県全域を扱った研究について詳述する。2.2 では徳島型の 2.3 では池田型の特徴について論じたものを記す。2.4 では変種アクセント 3 種について報告したものを取り上げる。2.5 は本章のまとめである。

### 2.1 徳島県下の諸アクセントの研究

金田一（1954）「東西両アクセントのちがいが出来るまで」をはじめとして、先学諸氏の研究によって四国方言のアクセントが徐々に明らかにされ始めて以来、徳島県のアクセントについてもその様相が記述されるようになった。平山（1957a）「四国方言のアクセント体系とその系譜 付．アクセント境界線」では地図付きで四国方言のアクセントの全貌が描かれた。1950 年頃を機に、徳島方言のアクセントが巨細に渡って記述され始めたのである。

平山（1957a）が出版される前年、山名（1956）「徳島県下の音調」が発表された<sup>14</sup>。これは 1955 年 5 月に兵庫方言学会発会式で述べられた内容をまとめたもので、徳島県下を「京都式音調（主流音調と仮称）と高松式音調（特殊音調と仮称）とに分け、型及び型の相を中心に記述」したものである。徳島県下の京阪式アクセント徳島型と讃岐式アクセント池田型の体系をはじめて明確に描き出したものと言えるだろう。また、山城谷アクセントの体系についても記述されている。

続いて、宮城<sup>15</sup>（1961）「香川・徳島」が発表された。『方言学講座第 3 巻 西部方言』に収録されたもので、これは香川・徳島の音声・音韻・アクセント・文法についてまとめられたものである。徳島方言のアクセントについては、徳島県名西郡神山町のアクセントについて記述されている。また、共通語化という観点

---

<sup>14</sup> 山名氏は 1954 年に「四国方言アクセントの研究（その 1・2）」も発表している。

<sup>15</sup> 宮城氏は 1956 年の『徳島大学学芸学部紀要人文科学』5 号に「徳島方言概観」を発表し、その中でも徳島方言の音声、語法について述べている。

からも書かれており、東京方言との比較が行われている。

少し時を戻して 1958 年、平山（1957a）が出版された翌年、森氏によって「徳島県のアクセント概観」が発表された。『神戸大学国文論叢』第 7 号に掲載されたこの論文は、徳島県全体のアクセントの型及び型の相をまとめたものである。森氏のこの研究成果により、当時の徳島県下のアクセントは記述され尽くされたと言っても過言ではない。森（1958）では、徳島式・池田式・出原式・北川式・出合式・山城谷式の 6 つに分けてアクセント体系を記述し、それぞれから数地点設定して調査した結果を記録・分析している。また、この報告は 1982 年に国書刊行会が出版した『講座方言学 8 —中国・四国地方の方言—』の中にも収録されており、「徳島県の方言」と題されて、アクセントのみならず徳島方言の音声・音韻、文法についても基本的なところがまとめられている。

その後、暫く徳島県のアクセントについて調査する者はなかった。

1968 年、日本方言研究会第 6 回研究発表会で、加藤信昭氏が発表した「境界地帯におけるアクセントの問題—吉野川流域を中心として—」が大いに注目され、議論の的となった。本論文第 3 章で詳述するが、吉野川流域のアクセント境界と様相に関する報告であった。しかし、この問題に対する明確な答えは当時発表されず、今日にいたる。本論文の第 3 章では、この問題に対する一つの答えを用意している。

また暫く空白の期間が続き、1985 年に高田氏によって『徳島の方言』が出版された。これは郷土の研究者が方言について書いたもので、辞書的な体裁を成しており、アクセントを示す記号が付されているが、アクセント記述については間違いが多い。方言辞書としては優れたものである。

徳島県だけを取り扱ったものではないが、1987 年に上野善道氏によって「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布（2）」が発表され、徳島県西部における池田型アクセントの詳細が、下降式音調の可能性も含めて紹介された。

1980 年代も終わりに差し掛かったところ、上野和昭氏が徳島大学に着任した。それから、上野和昭氏によって、徳島方言のアクセントに関する多くの論文・資料が発表されることとなった。1989 年にアクセント史資料研究会が編集した『ア

クセント史関係方言録音資料<sup>16</sup>』に、上野和昭氏が調査した「徳島アクセント」が収録されている。これは1989年に徳島市在住者（明治39生まれ）のアクセントを調査・記述したものである。また、上野和昭氏は1991年に仙波氏、森氏と共に三好郡山城谷のアクセント調査をしており、連名で著された「徳島県三好郡山城谷アクセントの動向—二拍名詞を中心に—」が発表されている。これについては2.2で述べる。また、2年後には上野和昭/仙波（1993）「徳島市における三拍動詞アクセントの変化の実態」が報告されている。上野和昭（1994b）「徳島市における四拍動詞アクセントの変化の実態」はその続編である。上野和昭/仙波（1993）は徳島市において、3拍動詞第2類がどのように変化しつつあるかを追ったものである。徳島型アクセント地域では、少なくともこの論文が発表された当時には、3拍動詞第2類5段活用語がHLLからHHHに、1段活用語がHLLからLLHに変化しつつあることが分かっていた。その事実から、変化の過程を報告しようとしたものが上野和昭/仙波（1993）である。上野和昭/仙波（1993）では、細かく年代を区切った調査により、5段活用語の変化より1段活用語の変化の方が数十年早く進行しているとの結果が報告された。上野和昭（1994b）は4拍動詞第2類がどのように変化しつつあるかを追ったものである。徳島型の地域では、4拍動詞第2類はHLLL（またはHHLL）からHHHHに変化しつつあること、そしてこの変化について、活用の種類とは別のレベルで変化のまとまりが出来ていることが報告された。1997年には、徳島方言の総論として上野和昭氏が編集した『徳島県のことば』（日本のことばシリーズ36）が明治書院から出版された。徳島方言の音声・アクセント・文法を易しく、しかし詳細に解説したもので、巻末には「方言基礎語彙」として徳島方言の語彙を集めたものが収録されている。この「方言基礎語彙」にはそれぞれの語のアクセントも記されている。

1999年には、中井氏・高田氏・大和氏共著の『徳島市方言アクセント小辞典—方言アクセント小辞典（3）—』<sup>17</sup>が科研報告書として発表された。これは類別語

<sup>16</sup> 『アクセント史関係方言録音資料』には、アクセント史と関連の深い土地11箇所（香川県伊吹島、高松市、佐柳島、高知県高知市弥生町、南国市東崎、愛媛県魚島、和歌山県田辺市、龍神村、大阪府大阪市、京都府烏間三条、柳馬場蛸薬師）のアクセントを記録したものも収録されている。

<sup>17</sup> 同一科研の報告書には、『高知市方言アクセント小辞典』（1997）、『香川県方言アクセント小辞典』（1998）、『京都市方言アクセント小辞典』（2001）、『兵庫県南部方言アクセント小辞典』（2001）などがある。

彙に基づいて徳島市生え抜きの高年層の方言アクセントを記述し、辞書化したものである。

2001年に、岸江氏と石田氏が連名で「徳島県諸方言アクセントについて」を発表した。これは、森（1958）以来の、徳島県下全域のアクセントを調査・記述したものである。森（1958）と岸江/石田（2001）を比較することで、約40年間の変化を見ることが出来る。言語地理的観点から徳島方言のアクセントについて述べられたもので、県下各地で行われた調査結果がアクセント地図（470枚）として詳細に描かれている。それぞれの体系の特徴を簡潔に記述しており、徳島県下の諸アクセントの記述は、これを見ればほぼ把握することが可能であろう。

徳島県下全域の諸アクセントの記述に一旦の目処がついてからは、異体系アクセントが並立するという特殊な状況下で発生する言語事象に目が向けられることとなった。

真田・武田・余（2002）「徳島・吉野川流域におけるアクセントの現在」では、吉野川北岸を対象に調査が行われており、それぞれの地点に対して社会言語地理学的な知見を以って分析されている。岸江/仙波/岡田/村田（2010）『徳島県吉野川流域アクセントの動態—吉野川流域南岸グロットグラム調査報告（2）—』は吉野川流域南岸部を対象としており、両者の報告を併せて見ることで吉野川流域の全容を知ることが出来る。それぞれ詳しいグロットグラムが掲載されており、岸江他（2010）では語別に約500枚のグロットグラムを見ることが出来る。

最も新しい研究論文として、岸江/村田（2012）「京阪式アクセントにおける2拍名詞の類の統合状況と低起無核型の消失傾向—大阪・奈良・三重・徳島方言を中心に—」がある。これは本論文の付録論文として収録してあるので詳細は後述するが、近畿中央部の諸方言の状況を見ながら、徳島方言においても2拍名詞第4類がLL-HからLH-Lに変化しつつあることを、実証的に示したものである。

## 2.2 京阪式アクセント—徳島型の研究

徳島型の研究で代表的なものに、先に詳細を示した上野和昭/仙波（1993）及び上野和昭（1994b）がある。また、上野和昭氏が1997年に発表した「接合アクセントから結合アクセントへ」という論文も、史的観点から徳島型を位置づけたという点で大きな意義がある。上野和昭（1997b）では、複合語について、徳島型が

近畿中央部の京阪式アクセントより古い形を残していると述べてられている。たとえば「飛ぶ+起きる」の複合動詞「飛び起きる」は近畿中央部の京阪式アクセントでは HHHHH になるが、徳島型では HHLL となり、後部要素の動詞のアクセントが保持されている。これは、複合動詞の結合度合が弱いことに原因があり、接合アクセントと呼ばれる状態で、結合アクセントとなる一段階前にあたりとされている。この点からも、徳島型は近畿中央部の京阪式アクセントに比べて古色を湛えているといえる。

### 2.3 讃岐式アクセントー池田型の研究

山名（1956）は徳島県下を「京都式音調（主流音調と仮称）と高松式音調（特殊音調と仮称）」として、徳島型と池田型の存在を報告したのであるが、それを問題として捉えたのが、加藤（1968）である。本論文第3章でも詳述するが、加藤（1968）は吉野川流域のアクセントの境界地帯に注目した最初の論文である。加藤氏は吉野川流域の京阪式 I アクセント及び京阪式 IV アクセントの境界地帯を調査し、その詳細を報告した。境界地帯においては、両アクセントの性格が混じり合っていること、またその混じり方の様相が述べられている。当時の調査によると、脇町・穴吹町・美馬町・半田町が両アクセントの境界地帯であったようである。更に、加藤氏は体系の違いがあらわれる類（2拍名詞第3類・2拍動詞第1類）について、境界地帯では、京阪式 I に従ったアクセントがあらわれるか京阪式 IV に従ったアクセントがあらわれるかが語によって異なることを報告している。そして、この同一類内の語の分裂について、音韻面からも文法的性格からも説明がつかないと結論づけている。加藤（1968）については本論文第3章で詳しく取り上げ、筆者が行った調査の結果と比較し、この40年間の吉野川中流域のアクセントの動態について考える。また、加藤氏が残した課題「同一類内での語の分裂に関する問題」を、統計的手法を用いて検討する。

1997年には、松森氏によって「徳島県脇町・三加茂町のアクセントと本土祖語のアクセント体系」が発表された。松森（1997）では、任意の方言間の距離の測り方や系統関係を考える際の一つのケーススタディとして吉野川中流域にあたる脇町と三加茂町が取り上げられている。松森氏は両地域の2拍名詞第3類及び2拍動詞第1類の同一語類内での語の分裂について詳細に報告し、また、その分裂

について、両地域のアクセント体系が一つの祖体系からの分岐・発展したものであると考えることによって説明が可能であると論じている。つまり、二つの体系がある地域で衝突して混じり合ったのではなく、元々一つであったものが変化し、それぞれに分岐して二つの体系に別れたと通時的に説明しているのである。これによると、脇町がより元になる体系に近い形を残しているということになるが、現在この論文は松森氏本人によって間違いであったとして取り下げられている。

2000年には、上野和昭氏によって、「徳島県下の讃岐式アクセントにおける動詞アクセント体系について」が発表された。これは池田型・山城谷アクセント・東祖谷山村名頃集落の垂井式アクセント・出合アクセントの動詞アクセント体系について、史的観点から考察したものである。動詞音調体系の比較から讃岐式アクセントの前体系を検討し、活用形の音調を証拠として挙げることによって徳島県側の讃岐式アクセント及びその変種の成立についてまとめている。

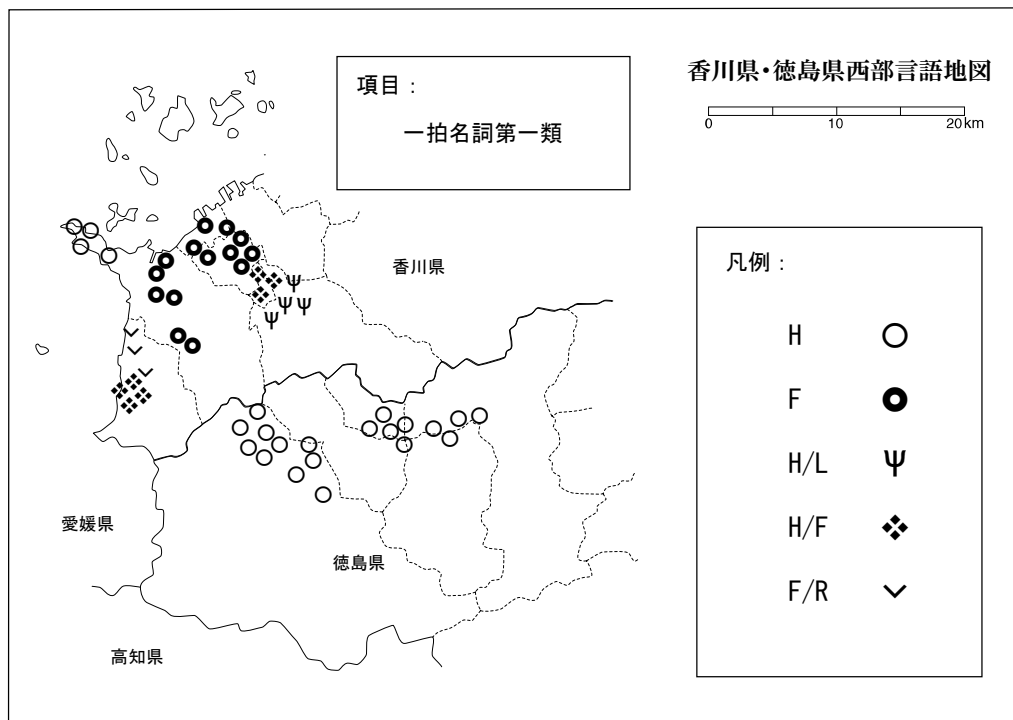
翌年には、山口(2001)「徳島県吉野川流域アクセントの解釈—下降式アクセントは実在するのか—」が発表された。山口(2001)は、加藤(1968)及び松森(1997)を再検討したものである。山口氏は加藤氏の論旨を肯定しつつ、松森氏の歴史言語学的な考え方とは異なる立場で吉野川流域のアクセントについて解釈をしている。山口氏の考えでは、吉野川流域のアクセント境界地帯について、言語地理学的変化が要因となっているとされ、更にそれは「移行性分布」の状況を示しているという。また、「下降調」について、吉野川流域に認められるものかと疑問を投げている。

2006年には、近年急速に発達しつつある音響音声学的な手法を用いて、亀田氏が「四国北東部における下降音調の音声学的比較—いわゆる「下降式」無核型と2拍目核型のF0値の動き—」を発表した。これは、伊吹島・観音寺・脇町・藍住町の諸アクセントについて、下降式無核型と言われる下降音調を高起式無核型及び有核型の音調を比較して、F0値の動きがどのように異なるか示したものである。これにより、伊吹島の下降式音調と脇町・藍住町の音調特性が異なることが客観的に証明された。

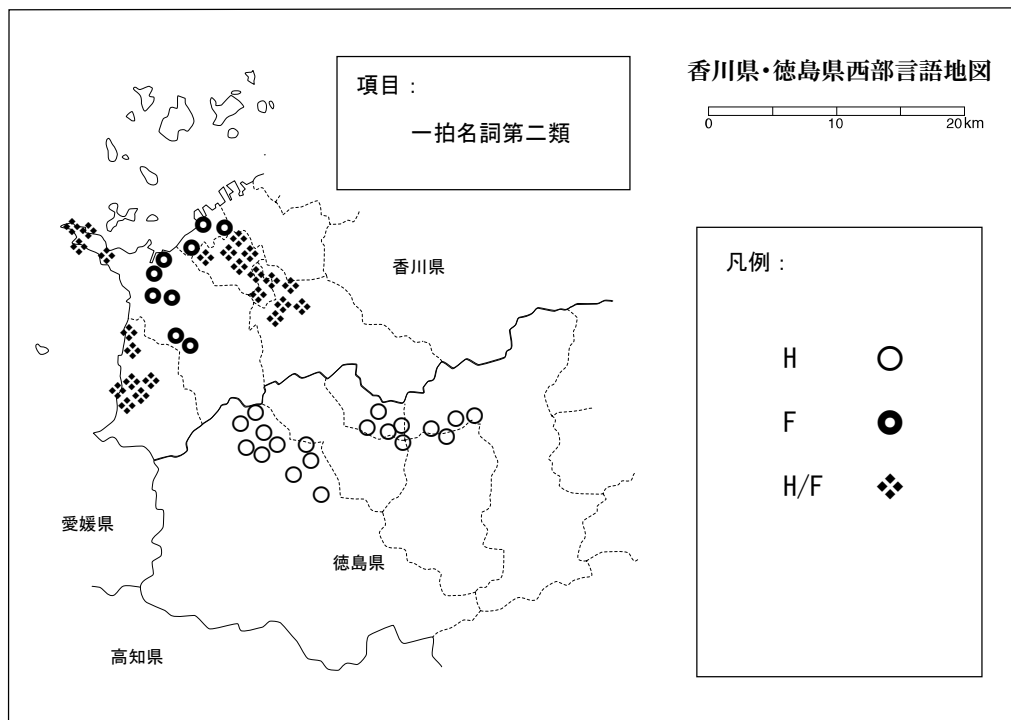
2008年に筆者は、福良氏と共著で「徳島県西部・香川県西部方言のアクセント」を発表した。福良/村田(2008)は、2008年夏の調査結果をもとに作成した127枚の方言アクセント地図を根拠に、徳島県西部の池田型と香川県西部のアクセン



トは異なる部分があると主張するものである。上野善道（1987）では、池田型の地域は「名詞に関する限り丸亀型である（動詞は観音寺に似る）」とされており、それが学会の定説であったが、福良/村田（2008）ではそうではないことを述べた。たとえば、図 9、図 10 を見れば分かるが、1 拍名詞第 1 類及び第 2 類について、丸亀型は長音化が起り易く、池田型は起り難い。観音寺型はその中間で、長音化したりしなかったりして安定しない。第 3 類は図示しないが、丸亀型は長音化が起り易く、観音寺型及び池田型は長音化したりしなかったりする状態であった。このように、1 拍名詞の長音化について、池田型と香川県西部では異なるのである。2 拍名詞は、丸亀型、観音寺型、池田型で同じ音調が聞かれた。



< 図 9：徳島香川西部の 1 拍名詞第 1 類 >

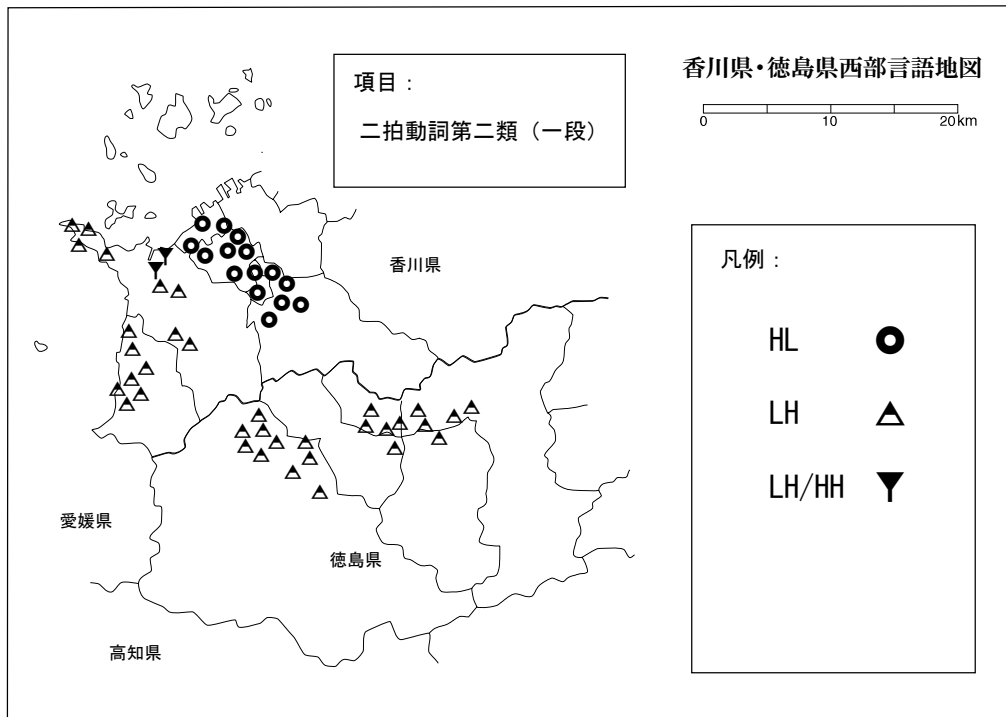


< 図 10：徳島香川西部の 1 拍名詞第 2 類 >

次に動詞についてであるが、2 拍動詞については表 14 のようになっている。こちらは「動詞は観音寺に似る」とする上野善道（1987）を追認する形になったが、玉井（1965）で丸亀型とされていた地域については一括りにして語れないことが分かった。次頁図 11 のように、詫間町は観音寺型の特徴を持ち、三野町・高瀬町は、丸亀市の丸亀型と第 2 類 1 段活用の音調が異なる。

< 表 14：徳島香川西部の 2 拍動詞の体系 >

	徳島県	香川県				
	池田型	観音寺型	丸亀型			
	徳島西部	観音寺市	詫間町	三野町	高瀬町	丸亀市
第 1 類	HH	HH	HH	HL	HL	HL
第 2 類(5 段)	LH	LH	LH	LH	LH	LH
第 2 類(1 段)	LH	LH	LH	LH	LH	HL

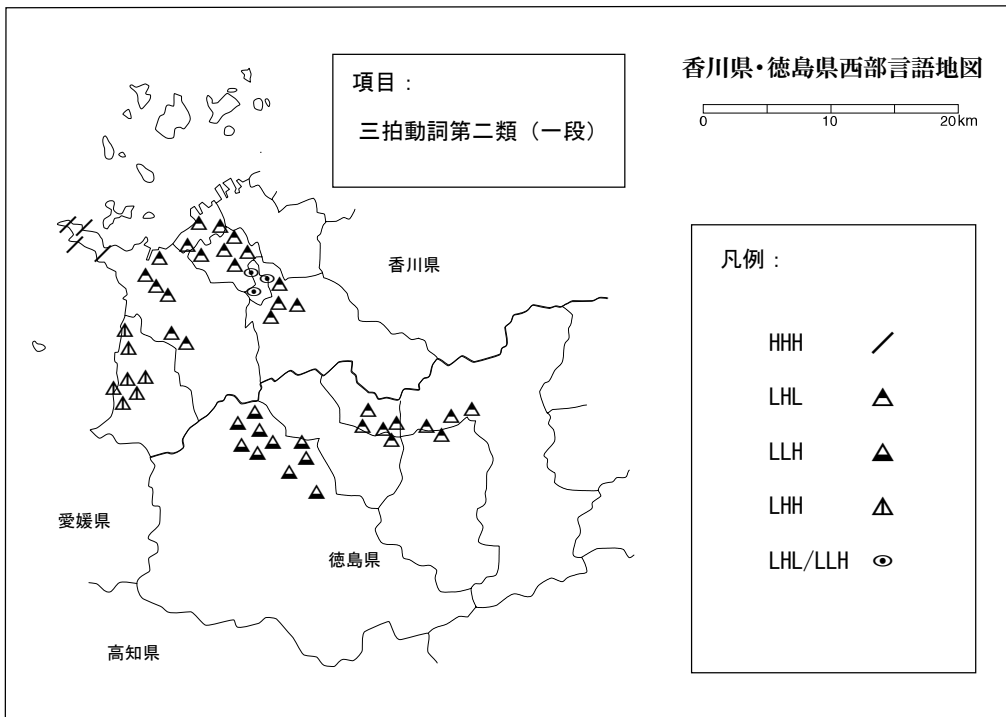


< 図 11 : 徳島香川西部の 2 拍動詞第 2 類 1 段活用 >

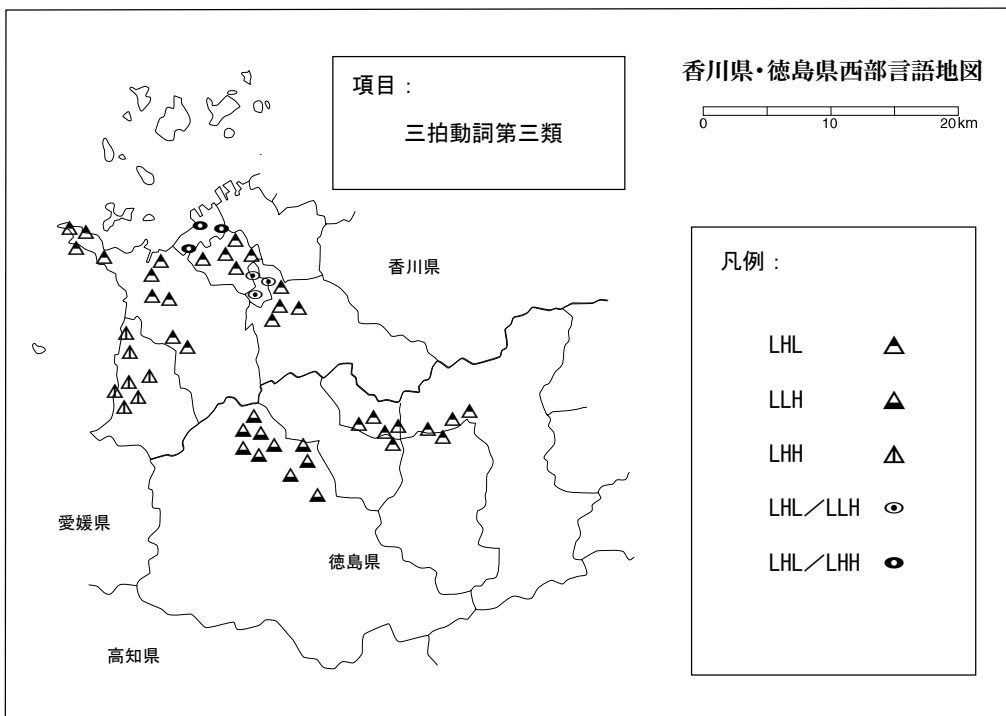
「動詞は観音寺に似る」(上野善道・1987) という主張と決定的に異なる点は、3 拍動詞の音調にある。確かに統合状況は同じであるが、第 2 類 1 段活用の音調と第 3 類の音調が、池田型と観音寺型では異なる。表 15・図 12・図 13 を見ると、観音寺型と比べて、池田型では上昇位置を遅らせるか、有核化しているのが分かる。丸亀型内を見ても、丸亀市周辺と詫間町では異なっており、詫間町は統合状況・音調ともに特殊なものになっている。理由には、詫間町は半島であるという地理的な要因が挙げられよう。

< 表 15 : 徳島香川西部の 3 拍動詞の体系 >

	徳島県		香川県	
	池田型	観音寺型	丸亀型	
	徳島西部	観音寺市	詫間町	丸亀市
第 1 類	HHH	HHH	LHL	HLL
第 2 類 (5 段)	HHH	HHH	HHH	HLL
第 2 類 (1 段)	LHL/LLH	LHH	HHH	LHL
第 3 類	LHL/LLH	LHH	LHL	LHL



< 図 12 : 徳島香川西部の 3 拍動詞第 2 類 1 段活用 >



< 図 13 : 徳島香川西部の 3 拍動詞第 3 類 >

最後に挙げる論文は、2012年に筆者が発表した「徳島県吉野川流域のアクセント—京阪式アクセントと讃岐式アクセントの境界—」である。村田（2012）は、加藤（1968）の問題を統計的手法によって解決したもので、本論文第3章で詳しく述べる。

## 2.4 変種アクセントの研究

### 2.4.1 垂井式アクセントの研究

近畿周辺部を徹底的に調査し、垂井式アクセントを総合的に記述したものに、生田早苗（1951）「近畿アクセント圏辺境地区の諸アクセントについて」がある。生田（1951）の垂井式アクセントの分類を整理すると以下ようになる。

一拍名詞：A型2（1/2・3）、B型2（1・3/2）、C型2（1・3/2）  
二拍名詞：A型2（1/2・3・4・5）、B型2（1・4/2・3・5）、C型3（1・4/2・3/5）

第1章で示した通り、徳島県下で垂井式アクセントが分布するのは三好市西祖谷山村・東祖谷山村、那賀郡那賀町木頭である。その中でも、東祖谷山村に焦点をあてたものが、村田（2008b）「東祖谷のアクセントについての一考察」及び、村田（2012a）「徳島県旧東祖谷山村のアクセント」である。村田（2008b）は東祖谷のアクセントの音調を集落ごとに詳細に記述したものであり、村田（2012a）では、そのデータをもとに、集落間でのアクセント体系の違いや式の対立の有無について論じた（本論文第1章に詳述）。東祖谷山村の垂井式は生田（1951）でいうところのC型である。徳島県下の特に山間部では語頭の低下が激しいので、生田が1951年に聞いた音調とはやや異なる（語頭が低下している）が、C型であることには変わりはない。

那賀郡那賀町木頭を調査したものに、上野和昭（1994a）「徳島県木頭村の方言アクセントについて」がある。これは年配層の体言のアクセント体系を記述した上で、若年層の調査結果から木頭村における体言アクセントの変化について論じたものである。上野和昭（1994a）の主張は、木頭村のアクセントを中央式（京阪式）から垂井式アクセント-C型への過渡的段階にあるというものである。また、若年層の動詞アクセント変化についても言及しており、木頭アクセントの成立に

ついて、東京式との接触説を否定し、近畿中央式（京阪式）から変化したものとして述べている。

#### 2.4.2 山城谷アクセントの研究

山名（1956）に山城谷アクセントのことが書かれているのは 2.1 でも述べた通りである。

山城谷アクセントの詳細をまとめたものに、上野善道（1987）がある。上野善道（1987）では、讃岐式アクセントから派生した第 3 次アクセントとして、「山城谷式・出合式・向日比式<sup>18</sup>」の 3 種類を挙げている。山城谷アクセントも出合アクセントも下がり目の位置だけで解釈出来るもので、体系的には東京式アクセントと同じであるとされている。

上野和昭/仙波/森（1991）「徳島県三好郡山城谷アクセントの動向—二拍名詞を中心に—」は、讃岐式アクセントの分派地域として注目されている山城谷において、年配層と若年層のアクセントを調査し、山城谷アクセントの動向を見るところであった。アクセント変化を自律的なものとして解釈している。

村田（2011a）「徳島県旧貞光町端山の方言アクセント」は旧貞光町南部にあたる端山の集落を調査し、言語接触の観点から 2 拍名詞第 1 類と第 3 類のユレを解釈したものである（本論文の第 1 章に詳述）。

仙波/村田（2011）「つるぎ町一字の方言」は、2010 年の臨地調査による結果を報告したもので、2 拍名詞の統合状況は山城谷アクセントそのものであり、統合数は 3 で、 $(1 \cdot 3 \cdot 5 / 2 / 4)$  となっていると報告している（本論文の第 1 章に詳述）。

#### 2.4.3 出合アクセントの研究

出合アクセントについて最初に報告したのは、森（1958）である。出合地区が 2 拍名詞の統合状況 3  $(1 \cdot 2 \cdot 3 / 4 / 5)$  という特殊なアクセントを持つ地域として取り上げられている。森（1984）「徳島県三好郡三縄（旧三縄町）出合アクセントと川崎アクセント—二音節名詞アクセント体系の変化—」ではその詳細と変化が記述されている。

---

<sup>18</sup> 岡山県玉野市向日比。

上野善道（1987）でも出合アクセントについて触れられているのは 2.4.2 の通りである。

更に、上野和昭/森（1992）「徳島県出合アクセントについて」という多人数調査の結果が発表された。上野和昭/森（1992）によると、2 拍名詞第 1 類及び第 3 類は約 90%の比率で HL-L で発音されたと報告されている。出合のアクセントは未知な部分が多く、また、ユレが激しく研究の進捗が遅れている。

公刊された報告書・論文ではないが、大和氏が 1996 年に第 35 回音声言語研究会で発表したときの配布資料「徳島県出合アクセントにおける無核語の 2 種類」も挙げておきたい。内容は、出合話者に対して、4 拍語など長い単語で調べた場合に、「(1)「何の友達か」…ナンノの後にトモダチがすなおにつき、トモダチは無核である (2)「何の学校か」…ナンノの後にガッコーが低くつき、ガッコーは無核である」ということを報告したものである。(1) / (2) は京阪式の H0/L0 と対応していそうなこと、2 拍及び 3 拍の第 1 類語でも「何の～か」のような位置では無核になることがあることなども報告されている。

## 2.5 まとめ

以上が、徳島方言アクセントに関係する先行研究のまとめである。山城谷地区の山城谷アクセント及び出合地区の出合アクセントの報告や論文が少ないので、今後の調査・進展が待たれるところである。

他に有用な先行研究として以下のものが挙げられるが、ついに入手出来なかった。

- ・勝浦義一（1951）『郷土方言の音韻的研究』、私家版
- ・森重幸（1991）「讃岐式池田型アクセントの周辺——字型二拍名詞の音調考察——」『阿波郷土会報ふるさと阿波』146

## 第3章 同一類内の語のアクセント分裂に対する

### 統計的試論

---

これまで方言アクセントの研究では統計的手法を援用することは殆どなかった。近年、言語学・日本語学・日本語教育学など方言学に隣接する分野では統計的手法を用いた研究が盛んに行われているが、伝統的な方言アクセントの研究は記述的なスタイルに重きを置いており、計量的に整理していくスタイルの研究からは遠く離れていたのである。しかし、本章が扱う言語現象はこれまでのスタイルの研究では解決が出来なかったもので、統計という新たな手法で解決を図る。

本章の構成は以下の通りである。3.1 で目的を述べる。3.2 でアクセント変化に関する前提を示す。3.3 では類例を挙げながらアクセント分裂の問題点を指摘する。アクセント境界地帯とは何なのか、どういう状態になっていることを指すのか、加藤（1968）が提起した問題、同一類内の語のアクセントが分裂する現象については、3.3.1 で説明する。3.4 では筆者の2009年調査の結果からロジスティック回帰分析を行い、仮説を検証する。3.5 は本章のまとめである。

#### 3.1 目的

本章の目的は、徳島県下のアクセント境界地帯で、同一類内の語のアクセントが分裂する現象の要因を明らかにすること、及び、加藤（1968）で解決しなかった問題について、音韻面から再検討し、更に統計的分析を加えて新しい解釈を試みることにある。

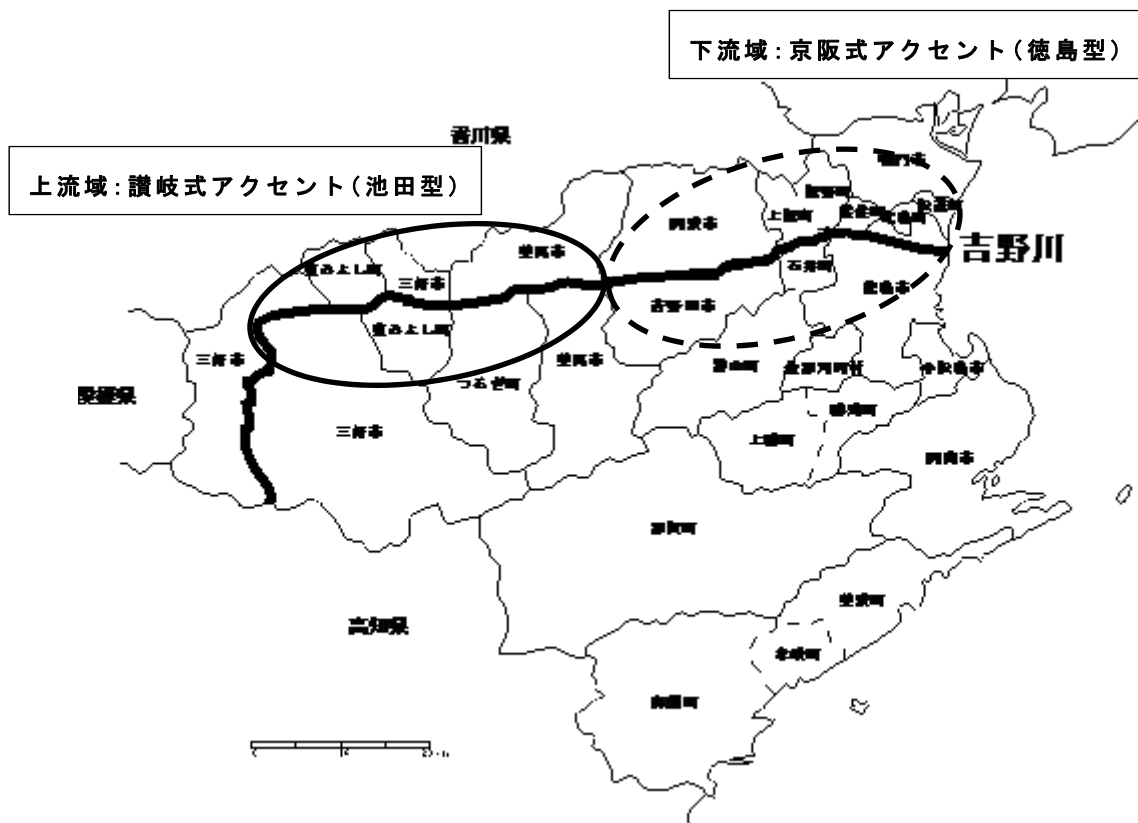
#### 3.2 前提

##### 3.2.1 徳島県吉野川流域の様相

第1章で徳島県下の諸方言アクセントについて詳述したが、ここでもう一度、吉野川流域に限って分布状況を説明しておく。徳島県下には一級河川である吉野



川が東西に一筋流れている。図 14 の通り、この吉野川の上流域では讃岐式アクセント池田型が、下流域では京阪式アクセント徳島型が聞かれる。しかし、中流域はどうだろうか。西から池田型、東から徳島型のアクセントが押し寄せてきて、中流域は両アクセントの境界地帯となっている。この中流域では池田型も徳島型もどちらも聞かれることが加藤（1968）及び筆者の 2009 年の調査から明らかとなっている。本章では、この状況を整理し、加藤（1968）の問題提起に統計的手法を以って回答する。



<図 14：吉野川流域を中心とした徳島県下のアクセントの現状>

### 3.2.2 アクセント変化の前提

『類聚名義抄』、『補忘記』、現代京都方言とアクセントの通時変化を見てみると、アクセントとは類毎に音調を変えていくものであり、同一類内の語で別の音調を持つということはまずない。たとえば「梅」という語はいつの時代でも第 1 類であり、「竹」という語もいつの時代でも第 1 類に所属する。そして第 1 類に所属す

る語は、時代によって音調は変わっても、「梅」と「竹」が違う音調で発音されることはまずない。しかし、徳島県では同一類内の語のアクセントが分裂する現象が起きている。何故、このようなことが起こるのか、また、加藤（1968）が分裂の仕方に規則性がないとしたところを、本章では見直し、規則性が確かに存在することを主張する。

### 3.3 アクセントの分裂現象

#### 3.3.1 徳島方言—加藤(1968)による問題提起—

吉野川中流域のアクセント境界地帯を観察した先行研究に、加藤（1968）がある。第1章及び第2章でも触れたが、加藤（1968）は、吉野川中流域のアクセント境界地帯で調査を行い、その結果を報告したもので、2拍名詞第3類のアクセントについて、同一類内に所属する語が音調の点で分裂を起こしていると述べている。また、分裂の仕方について、音韻面からも文法的性格からも説明がつかないと明言している。この論文が発表されてから約40年経ったが、今日までこの現象を解釈する研究はなかった。

まず、アクセントの分裂というのは具体的にどういうことなのか、説明する。吉野川中流域のアクセント境界地帯では、池田型と徳島型が衝突している。2拍名詞については、表16の通りで、池田型は統合状況が4（1・3/2/4/5）であり、徳島型は4（1/2・3/4/5）である。つまり、第3類のアクセントが両者を決定的に分ける要素なのである。第3類をHH-Hと発音すれば池田型、HL-Lと発音すれば徳島型ということになる（表16）。

<表16：池田型と徳島型の2拍名詞の音調>

	池田型	徳島型
第1類	HH-H	HH-H
第2類	HL-L	HL-L
第3類	HH-H	HL-L
第4類	LL-H	LL-H
第5類	LH-L	LH-L

加藤（1968）の報告によると、2拍名詞第3類に分類される語群は境界地帯では表17のように分裂する。左側の語群はHH（池田型）で発音され、右側の語群はHL（徳島型）で発音される。しかし、それぞれの所属語を見てみても、HHになるかHLになるか、音韻面からも文法的性格からも規則性が見いだせないとしている。

<表17：加藤（1968）の2拍名詞第3類の調査結果>

HH型（池田型）	HL型（徳島型）
足、家、池、犬、色、腕、馬、裏、 斧、瓶、草、岸、土、縄、骨 (15語)	網、泡、鬼、鍵、髪、神、櫛、靴、 雲、事、竿、坂、塩、炭、月、糖、 花、山、綿 (19語)

### 3.3.2 類例—富山方言その他の場合—

同一類内のアクセントが分裂する現象は、富山県でも起こっている（松森他・2012）。富山県のアクセントは垂井式アクセントで、徳島県と同じく2拍名詞第3類の語が同一類内で分裂している。松森他（2012）によると、2拍名詞第3類は「耳が（HL-L）」類と「山が（LH-L）」類に分かれる。分裂の仕方には明確な規則性があり、2拍目の母音が狭母音の場合と2拍目が特殊拍だった場合にはHL-L（「耳が」など）となり、2拍目の母音が広母音だった場合、LH-L（「山が」など）という音調が聞かれる。

- 2拍名詞第3類が分裂する。
  - 「耳」類（HL-L）・・・石、梨、網、鬼、犬、夏、貝、など
  - 「山」類（LH-L）・・・山、花、腕、汗、人、豆、など
- （松森他・2012）

同じ類であるにもかかわらず違うアクセントで発音されることを、松森他（2012）では音韻条件から解釈している。

- 「耳」類・・・石、梨、網、鬼、犬、夏、貝など  
2 拍目の母音が狭母音 (/i/ /u/)
- 「山」類・・・山、花、腕、汗、人、豆、など  
2 拍目の母音が広母音 (/a/ /e/ /o/)

(松森他・2012)

松森他(2012)によると、母音の広狭によってアクセントが変わるというのは、通時的に考えると、変化前は HL-L だったものが、狭母音の語は HL-L のままで、広母音の語は LH-L となる(表 18)。これは、語頭が高い発音は避けたい、つまり経済性の原理により、アクセント核は遅れる傾向にある。しかし、受け皿となるモーラの母音が、狭いと遅れられない／広いとそのまま遅れられる、ということになる。

<表 18：アクセント変化の方向と音韻条件>

変化前		変化後	変化の音韻条件
HL-L	→	HL-L	2 拍目が狭母音か、特殊拍の場合
	→	LH-L	2 拍目が広母音の場合

母音の広狭によってアクセント核の位置がずれる現象は日本の各地で起こっている。Okuda (1971) でも、富山方言、松江方言<sup>19</sup>・珠洲方言<sup>20</sup>の事例が挙げられている。富山方言については前節で紹介したので省略するとして、松江方言と珠洲方言について紹介する。

次頁表 19 にある通り、松江方言では、2 拍名詞第 3 類でアクセント核の位置がずれる現象が起こっている。

<sup>19</sup> 島根県松江市。

<sup>20</sup> 石川県珠洲市。

<表 19：松江方言の 2 拍名詞第 3 類>

第 3 類	音調	現象
花	LH	—
花が	LH-L	単語単独と同じアクセントを保持する。
髪	LH	—
髪が	LL-H	2 拍目が狭母音のため、アクセント核の位置が後ろにずれる。

但しこれは後続する語が付属語の場合のみで、動詞などの自立語が直接後続する場合はアクセント核の位置がずれることはない。

珠洲方言の場合は、2 拍名詞第 2 類と第 3 類が合流しているが、表 20 の通り、2 拍目の母音の広狭によってアクセント核の位置が異なることが報告されている。2 拍目の子音が無声子音であることが条件になっている場合もあるので、この点に注目しておきたい。

<表 20：珠洲方言の 2 拍名詞第 2 類と第 3 類>

第 2 類の語	第 3 類の語	音調	現象
肘、紙、旅	鍵、犬、鬼	HL	—
川が 胸が 音が	花が 竿が 池が	LH-L	2 拍目が広母音のとき、1 拍助詞が付くとアクセント核の位置が後ろにずれる。
橋、町 夏、雪	櫛、月 土、足	LH	2 拍目が無声子音＋狭母音のとき、アクセント核の位置が後ろにずれる。
橋が 町が 夏が 雪が	櫛が 月が 土が 足が	LL-H	2 拍目が無声子音＋狭母音のとき、1 拍助詞が付くとアクセント核の位置が更に後ろにずれる。

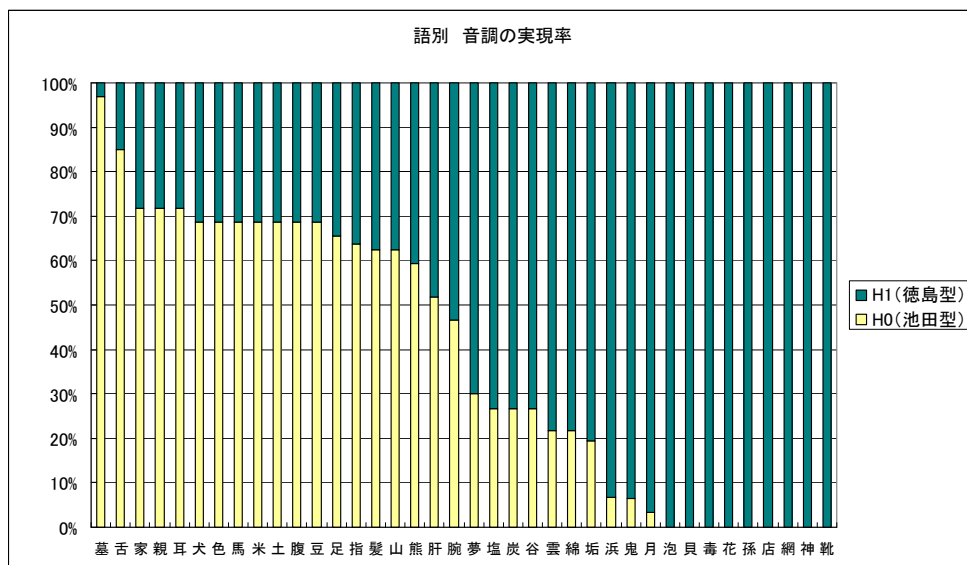
### 3.4 徳島方言における分裂現象—再考—

#### 3.4.1 2009 年調査の概要と結果

同一類内の語のアクセント分裂現象について、富山方言という類例を見たところで、徳島方言に戻る。ここでは筆者がフィールドワークによって得たデータと、先行研究を照らし合わせつつ、同一類内の語のアクセント分裂現象について、統計的に解釈する。

2009 年の夏に徳島県吉野川中流域のアクセント境界地帯においてアクセント調査を行った。調査対象は各地点の生え抜きの 60 歳以上の人（伝統的なアクセントを保持していると考えられる人）16 名である。語彙リストを読み上げて貰う形で調査を行った。調査語は 2 拍名詞第 3 類に所属する 38 語で、具体的には図 14 を参照されたい。

富山方言の規則は、徳島県下のアクセント境界地帯に起こる現象にそのまま当てはめることは出来ない。徳島県の分裂の仕方は更に複雑で、しかも個人によってユレがあり、図 15 の通り、グラデーショナルのような様相を示している。濃い色が HL（図中では H1・徳島型）の実現率、薄い色が HH（図中では H0・池田型）の実現率である。注目されたいのは、必ず HL で発音される語（靴・神・網など）がいくつかある反面、HH も HL もどちらも聞かれる語があることである。肝や熊などの語は HL/HH どちらの発音も聞かれる。約 40 年前の加藤（1968）と同じように同一類内の語のアクセントが分裂する現象が現在も生じているのである。



< 図 15 : 2009 年調査の結果 >

### 3.4.2 音韻条件の検証と仮説

徳島方言の場合、類例とは異なり、2 拍目の母音の広狭によってアクセントが変わるわけではないようである。分裂のユレを処理し、全ての結果を分析するために、ここでは統計的手法を用いる。徳島方言の現象は、富山方言の例より更に複雑で、母音だけでなく、子音の有無もアクセント変化に関わっているのはいか、という仮説の下に分析を行う。

### 3.4.3 ロジスティック回帰分析

#### 3.4.3.1 データ

このようにユレがあり、明確に分けられないものを判別するために統計的手法を援用することは有効である。本章では 3.4.2 で述べた仮説検証のために、ロジスティック回帰分析を行った。ロジスティック回帰分析を行うにあたって、一般化線型モデルとして、目的変数にアクセントのロジットを、説明変数に前述の子音と母音の構成を指定した。38 語それぞれについて 2 回ずつ発音して貰ったものをカウントしているが、今回被験者（話者）の反応は独立であると仮定してみて、ロジスティック分析を行った。話者毎に 76 個の異なる単語について発音して貰い、HH 型があらわれるか HL 型があらわれるかを調査したものをデータとして扱った。

#### 3.4.3.2 試行

「R」で行った試行とその結果は以下の通りである。

試行と結果については、次頁図 16・図 17 の通りである。C は子音、V は母音を意味する。1 拍目の子音の有無（C11・C12）がアクセントの決定に影響しているかどうかは右側のアスタリスクの有無によって分かる。アスタリスクの数が多いほど、影響度は高い。1 拍目の母音（V11）、2 拍目の子音の有無（C21・C22）、2 拍目の母音（V11）の見方も同様である。

```

modell <- glm(accent ~ C1 + V1 + C2 + V2, binomial, data = dat)
summary(modell)

## Deviance Residuals:

##      Min        1Q      Median        3Q        Max
## -1.6575  -1.2637   0.7641   0.9793   1.3616

```

< 図 16 : ロジスティック回帰分析の試行 >

```

## Coefficients:

##              Estimate Std. Error z value Pr(>|z|)
## (Intercept)  0.7966      0.2658   2.997  0.00273 **
## C11           0.2494      0.1435   1.738  0.08223 .
## C12           0.4430      0.1701   2.605  0.00920 **
## V11           0.6595      0.1235   5.338  9.38e-08 ***
## C21          -0.5161      0.2651  -1.946  0.05160 .
## C22          -0.6238      0.2466  -2.530  0.01141 *
## V21          -0.5959      0.1283  -4.643  3.43e-06 ***

```

< 図 17 : 試行の結果 >

### 3.4.3.3 結果

ロジスティック回帰分析の結果、池田型（HH）と徳島型（HL）のどちらが選ばれるかについて、子音と母音の構成が有意に影響していることが証明された。音韻条件が2種のアクセントのどちらを選ばせるかを決定しているのである。条件的に最も池田型（HH）が出やすいのが、「腕」「色」「馬」などの語であり、1拍目の子音がなく、狭母音で、2拍目の子音が有声子音であり、広母音であるものである。また、条件的に最も徳島型（HL）が出やすいのが、「貝」「恋」などの語であり、1拍目に子音を持ち、広母音で、2拍目に子音を持たず、狭母音であるものである。

徳島県下の同一類内でのアクセント分裂の仕方には、富山方言と同じく2拍目



の母音の広狭が影響していることに加えて、1 拍目と 2 拍目の子音の有無（有る場合は有声子音か無声子音か）、1 拍目の母音の広狭も影響していることが明らかとなった。

### 3.5 まとめ

加藤（1968）で問題提起されたアクセント境界地帯における同一類内のアクセント分裂現象について、本章ではロジスティック回帰分析を用いてその要因を明らかにした。ロジスティック回帰分析の結果から、母音や子音の音韻条件によって、HH（池田式）と HL（徳島式）のどちらのアクセントが選ばれるかが決定されることが分かった。本章は加藤（1968）が提起して以来誰も取り組まなかった問題に、客観的かつ明解な解答を与えた。

## 第4章 多変量解析によるアクセント境界線認定

---

吉野川が流れる徳島県は、異体系アクセントが並存する地域として知られている（第1章に詳述）。当該地域のアクセントは、これまでに加藤（1968）、森（1982・1989）、上野（1997a）、松森（1997）、石田/岸江（2001）、山口（2001）、真田他（2002）と、多くの先学の手によって様々な側面から調査・分析が行われてきた。しかし、何れの研究でも、池田型—徳島型の境界認定については主観に基づく判断がなされており、統計など客観的視点を取り入れた判断は行われていなかったように思われる。そこで、本章では県を東西に走る吉野川を軸に、池田型アクセントと徳島型アクセントの境界がどこにあるのかを明らかにするべく、従来のアクセント研究では用いられてこなかった統計的手法によって新しい境界線を提示する。

本章の構成は以下の通りである。4.1 では目的について述べる。4.2 では先行研究である加藤（1968）について整理する。4.3 では筆者が行った調査の概要について記す。4.4 ではグロットグラムと多変量解析によるアクセントデータの分析を行う。4.5 では加藤（1968）の提示した問題に対する答えを示す。4.6 は本章のまとめである。

### 4.1 目的

徳島県吉野川南岸に分布する京阪式アクセント徳島型と讃岐式アクセント池田型の境界線の位置を、統計的手法を用いて明らかにすることを目的とする。

### 4.2 先行研究

徳島県下のアクセントの分布状況を把握した上で、本章で取り上げる吉野川流域を対象とした先行研究として加藤（1968）に触れる。

加藤氏が1968年、第6回日本方言研究会において発表した論文「境界地帯におけるアクセントの問題—吉野川流域を中心として—」は、吉野川流域の

クセントの境界地帯に注目した最初の論文である。加藤氏は吉野川流域の京阪式Iアクセント（本論文では徳島型）及び京阪式IVアクセント（本論文では池田型）の境界地帯を調査し、その詳細を報告した。境界地帯においては、両アクセントの性格が混じり合っていること、またその混じり方の様相が述べられている。当時の調査によると、脇町・穴吹町・美馬町・半田町が両アクセントの境界地帯であったようである。更に、加藤氏は体系の違いがあらわれる類（2拍名詞第3類・2拍動詞第1類）について、境界地帯では、京阪式Iに従ったアクセントがあらわれるか京阪式IVに従ったアクセントがあらわれるかが語によって異なることを報告している。そして、この同一類内の語の分裂について、音韻面からも文法的性格からも説明がつかないと結論づけた。

加藤氏は、論中で境界地帯がどこにあるのかについては言及したが、境界地帯のどこに境界線が引かれるのか、それについては言及していない。本章ではこの点を明らかにしたい。

#### 4.3 調査の概要

本章で用いた録音資料は、徳島大学日本語学研究室が行った方言調査で集められたものである。録音されたものを筆者<sup>21</sup>が聞き取り、データとして整理した。

資料を収集するにあたって行った調査の概要は以下の通りである。

**調査期間**：1998年7月30日から2004年8月24日まで。

**調査地点**：吉野川流域の南岸を対象に、吉野川に沿って徳島市から池田町までを直線で結び、その直線上にある地域を調査地点として設定した（次頁図18）。

**人数**：全115名。全22地点でそれぞれ5名ずつを目安に人を募った。

**インフォーマント**：外住歴がなく生え抜きに近い経歴を持つ人に限った。

**調査語**：1～5拍の名詞、2～5拍の動詞、2～5拍の形容詞。異なり語数にして、合計1,031語。

**調査方法**：読み上げ式の面接調査を行った。

---

<sup>21</sup> 筆者は徳島市生え抜きで、徳島型アクセントを持つ。



<図 18 : 調査地点>

1: 徳島市 旧市内	2: 佐古	3: 蔵本	4: 府中	5: 石井町 石井	6: 石井町 浦庄
7: 鴨島町 牛島	8: 鴨島町 鴨島	9: 鴨島町 西麻植	10: 川島町 川島	11: 川島町 学	12: 山川町 山瀬
13: 山川町 山川	14: 山川町 川田	15: 穴吹	16: 貞光	17: 半田	18: 三加茂 江口
19: 三加茂 加茂	20: 井川町 辻	21: 池田町 池田	22: 池田町 三縄		

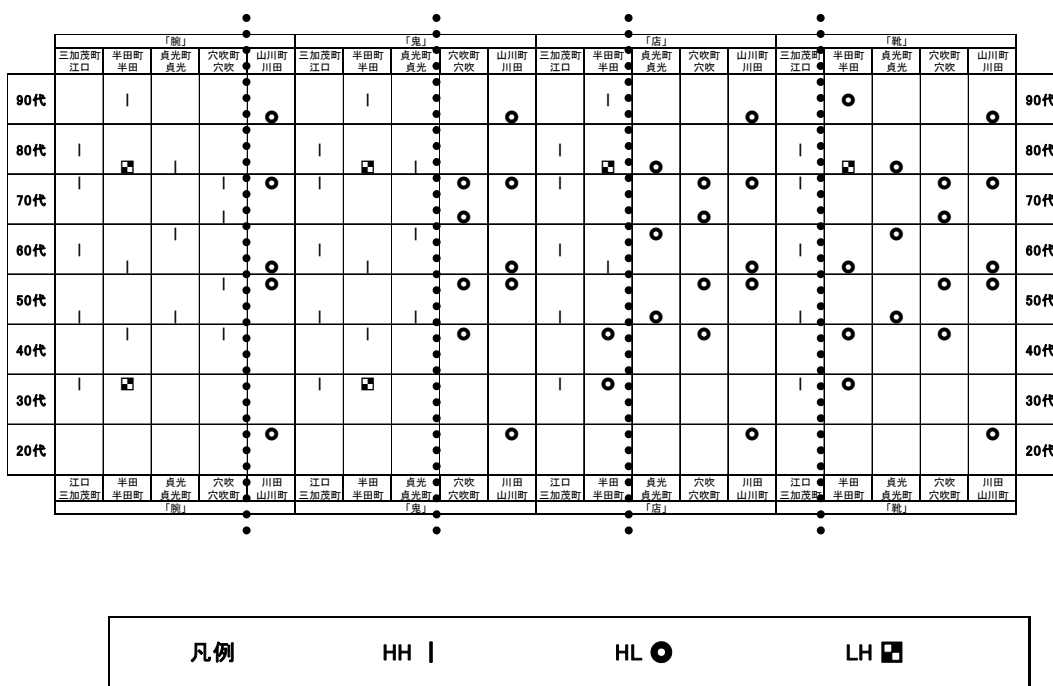
#### 4.4 調査の結果と分析

調査から得られたデータの分析には、グロットグラム（地理×年代）と多変量解析（コレスポンデンス分析及びクラスター分析）を用いた。約 12 万語（1031 語×115 名）の聞き取りを行い、その結果を用いて約 500 枚のグロットグラムを作成した（岸江他・2010）。グロットグラムを用いることにより、地域差と年代差を可視化し、語個別の境界線を引いた。また、グロットグラムによって

示された境界線を、コレスポネンス分析を用いて分析し、クラスター分析によってまとめることにより、徳島型アクセントと池田型アクセントの境界について結論を出す。

#### 4.4.1 グロットグラム

まずは、グロットグラムによってデータを分析する。徳島型と池田型の境界はどこにあるのかという疑問に対する答えは先行研究でいくらか明らかになっているが、筆者の作成した約 500 枚のグロットグラムからは、それぞれの語が異なる境界線を持つことが分かった。以下、「腕」「鬼」「店」「靴」のグロットグラムについて、三加茂町から山川町までの部分を抜粋して表示する（図 19）。



< 図 19 : 4 語の境界 >

「腕」は山川町以東が徳島型（HL）で穴吹町以西が池田型（HH）、「鬼」は穴吹町以東が徳島型（HL）で貞光町以西が池田型（HH）、「店」は貞光町以東が徳島型（HL）で半田町以西が池田型（HH）、「靴」は半田町以東が徳島型（HL）で三加茂町以西が池田型（HH）となっていることが分かる。第 3 類の属する

4語のみを取り上げてみても、それぞれ語によって異なる境界線を持っていることが分かる。他の語も同じような様相を示している<sup>22</sup>。

グロットグラムから確実に言えることとして、山川町以東は徳島型であり、三加茂町以西は池田型である点が挙げられる。何れの語についても、穴吹町から半田町までが境界地帯となり、境界地帯となる3地点のどこが池田型の東端になるかは語によってそれぞれ異なる。

グロットグラムを用いることで語個別の境界線は把握出来たわけであるが、複数箇所にかかれた境界線によって生じた境界地帯に対して、どのような解釈を加えれば良いだろうか。筆者は、このグレイゾーンに白黒をつけるべく、統計的手法を援用した新たな解釈を提示する。

#### 4.4.2 多変量解析の結果から得られた散布図とデンドログラム

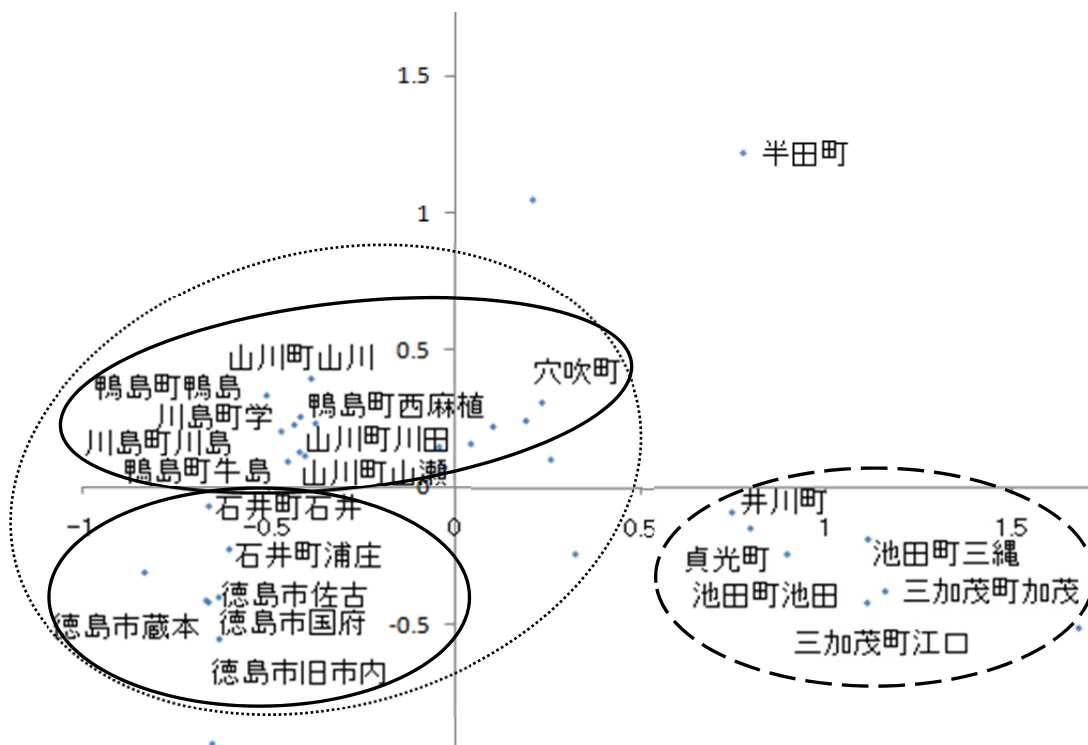
##### 4.4.2.1 コレスポネンス分析の結果から

この節では統計的手法によるアプローチを行い、全ての語をまとめて分析した場合の境界の状況について述べる。池田型と徳島型の変化が顕著にあらわれる1~3拍名詞のデータを使って分析を行った。多変量解析の一種であるコレスポネンス分析<sup>23</sup>の結果（次頁図20）から、池田型-徳島型の境界線を貞光町と穴吹町の間にかくことが出来ると言える<sup>24</sup>。加えて、吉野川南岸の地域について、①「徳島市と石井町」と、②「穴吹町と川島町と鴨島町と山川町」という二つのグループに分かれることも指摘しておきたい。同じ徳島型アクセントでも僅かに性質を異にしているのである。また、同じ池田型のグループに属する地点でも、地理的に徳島型に近い三加茂町2地点が最も徳島型とかけ離れた性質を持つことが明らかになった。

<sup>22</sup> 岸江他（2010）に全ての語のグロットグラムを収録した。

<sup>23</sup> 多変量解析の一種であり、それぞれの要素の相関関係を視覚化するものである。ある要素とある要素が近くにプロットされればそれらの要素は類似性が高く、遠くにプロットされれば類似性が低いということが読み取れる。

<sup>24</sup> 地理的に、貞光町と穴吹町の上に位置する半田町であるが、半田町が外れたところにプロットされたのは、端山出身の話者を調査してしまった為に一字村に近いアクセントがあらわれたことが原因である。イレギュラーなものとして省かず、得られたデータは全て利用した。



< 図 20 : 1~3 拍名詞の結果から得られた散布図 >

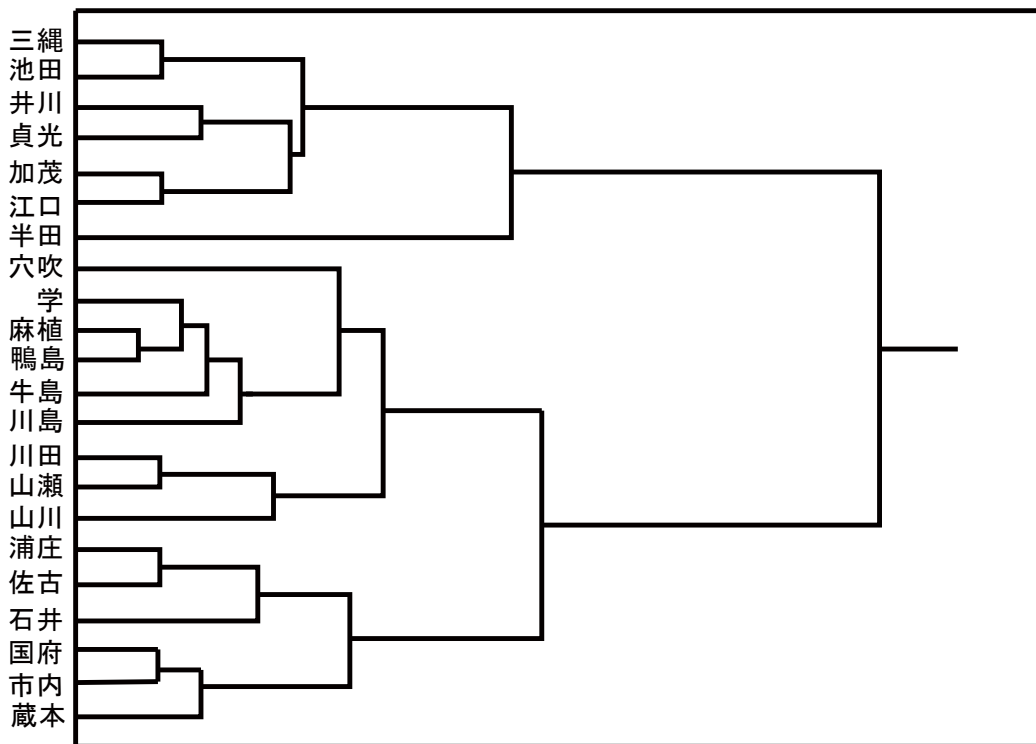
グロットグラムの分析からは貞光町と穴吹町の上に境界線を引くことになったが、散布図を見るに、池田型グループ寄りにプロットされている穴吹町は、徳島型の中でも池田型の要素を他の地点よりやや多く持っていることが分かる。このように、コレスポンデンス分析を用いて地点間の相対的な距離を測ることにより、それぞれの地点について全体の中での位置づけを行うことも可能である。

#### 4.4.2.2 クラスタ分析の結果から

コレスポンデンス分析の結果から得られたスコアを用いてクラスタ分析<sup>25</sup>を行った。結果は次頁図 21<sup>26</sup>の通りである。

<sup>25</sup> 多変量解析の一種である。異なった性質のものが混ざり合っている対象の中で、互いに似たもの同士を集めて集落（クラスター）を作り、分類するものである。デンドログラム上で、同じ枝から分かれているものほど類似性が高いと言える。

<sup>26</sup> 図内の地名については以下を参照されたい。図内左に列挙された地名は、上から、池田町三縄、池田町池田、井川町辻、貞光、三加茂町加茂、三加茂町江口、半田、穴吹、川島町学、鴨島町西麻植、鴨島町鴨島、鴨島町牛島、川島町川島、山川町川田、山川町山瀬、山川町山川、石井町浦庄、徳島市佐古、石井町石井、徳島市国府、徳島市旧市内、徳島市蔵本である。



<図 21：デンドログラムから見える分類>

右から左に広がっていくデンドログラムを見ると、最初の分岐点で、上が池田型、下が徳島型に分かれることが読み取れる。つまり、上の枝先に表示された地点が池田型の要素を持つ地点であり、下の枝先に表示された地点が徳島型の要素を持つ地点ということになる。上のクラスターについて、それぞれの地点を地図上に並べ直した東端がすなわち池田型の東端ということになる。つまり、池田型の東端は貞光町である。同様に、下のクラスターについて、それぞれの地点を地図上に並べ直してみると、その西端が徳島型の西端ということになり、徳島型の西端は穴吹町となる。つまり、境界線は貞光町と穴吹町の間に引くことが出来る。クラスター分析の結果からも、池田型－徳島型の境界線は貞光町と穴吹町の間に引くことが出来るのである。

また、クラスター分析は、それぞれの地点の全体に対する位置づけについて、コレスポネンス分析より更に詳しく見ることを可能にする。上段の池田型を



見ると、半田町がまず異なる枝として分岐している。次に池田町と池田町以外に分岐し、池田町以外の地点は更に三加茂町と三加茂町以外に分岐している。三加茂町以外の地点である貞光町と井川町は似通った要素を持っていることが分かる。下段の徳島型を見ると、コレスポネンス分析の結果と同じく①「徳島市と石井町」と、②「穴吹町と川島町と鴨島町と山川町」という二つのグループに分かれる。その上で②が更に細かく分類されており、川田・山瀬・山川の3地点が一つの枝を作っている。同じ山川町である川田・山瀬・山川の3地点が一つの枝としてまとまっているのは、地理的に考えても妥当である。下段の第2分岐点で山川町と山川町以外に分かれた後、山川町以外については、穴吹町が特異な性質を持つ地点として一つの枝を形成している。

このように、クラスター分析を用いることで、似通った性質を持つ地点をクラスターとして細かくまとめることが出来る。また、地理情報に照らし合わせてみても妥当であることから、信頼性のある客観的な分析が行われていることが分かる。

#### 4.5 まとめ

グロットグラムから得られた境界地帯について、統計的手法であるコレスポネンス分析及びクラスター分析を用いて分析を行った結果、池田型－徳島型の境界線は貞光町と穴吹町の間には引くことが出来た。これを本章の結論とする。

加藤信昭氏が今から約40年前（1968）に発表した内容では脇町・穴吹町・美馬町・半田町が両アクセントの境界地帯として認定されていたが、本章では新たな手法を取り入れることで、境界地帯をより厳密に分類することが出来た。吉野川南岸については、穴吹町と半田町が境界地帯であるとされていたが、本章では半田町は池田型であり、半田町の東隣、穴吹町に隣接する貞光町が池田型の東端であると認定する。これは主観的な分類ではなく、得られたデータを統計的に扱った、客観的な分析によるもので、同じデータを用いて同じ手順を踏めば、誰もが同じ結果に辿り着くことが出来る。

また、多変量解析の手法を用いることで、大まかな上位分類から細かな下位分類まで、巨細に分類をすることが出来た。きめ細かい分析を行うことが出来るという点でも、区画の判断に多変量解析を用いることは有効である。

## 第 5 章 多変量解析によるアクセント区画の

### 再整理

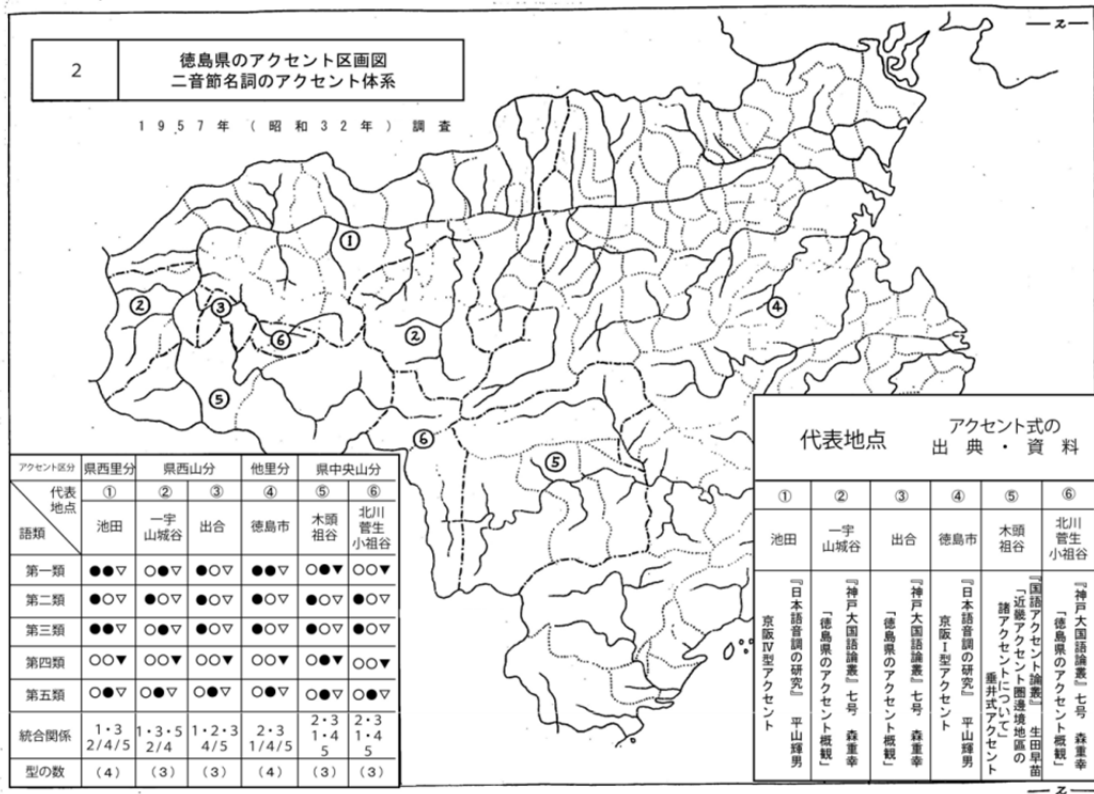
---

本章ではコレスポンデンス分析・クラスター分析に加え、自己組織化マップ (Self-organizing map 略して SOM) を利用する。これらの手法をアクセント研究に応用することで、バラエティに富む音調と各地域の関係を可視化し、新しい方言区画を生み出す。

本章の構成は以下の通りである。5.1 で言語地理学的な視点から記された先行研究を参考に、県内諸地域のアクセントの地域差とその分布状況について概観する。5.2 で統計手法による分析結果を示し、5.3 で先行研究との比較を行い、統計手法の妥当性を検討する。

#### 5.1 先行研究

地図上で方言区画を行ったものに、1957年当時の調査結果をまとめた森(1989)がある。次頁図 22 (森・1989、p. 2 から引用。読みやすくするため、手書きの部分を筆者が活字に修正した) を参照されたい。地図上に境界線を引き、県内を 6 つのアクセントグループに分けたものである。但し、注意を要するのは、これは 2 拍名詞のアクセントのみについて分類したものであり、アクセント体系の一部しか反映されていないということである。アクセント体系の方言区画を行うのであれば、2 拍名詞の結果だけでは不十分である。図 22 で同じ区画に分類されている地域 (たとえば、北川・菅生・小祖谷) のアクセントでも、1 拍名詞や 3 拍名詞、動詞、形容詞などの音調型を総合的に考慮すると、異なった分類結果が示される可能性がある。総合的な視点からの分類を試みるとすればどのような方法があるのか。この疑問については、次節以降で回答を用意している。



< 図 22 : 森の方言区画 >

徳島県下のアクセントについて網羅的に調査したものに、石田/岸江(2001)がある。これはそれぞれの語について、個別の地図を作ったものである。一枚一枚の地図を見るに、それぞれの語についてどのような音調がどのように分布しているかは明らかになっているが、全てをまとめた結果どのような分布が描けるかについては言及することが出来なかった。本章では、この点についても次節以降で回答を用意している。

## 5.2 多変量解析によるアクセント区画の再整理

データは、選定した複数の語についての音調に対する反応を、複数の被験者(話者)から調査した多変量のデータである。したがって、このデータに対して直感的な解釈を試みることは困難である。そこで多変量解析の手法により、個々の被験者の反応パターンについて、それぞれの類似度を抽出し、これをマッピングした結果を通して解釈を試みる。これまでの方言区画論においては、観察者の主観

によって判断され、境界が線引きされてきた傾向が強いと思われる。方言アクセントの研究においても客観的、すなわち第三者が追試可能な方法によって地域差を明示するとともにアクセント区画を行う必要があると考える。

本章の続く部分では、2拍名詞だけでなく、1拍から3拍名詞、2拍から3拍動詞、3拍形容詞全てを網羅的に検討し、それぞれの地域のアクセント体系がどのような位置関係にあるのかを明示する。

### 5.2.1 データの概要と分析の方法

以下で扱うデータは、徳島県内 203 地点から得られたアクセントデータである。これは、石田/岸江 (2001)、仙波/岸江/石田 (2002) で地図化したアクセントデータと同じものである。個々に扱った 203 地点の具体的な調査地点はこれらの先行研究を、調査地域全体の概略図については第 1 章の図 1 を参照されたい。市町村合併後の名称で記述すると先行研究との区画の比較が難しくなるため、以降旧市町村名を用いる。各調査地点でのインフォーマント数は 1 名以上とした。但し、一つの地名が示す地域が広域の場合、或いは先行研究によって地域内でユレが認められたり、明らかに異なるアクセントが聞かれたりすることが分かっている場合には同じ地点でも 2 名以上のインフォーマントのデータを採用した。インフォーマント名は「地点名 (+ 枝番号)」によって表示したが、同一地点には複数話者がいる点を断っておきたい。話者の属性として、世代は調査時、原則として 70 歳以上、その土地生まれのその土地育ちの「生え抜き」を重視し、性別は問わないこととした。尚、インフォーマント数は、欠損値を一つでも含むケースは除外し、145 件<sup>27</sup>である。

分析対象としたのは、1拍名詞第 1 類・第 2 類・第 3 類、2拍名詞第 1 類・第 2 類・第 3 類・第 4 類・第 5 類、3拍名詞第 1 類・第 2 類・第 3 類・第 4 類・第 5 類・第 6 類・第 7 類、2拍動詞第 1 類、3拍動詞<sup>28</sup>第 1 類・第 2 類・第 3 類、3拍形容詞第 1 類・第 2 類のそれぞれに所属する語である。活用のあるものについては終止形を採用した。具体的な語彙は、「蚊が、葉が、木を、国、音、山、箸、猿、氷、二つ、力、男、心、鼠、薬、着る、遊ぶ、帰る、歩く、負ける、逃げる、赤

<sup>27</sup> 具体的な地点については一覧にして稿末に附した。尚、試行の結果、地点の偏りは結果に影響しない。

<sup>28</sup> 第 1 類と第 2 類については 5 段活用と 1 段活用両方を調べ、データとして用いた。

い、白い」である。従って変数は 23 項である。

マッピングの手法として、多重対応分析及び SOM を利用した。どちらについても、アクセントデータからそれぞれの地域が相対的にどのような関係にあるのかを明らかにすることが目的である。また、次節の論考は統計的手法を用いたアクセント研究の萌芽的な研究であるので、先行研究との比較を通じ、アクセントデータの分析に対して多重対応分析及び SOM を応用することの妥当性についても検討する。

### 5.2.2 分析結果と解釈

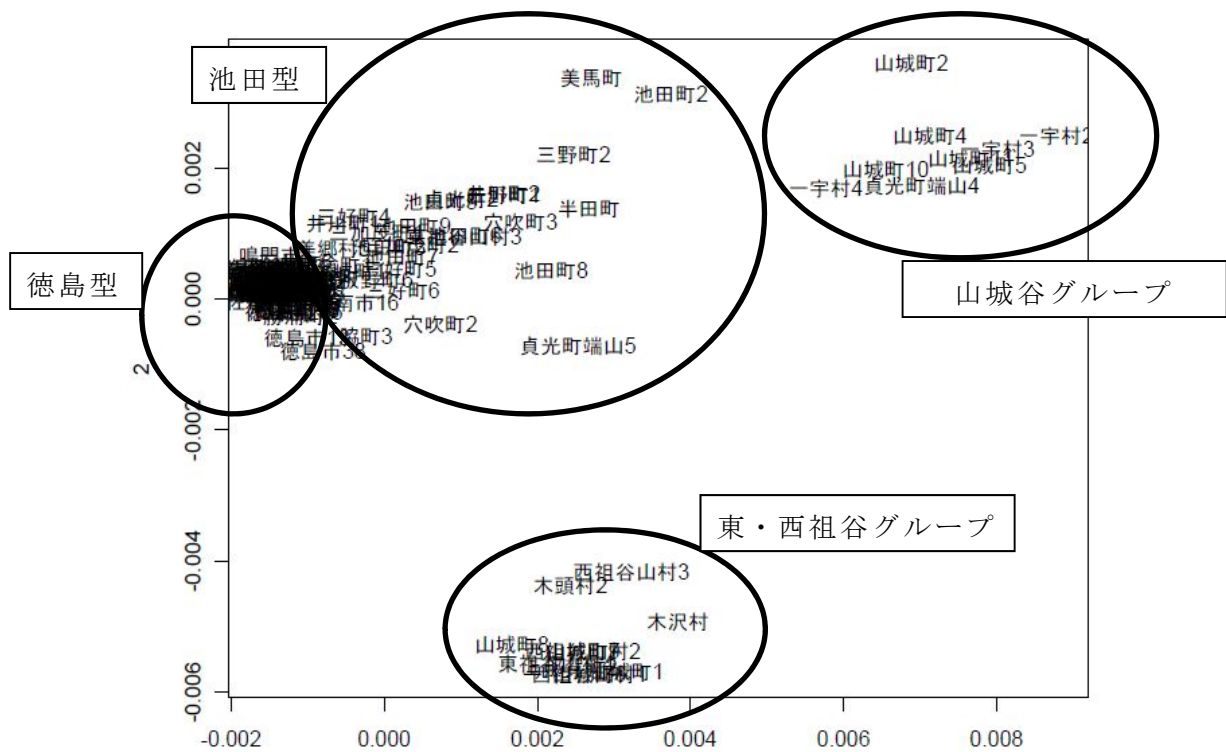
ここでは以下のデータを用いて、多重対応分析を実行した結果とその解釈を行う。加えて、SOM によるマッピングを行う。

	カガ蚊が	ハガ葉が	キオ木を	クニ国	ヤマ山	ハシ箸
徳島市 1	HH	HL	LH	<NA> <sup>29</sup>	<NA>	<NA>
徳島市 2	HH	HL	LH	HH	HL	LH
徳島市 3	<NA>	<NA>	LH	HH	HL	LH
徳島市 8	HH	HL	LH	HH	HL	HL
徳島市 13	HH	HL	LH	HH	HL	LH
徳島市 14	HH	HL	LH	HH	HL	LH

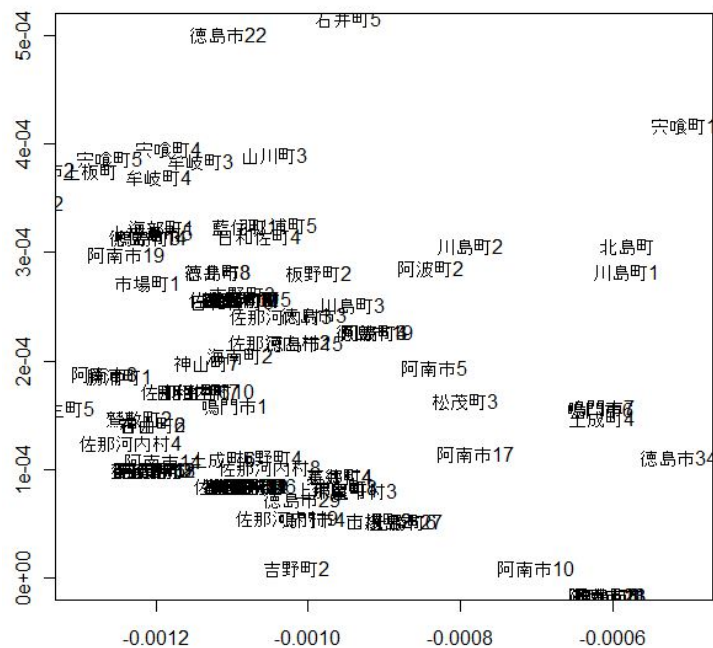
#### 5.2.2.1 多重対応分析による解析結果と解釈

多重対応分析を実行した結果が次頁図 23 である。まず、図 23 全体を見渡してみると大きく 4 つのグループに分かれることが分かる。プロットされた地点名に対するそれぞれのグループを囲む枠線及び四角内の文字列は筆者が解釈の補助として書き入れたものである。4 つに分かれる理由は類別体系と各類の音調型が大きく関与している。後で詳述したい。

<sup>29</sup> <NA>は欠損値を示す。



< 図 23 : 多重対応分析による徳島県内のアクセントデータの分析<sup>30)</sup>>



< 図 24 : 徳島型グループの拡大図 >

<sup>30</sup> 図 23 について、対応分析で提示される寄与率を示すと、1・2 軸の合計で 5.63%であった。ただし通常の対応分析とは異なり、多重対応分析の場合は寄与率の低さは必ずしも解釈の妥当性には繋がらないということが数学的に証明されている。寄与率が低いことが、元データの情報を再現していないことにはならない。(Murtagh・2005、p. 44)

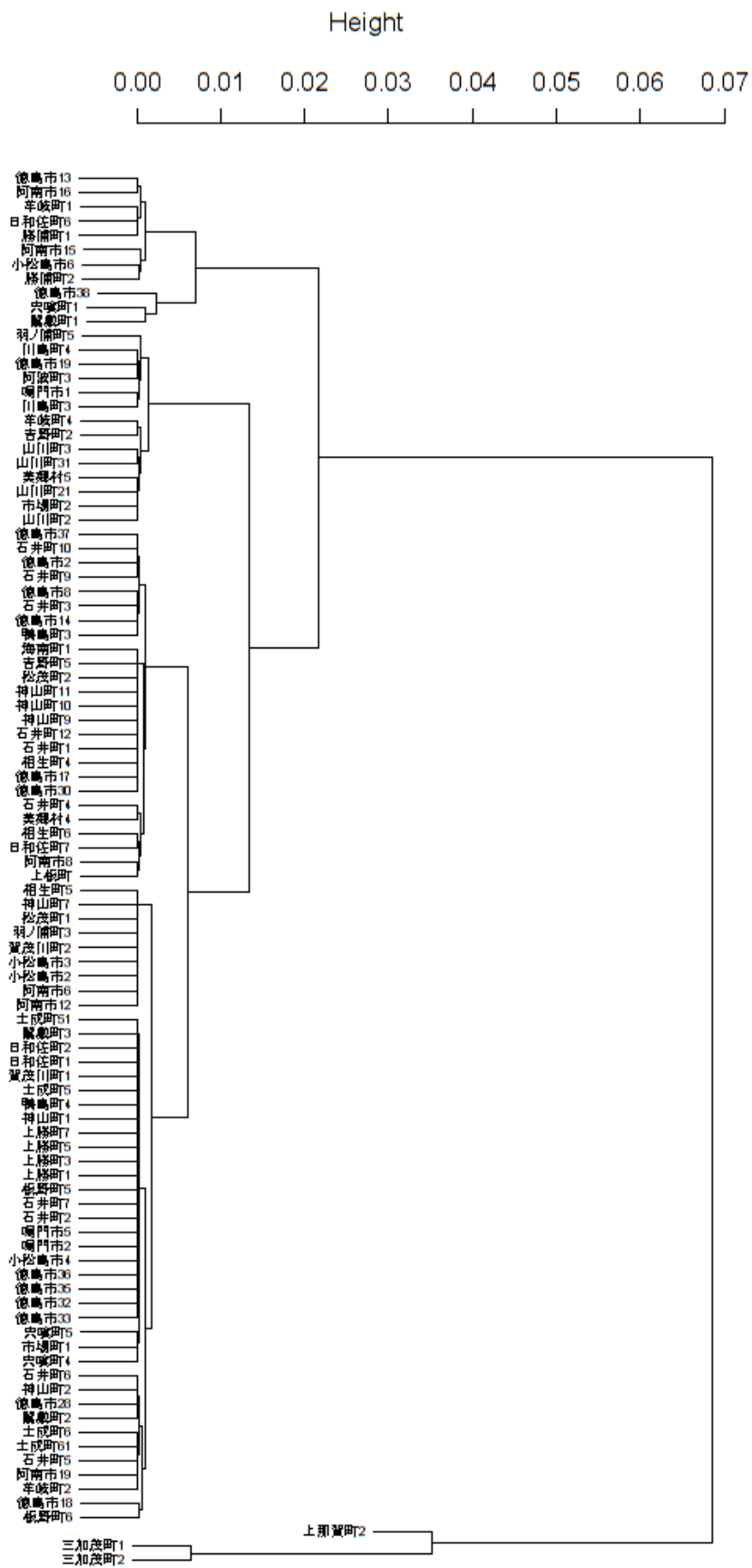
最左部には徳島市を中心とした徳島型のアクセント体系を持つ地域が密集している。文字が重なっていて見えない部分があるため、詳細は前頁図 24 に示している。図 24 を見るに、従来徳島県沿岸部では北部と南部（代表地域として、徳島市と海部郡など）でアクセントの変化の速度にずれが生じていると確認されていたが、分析結果を見てみるとほぼ同じところにプロットされているのが分かる。これはアクセント変化の速度は違うものであるが、客観的に見て、体系的には殆ど変わらないということの意味する。

また、徳島型北部と南部の体系に殆ど変わりがないことを確認する為に、徳島型の地域のみをピックアップして階層的クラスター分析にかけた。ここではユークリッド距離を求めた上で、Ward 法を適用している（図 25 を参照）。このように、徳島型はクラスター分析上でも地域入り乱れており、特に偏りが無い。従って、北部と南部のアクセントには殆ど変わりがないと言える。

徳島型のグループに隣接して池田町を中心とした吉野川上流域に位置する地域（美馬町・三野町・穴吹町・三好町・半田町など）が池田型のグループとしてマッピングされている。ただし、こちらのグループは徳島型ほど密集していない。これは、池田型のグループにはそれぞれの地域によって僅かに差異があることを意味している。

更に右に進むと、山城町・一宇村・貞光町によって構成されるグループがある。これは讃岐式アクセントの変種である山城谷アクセント体系を持つグループである。先行研究の結果ではこのグループに半田町も属していることになっているが、本稿の結果からは半田町は讃岐式池田型に属する結果となった。多重対応分析結果の最下部に位置しているのは、東祖谷山村・西祖谷山村・木頭村・木沢村など京阪式アクセントの変種である垂井式アクセント体系を持つグループである。

全体の位置関係を見るに、讃岐式池田型と讃岐式変種（山城谷）については隣接していてそのアクセント体系もある程度似通っていることが分かるが、京阪式徳島型と京阪式変種（垂井式）は遠くにマッピングされており、変種といえども、その体系的特徴は大きく異なることが分かる。また、京阪式と讃岐式という基本的な対立があるにも関わらず、京阪式徳島型と讃岐式池田型が隣接してマッピングされているということは、吉野川の上流域から下流域にかけての移行性分布の可能性も示唆している。



< 図 25 : クラスタ分析の結果 >



なお、この分析からは、地理的分類だけでなく、アクセントの分類についても、示唆的な結果が読み取れる。たとえば、第1解で山城谷アクセントなどが高い値になった理由として、徳島型が例えば2拍助詞付き（3拍単独形）で高平型（高高高型）になるのに対して山城谷アクセントではほぼ規則的に低高低型をとることが影響したとみられる。また、西祖谷山村などの垂井式諸アクセントもほぼ同様のことがいえ、例えば、徳島型アクセントの2拍名詞類別体系が4（1/2・3/4/5）であるのに対し、西祖谷山村では2（1/2・3・4・5）といった類別体系であり、やはり各アクセントの音調型が大きく異なることが影響したとみられる。

### 5.2.2.2 自己組織化マップ（SOM）による解析結果と解釈

多重対応分析の結果から得られた知見を別の面から検証したい。そこで SOM を用いる。SOM は多次元情報（本章ではアクセントの類と音調）から観測対象（本章では地域）のポジショニングマップを描くためのデータマイニング手法である。SOM の目的は多次元データの情報を圧縮し、マップを描くことにある。これは、いくつかの変数を持つアクセントデータから諸地域間の遠近を見ようとしている本章の目的と本質的に同じであると考えられる。

カテゴリデータを多重対応分析や自己組織化マップに適応するには、元データを1、0のダミー変数に変換する必要がある。「R」で多重対応分析を実行する `mca` 関数は内部で自動的に変換してくれるが、SOM 関数の場合、自動変換してくれないので、データを明示的にダミー変数に変換した。その結果が以下のようなものである。

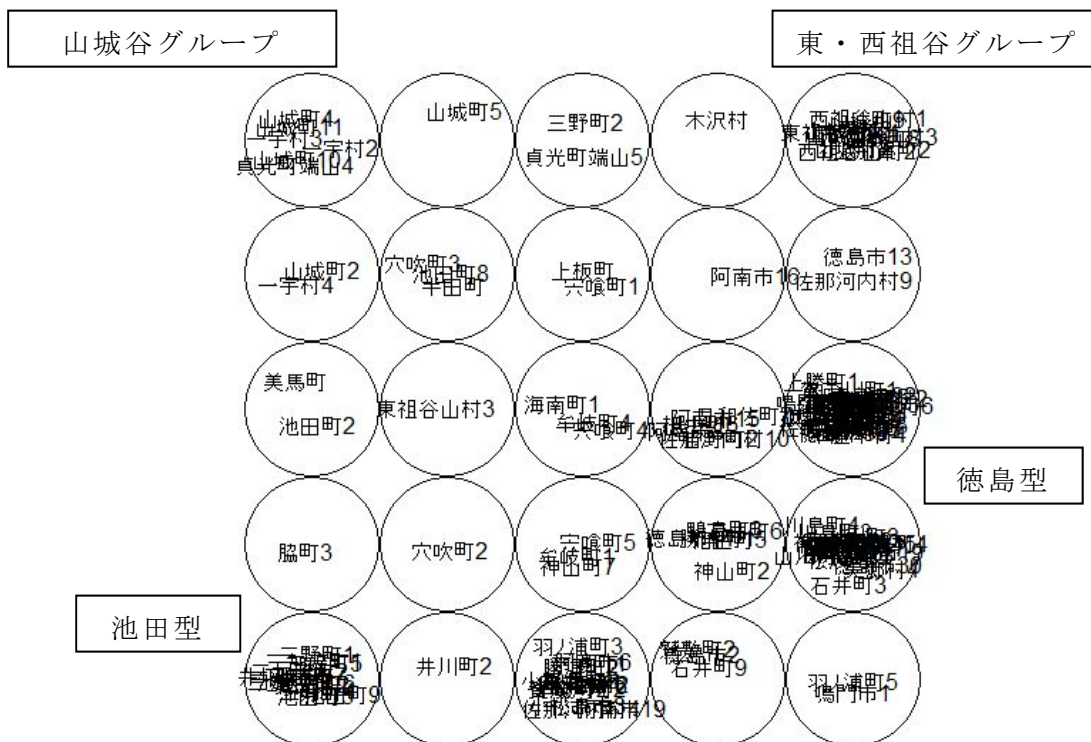
	[,1]	[,2]	[,3]	[,4]	[,5]	[,6]	[,7]	[,8]	[,9]	[,10]	[,11]	[,12]
徳島市 2	1	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0
徳島市 8	1	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0
徳島市 13	1	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0
徳島市 14	1	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0
徳島市 17	1	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0

これをデータ (datD) として、以下のように SOM を実行した。SOM を利用するにあたっては、「R」のコホーネンパッケージを利用した。

```
datSom2 <- som ( scale (datD[,-13]),grid = somgrid(5, 5,"rectangular"),rlen = 1000)
```

ダミーデータを対象に、SOM 関数のパッケージを適応する。但し、列ごとに水準数が異なるので、上の実行例では datD を scale 関数によって標準化した上で som を適用している。但し、自己組織化マップではプロットされる図のグリッドを指定する必要がある。ここでは 5\*5 を指定した。5\*5 を指定した理由は、3\*3 や 4\*4、10\*10 などとも試行したわけであるが、多重対応分析の結果からも 5\*5 が最もデータの分布をよく表すと判断した為である。以上の理由により、グリッドを 5\*5 を指定した。

### Mapping plot



< 図 26 : SOM 分析による結果 1 >

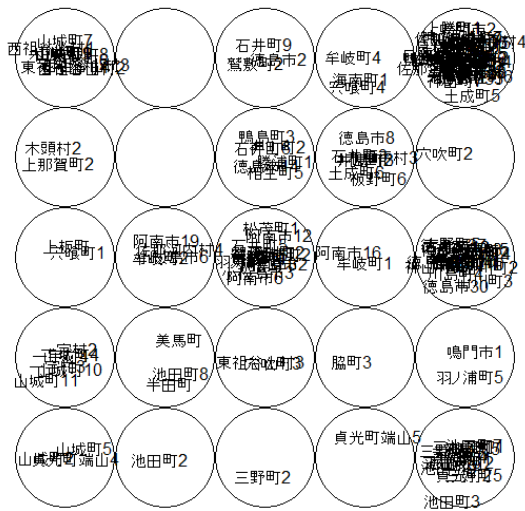
前頁図 26 は SOM を行った結果である。左下から (0、0) の円、その右を (0、1) の円、その右を (0、2) という風に呼ぶことにする。

(2、4) (3、4) を中心に徳島型アクセントの地域がマッピングされている。密集して重なっているが、徳島市や鳴門市、松茂町、上勝町、川島町、石井町など、吉野川下流域及び沿岸部の地域がまとまって出力されている。このことから、これらは似通った体系を持つ一つのグループとして考えることが出来る。似通った体系とは徳島型のアクセント体系である。(0、0) を中心に池田型の地域がマッピングされている。三野町、池田町、井川町、脇町、三加茂町など吉野川上流域に存在する地点が密集している。(4、0) には一字村と山城町を中心とした山城谷グループがマッピングされている。一字村、山城町、貞光町端山は同じようなアクセント体系を持つということが分かる。半田町などは (3、1) という (4、0) に近い位置にマッピングされているため、一字村や山城町と似通った体系を持つと考えられる。(4、4) には東・西祖谷グループがマッピングされている。木沢村も (0、3) にマッピングされていることから、東・西祖谷グループに近いアクセント体系を持つことが分かる。

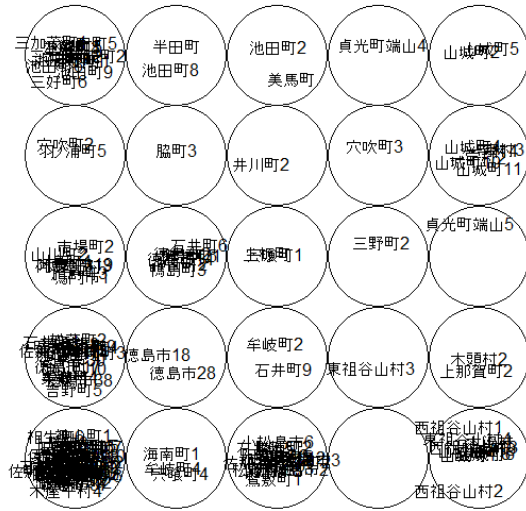
以上の手順から、徳島県下のアクセント体系は、およそ 4 つのグループに分けることができるという解釈が、多重対応分析や SOM の分析手法によっても補強されたといえよう。

SOM は乱数を用いた計算を行うため、毎回異なる結果がマッピングされることになるが、何度も分析にかけてみた結果、ほぼ全ての場合において図 26 に示したものに酷似したものが出力された。酷似例として次頁に図 27、図 28 を挙げておく。これらは図 26 と同様の試行を行って得られた結果である。偏りの位置は変わっているものの、徳島型、池田型、山城谷グループ、東・西祖谷グループに分かれていることには変わりがない。

SOM においては、因子分析における寄与率や、あるいは共分散構造分析における AIC のようなモデルの妥当性を判断する指標が一般化されていない。しかし SOM の目的が探索的な解析であり、また多重対応分析の結果との整合性を考慮すると、図 25 はデータの類似度を適切に表現していると判断してよいだろう。



< 図 27 : SOM の結果 2 >



< 図 28 : SOM の結果 3 >

### 5.3 アクセントデータに多重対応分析及び SOM を応用することの妥当性と有意性

ここでは、アクセントデータに多重対応分析及び SOM を応用することの妥当性と有意性について検討する。

上記の解釈で述べた通り、多重対応分析及び SOM の結果は先行研究の森 (1989)・石田/岸江 (2001) とほぼ同じであったわけであるが、何百枚もの地図上のデータを多変量解析の手法によって 1 枚の散布図に圧縮することで、統計的手法がアクセント分類を補助する手段として有効であることを示すことが出来た。主観的であった従来の方言区画を客観的に見直すという本章の試みは価値があると言える。更に、統計的手法を用いることで、森 (1989) において六つに分類されたアクセント体系を 4 つに分類し直すことが可能となり、それぞれの体系相互の関係がどのようになっているかを明らかにすることも出来た。本章の研究結果を踏まえ、筆者が新たに提唱する 4 分類を表 21 に示す。

<表 21：徳島県下のアクセント 4 分類>

	派生元	式の対立	類別体系
徳島型	京阪式	有	4 (1/2・3/4/5)
池田型	讃岐式	有	4 (1・3/2/4/5)
東・西祖谷グループ	京阪式	無	2 (1/2・3・4・5)
一字・山城グループ	讃岐式	無	3 (1・3・5/2/4)

森（1989）においてはこれに加えて、出合と小祖谷の 2 つのアクセントを分類基準にしているが、これら 2 つのアクセントについては、本研究ではそれとは異なり、出合を池田型に、小祖谷を東・西祖谷グループにそれぞれ分類する。

#### 5.4 まとめ

本章では、多変量解析や SOM を用いて、先行研究で 6 つに分類されていた徳島県下のアクセントを 4 つに分類し直し、それぞれの体系間の距離を測った。また、各地域の関係を可視化することで新しい方言区画を生み出すことが出来た。

定説では京阪式アクセントから派生したとされる垂井式アクセントが、京阪式アクセントと同じ体系を持つ徳島型アクセントから遠く離れたところにプロットされたことも注目に値する。これは京阪式アクセントと垂井式アクセントの関係を再考する必要性を示唆している。

<地点一覧>

阿南市6	三加茂町2	松茂町2	相生町6	日和佐町1
阿南市8	三好町4	上勝町1	池田町2	日和佐町2
阿南市12	三好町5	上勝町3	池田町3	日和佐町6
阿南市15	三好町6	上勝町5	池田町5	日和佐町7
阿南市16	三野町1	上勝町7	池田町6	半田町
阿南市19	三野町2	上那賀町2	池田町7	板野町5
阿波町3	山城町1	上板町	池田町8	板野町6
井川町1	山城町2	神山町1	池田町9	美郷村4
井川町2	山城町4	神山町2	貞光町2	美郷村5
一字村2	山城町5	神山町7	貞光町端山4	美馬町
一字村3	山城町6	神山町9	貞光町端山5	北島町
一字村4	山城町7	神山町10	土成町5	牟岐町1
羽ノ浦町3	山城町8	神山町11	土成町6	牟岐町2
羽ノ浦町5	山城町9	西祖谷山村1	東祖谷山村3	牟岐町4
賀茂川町1	山城町10	西祖谷山村2	東祖谷山村4	鳴門市1
賀茂川町2	山城町11	西祖谷山村3	徳島市2	鳴門市2
海南町1	山川町2	石井町1	徳島市8	鳴門市5
鴨島町3	山川町3	石井町2	徳島市13	木屋平村3
鴨島町4	市場町1	石井町3	徳島市14	木屋平村4
吉野町2	市場町2	石井町4	徳島市17	木沢村
吉野町5	穴喰町1	石井町5	徳島市18	木頭村2
穴吹町2	穴喰町4	石井町6	徳島市19	脇町3
穴吹町3	穴喰町5	石井町7	徳島市28	鷺敷町1
佐那河内村2	勝浦町1	石井町9	徳島市30	鷺敷町2
佐那河内村4	勝浦町2	石井町10	徳島市32	鷺敷町3
佐那河内村5	小松島市2	石井町12	徳島市33	
佐那河内村6	小松島市3	川島町3	徳島市35	
佐那河内村9	小松島市4	川島町4	徳島市36	
佐那河内村10	小松島市6	相生町4	徳島市37	
三加茂町1	松茂町1	相生町5	徳島市38	

## 終章 本研究の意義

---

### 6.1 本研究のまとめ

本研究では、統計的アプローチをとることで、体系記述的アクセント研究を次のステップへと導くことを試みたが、その試みは実を結んだと言えよう。

第3章では同一類内のアクセント分裂現象について、ロジスティック回帰分析を用いて、分裂の規則性を見出すことに成功した。第4章では多変量解析（コレスポンデンス分析とクラスター分析）を用いて、500枚のグロットグラムにあらわれるアクセントデータを圧縮し、1枚の散布図として描き出した。これまで語ごと、或いは類ごとにしか示せなかったものを、品詞の別なくまとめあげ、2つのアクセント体系の境界線の位置を定めることに成功した。第5章では第4章を更に拡張し、多変量解析にSOMを加え、徳島県下全域のアクセント区画の再整理を行った。先行研究で6分類とされていたものを4つにまとめ直し、それぞれの体系間の遠近を見ることに成功した。

日本のアクセント研究では、統計的手法にもとづく研究はこれまでほとんど行われてこなかった。従来のアクセント研究は、アクセント資料の収集・記述にのみ主眼が置かれてきたきらいがある。積み上げられた膨大なデータを処理し、分析することは今後の課題となっていた。このような状況のもと、本研究では大量のアクセントデータを対象として、統計的手法による分析を行い、アクセント体系間の距離を導き出すことに成功した。これは客観的かつ科学的な分析であり、第三者が追試可能な手法でもある。

### 6.2 本研究の意義

伝統的なアクセント研究は緻密な体系記述を得意としたが、本研究では全く異なる視点からのアプローチを試みた。既存の研究を踏まえた上で新しい手法を以って研究に取り組むことで、新しい方言区画モデルを構築したのである。ここに、本研究の意義がある。

本研究は徳島県を取り上げて論じたわけであるが、本研究の手法と先学が公開している多くの記述資料を用いることで、日本全国の諸アクセント体系がどのような関係を持つのか、客観的な分析が可能となるだろう。また、共時的視点だけでなく、通時的視点からも、アクセントデータの統計的手法による解析は可能なのではないだろうか。『類聚名義抄』『補忘記』等の各時代の代表的な文献資料と現代方言アクセントの体系を比較することで、新たな仮説が生まれる可能性がある。このような拡張可能性に気づき、一連の調査・試行を行ったことに、本研究の意義があるといえる。

### 6.3 今後の展望

#### 6.3.1 同一類内のアクセント分裂現象について

第3章の発展研究として、富山方言より徳島方言の方が複雑な様相を見せているのは何故かということについて検討したい。また、日本本土方言には多くの境界地帯があり、京阪式アクセントと讃岐式アクセントが接触するところや、京阪式アクセントと東京式アクセントが接触するところ、そしてそれが山間部だったり平野部だったりする。この点について言語地理学的にも考えてみたいと思う。

徳島県のケースが富山県のケースのように明確な規則性を持たない理由として、異体系アクセントがぶつかり合うアクセント境界地帯という場の特殊性が考えられる。第3章では規則性を示すにとどまったが、今後、境界地帯という特殊な場でのアクセントの振る舞い方について再考したい。日本本土に点在するアクセント境界地帯をとりまく現象について、そのメカニズムを解明することは、本土方言を二分するアクセント体系の分岐の仕方を明らかにすることに繋がる。第3章はその足掛かりとなるものである。

#### 6.3.2 日本諸方言アクセント区画の再整理

第4章及び第5章の研究手法を応用することで、日本全国のアクセント体系の相互関係を明らかにしたい。それが実現可能であることは、ケーススタディとして徳島方言を分析した本研究が実証している。

先学の手によって日本全国のアクセント記述資料が公開されている今だからこそ、統計的手法による大量の情報を扱う研究が可能であると考えられる。全国のアクセ



セント資料を計量的に分析することにより、更に新たな解釈を行うことが出来よう。客観的に整理されたアクセント区画から、現在の諸方言アクセントの分布を再整理することは、通時的なアクセント分岐の過程を考えるうえで大変有効である。日本語祖語から京阪式アクセントと東京式アクセントがどのように分岐していったかを知ることは、服部四郎の時代からの課題であった。膨大な量のデータを集め、機械で計算し、日本全国に分布する諸方言アクセント体系の比較を行うことで、アクセント分岐過程の真実に辿り着くことが出来るだろう。

### 6.3.3 アクセント以外の項目への応用

統計的手法によるアクセント区画の見直しは、東条操（「方言圏論と方言区画論」『国語学』(4)・1950・国語学会）や金田一春彦（「アクセントの分布と変遷」『日本語』・1977・岩波書店）をはじめとする先学によって提案された方言区画以来の、新しい方言区画が誕生する一つの契機になる。ゆくゆくはアクセントのみならず、語彙・文法などの分野も対象として、今まで研究者個々の主観的な判断でしか行えなかった方言区画を総合的かつ客観的な視点から描き直すことを目指したい。また、統計的手法を用いることで、伝統的な方言の地域差のみならず、世代・性別・居住歴などといった変数と日本列島の諸方言のかかわりがどのようなになっているかといった分析も可能となるはずである。

### 6.3.4 <数理方言学>の構築に向けて

日本語学の分野では、先行して計量的な研究が行われてきたが、方言学の分野は未だ計量的な研究に対して懐疑的である。しかし、これまで、実証主義的な姿勢を堅く守ってきた方言学でありながら、解釈・分類・線引きの点で研究者の主観が混じっていると批判されることが多くあった。そのような批判を全て排除し、誰でも追認可能な研究成果を残す。そしてその積み重ねから、<数理方言学>という分野を拓いていきたい。

# 付録論文 京阪式アクセントにおける 2 拍名詞の 類の統合状況と低起無核型の 消失傾向 —大阪・奈良・三重・徳島 方言を中心に—

---

**SUMMARY:** This paper describes the conditions of how the merger in Class 4 and 5 bimoraic nouns is developing around the Keihan area. This occurrence of the merger originated from Osaka and has clearly spread around the Kinki and Shikoku areas. However, the diffusion of the merger has not affected the Tokyo-type accent. It can be said that the change of Class 4 from LLH to LHL causes the disappearance tendency of the low-beginning unaccented category and also has a disproportionate effect on Keihan accent system due to this change.

**キーワード：** 京阪式アクセント、大阪方言、奈良方言、三重方言、徳島方言、2 拍名詞、第 4・5 類の統合、世代差

## 7.1 はじめに

### 7.1.1 目的と意義

本稿では、京阪式アクセントの分布地域に現在進行している 2 拍名詞第 4 類と第 5 類の統合に関わる調査結果を取り上げ、これらの類の統合が各地でどのように進んでいるのかその実態について報告する。この類の統合に関しては、先行研究（真田・1987、犬飼他・1989、岸江・1990、中井・1990b、中井/小泉・1992、岸江・1997、田原/村中 2000、武田・2009、郡・2011 など）においてさまざまな角度から取り上げられており、この変化が 2 拍名詞の類別体系の変化のみにとど

まらず、従来から体系的に変化が起きにくいとされてきた京阪式アクセントの体系を乱す重大な変化であることは言を俟たない。

岸江（2002a）でも指摘したが、近畿中央部から近畿周辺部への言語伝播の形態が、昨今大きく様変わりしてきている。現代では過去に見られたような「地を這うような伝播」ではなく、大都市圏から各地方の都市に直接広がる伝播へと変化しているといっても良い。近畿地方の鉄道網や道路網の整備により近畿地方のどこからでも中心部までのアクセスが短縮され、行き来が頻繁になっているためである。また、同時に近畿中央部で放映されるテレビ番組が近畿地方のみならず四国地方の一部にまで行き届いていることも大きく影響している。このような都市拡散型とでも呼べる伝播の特徴は、大都市で生じた言語変化に周辺の地方都市がすばやく反応するという点にある。

この変化を生んだ要因について考察しておくことはアクセントの研究上、非常に重要なことであろう。また、それを踏まえた上で、本章では、第4・5類の統合の発生について考え、どのような地理的広がりをもっているのか、また、世代差がどのようにになっているのかについて述べることにする。

## 7.1.2 変化の要因と筆者の立場

### 7.1.2.1 内的要因

2拍名詞第4・5類が統合しつつあることは上述した先行研究によって指摘されているが、このような変化が生じた理由を説明するのはさほど容易ではない。内的要因による変化として考えられる理由がいくつか存在することと、統合に向かう変化を引き起こしたと考えられる決定的な要因を今のところ厳密には特定できないためである。当初、岸江（1990）ではこの変化が最初に生じたと思われる大阪市内において第5類の拍内下降の消失<sup>31</sup>といった変化が起きたあと、第4類にも変化の兆しがみられるようになり、結果的に第4・5類が統合するという方向に進んだということを指摘した。この根拠は、第5類単独形が第4類と同じLHに変化し、その影響を受けて、助詞つきの場合にも動きが生じ、結果的に第4類はLHL（名詞＋助詞）になっていったという推定にもとづいている。一方で、中井

<sup>31</sup> 杉藤（1982）では、大阪市内の中高年層では、依然として第5類に拍内下降が残っているが、若年層の場合、第5類もLHとなり、語単独形の場合、第4・5類の区別がつかなくなっていることが報告されている。

(1990b) で指摘されたように「中」「外」「今」など「時間空間を示す 4 類語」は拍内下降を完全に持つ世代でもすでに LH-L になっており、これらの語の音調型が 4 類所属語全体に及んだということも内的変化が起きた要因の一つに取り上げられよう。いずれかが決定的な変化の要因となったとするならば、両者は一見矛盾するような印象を与えかねないが、4 類語の少数派であった「中」「外」「今」の LHL が 4 類語の主流となる音調型に至る契機となった要因として、5 類の拍内下降の消失が拍車をかけたと考えれば矛盾をきたすものではないといえるであろう。つまり、第 4・5 類の統合は言語内的な変化によるものであると考えられるのである。田原・村中 (2000) でもほぼ同様の考え方が示されている。

<表 22 : 2 拍名詞のアクセント変化>

第 1 類 : HH	HHH
第 2 類 : HL	HLL
第 3 類 : HL	HLL
第 4 類 : LH	LLH (LLL) > LHL
第 5 類 : LF > LH	LHL

また、この変化はあくまでも大阪市内で先行して起きた変化であり、すでに述べているように、この変化は京阪式アクセント体系を有する諸方言のアクセントにも波及・伝播しつつある。

### 7.1.2.2 外的要因

一方で、2 拍名詞第 4・5 類の統合の原因を言語外に求める考え方も存在する。真田 (1987) では兵庫県西宮市方言の若年層の同種のアクセント現象に対して、次のような解釈を施している。「一般に関西方言を母語とする人は標準語(東京語)の [HLL<sup>32</sup>] 形を耳にして、それを自分の音的フィルターを經由して口から発する段階では [LHL] 形に変形して発音する傾向がある」とし、第 4 類における [LHL] を「新しい非標準語形式、neodialect」と位置づけ、LLH > LHL の変化の理由を

<sup>32</sup> 原文では○●が用いられているが、本論文のアクセント表記の仕方に改めた。以下同。

共通語アクセント（HLL 型）の干渉によるもの、つまり言語接触による外的要因によるものという考え方を示している。

### 7.1.2.3 筆者の立場

本章では、第 4 類と第 5 類の統合の発生について大阪市内での内的要因による変化、つまり第 5 類の拍内下降の消失および第 4 類の LHL への類推変化がまず起こり、それが近畿周辺部まで拡散したと解釈する。これは、2 拍名詞から低起無核型がいずれ消えてしまう可能性があることを意味しており、これまで整然としていた京阪式アクセントの体系を乱す大きな変化であることを指摘しておきたい。

以上が筆者の立場と、問題の在り処である。問題の在り処を示すことによって、方言アクセント論における比較言語学と言語地理学の議論の発展に少しでも寄与することが出来れば幸いである。

## 7.2 近畿中央部のアクセント変化

### 7.2.1 目的

まず、京阪式アクセントの中心地の一つである大阪市内のアクセントについて、2 拍名詞第 4・5 類の統合状況がどのようになっているのかを明らかにする。

### 7.2.2 取り扱うデータ

1980 年代後半に大阪市で行った調査の結果に基づき、当時の大阪市のアクセントの状況について改めて考察する。更に、現在の近畿中央部の変化がどのようになっているのかを検証する為に、2011 年に実施した大阪府・奈良県・三重県アクセントグロットグラム調査のデータの中から、特に大阪府と奈良県を取り上げる。2011 年調査の調査法と調査語彙については 2.3.2 で詳しく述べる。また、中井（1988c）のデータから京都旧市内の第 4 類の動向についても検討する。

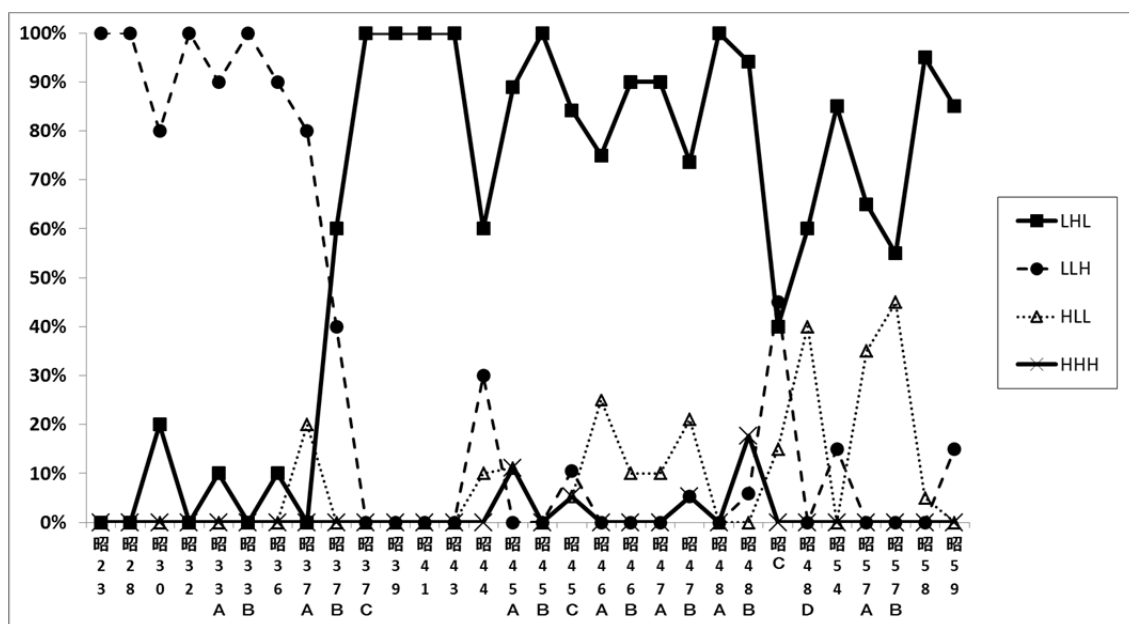
### 7.2.3 分析

#### 7.2.3.1 1980 年代後半の大阪のアクセント

岸江（1990）で指摘した「中高年層においては、従来と同じ体系を持つが、若

年代では、IV・V類が浮動する傾向にある」点について改めて確認しておきたい。これは1980年後半に行われた調査の結果である。当時の2拍名詞第4・5類は、激しい混乱状態にあった。

図29は、話者毎に生年にもとづいて調査結果を示したもので、調査語数は第4類25語、第5類20語である。調査当時の状況として、2拍名詞第4類の動きとして、男性の場合、昭和36～39年生を区切りとして、LLH型からLHL型が優勢になっているのが見て取れる。また、昭和45年生まれ以降の世代については、HLL型もいくらかあらわれている。LLH型からLHL型に一気に変化したわけであるが、その変化はあまりにも急速過ぎて第4類の音調に混乱をもたらしたものと考えられる。そこで、HLL型のような規範に則ったアクセント型も現れたのであろう。或いは、LLH型とLHL型の合流が不安定な状態であったため、テレビやラジオで聞く耳慣れた共通語アクセントで実現してしまうケースもままあったものとみられる。

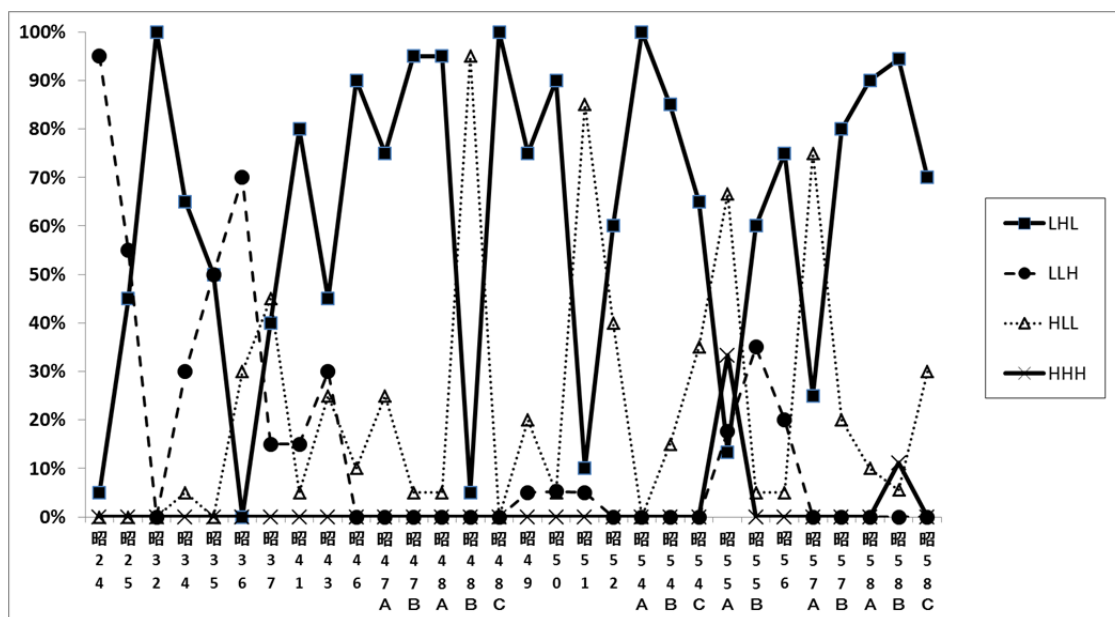


< 図 29 : 2 拍名詞第 4 類の音調型の世代変異 (大阪市男性) <sup>33</sup>岸江 (1997) を一部修正 >

図 30 は、女性の結果であるが、女性の特徴として、男性よりも更に第 4 類の音

<sup>33</sup> 調査時期は 1996 年 8 月下旬及び 1996 年 12 月上旬である。1990 年に行った調査データも一部含んでいる。

調が不安定であることが挙げられる。また、共通語アクセントと同じ HLL 型の出現が昭和 36 年生まれ以降の話者にみられる。男性の場合もほぼ同時期であるが、LHL 型の使用率を超えて HLL 型があらわれることはどの話者にもなかった。一方、女性の場合は個人差が出て、LHL 型よりも HLL 型がよく現れた話者もあり、昭和 48 年生 B、昭和 51 年生、昭和 55 年 A、昭和 57 年 B の 4 名にこの傾向が特に顕著であった。この調査後に大阪市と隣接する東大阪市行われた田原・村中（2000）の「東大阪市調査」の結果では、「頭高アクセントは散見される程度」とあり、共通語的な読み上げ方が型として定着する傾向は見られなかったようである。しかし、岸江（1990）調査では第 4 類の状況について、個人差はあるものの女性の方が共通語的に読み上げる傾向が強かった。



<図 30：2 拍名詞第 4 類の音調型の世代変異（大阪市女性）<sup>4</sup> 岸江（1997）を一部修正>

次に 2 拍名詞第 5 類の単独形について触れておきたい。岸江（1990）では男性の場合、昭和 33 年生まれの人を境に、LF が LH に変化し、拍内下降が消失したことを指摘した。図 29 で見たとおり、昭和 36～39 年生まれを区切りとして、第 4 類が LLH 型から LHL 型が優勢になっているのと、昭和 33 年生まれを境にして 5 類の単独形の拍内下降が消失したのは時期的に連動する。また、岸江（1990）の調査では、年が下るにつれて共通語アクセントと同じ HL 型も聞かれるように

なっている。女性の場合は、昭和 24 年生まれの話者を境に拍内下降が消失し、LH 型に変化している。また、ほとんどの話者は、LH 型が使用率の過半数を占めているが、共通語アクセント HL 型も 10～20 パーセントの割合で使われていることも注目に値する。以上、拍内下降の消失を踏まえて、第 4 類の LHL 型化の状況について述べた。1980 年代後半の調査当時はまだ伝統的な形から新しい形への変化の過渡期であり、かなり不安定な状態になっていた為、共通語アクセントの影響も受けていたようである。しかし、この共通語アクセントの影響というのは第 4・5 類の統合が収束していくに従って次第に排斥されていく。その点についても、次節で検討する。

### 7.2.3.2 2011 年の大阪府・奈良県のアクセント

ここでは 2011 年に行った大阪府・奈良県・三重県アクセントグロットグラム調査の結果から、現在進行しているアクセント変化について述べる。この調査では、第 4 類は「糸、針、息、空、肩、箸、跡、松、数、船、傘」の 11 語、第 5 類は「井戸、窓、秋、鍋、蜘蛛、鶴、猿、声、雨」の 9 語を調査語彙とした。調査法は、読み上げ表を読み上げる形の面接調査である。紙幅の都合上、すべてのグロットグラム調査結果を掲げることは出来ないが、同じ類の語であればほぼ同じ様相を示したので、代表的なもののみをここでは取り上げることにする。

まずは図 31（調査時期：2011 年 9 月から 2012 年 1 月まで）を参照されたい。1 府 2 県すべての地点で 20 代以下は完全に第 5 類統合形の LHL 型になっていることが分かる。ここでは近畿中央部、つまり大阪府と奈良県について見る（三重県については後述）。グロットグラムの情報が読み取り易いように、図 31 の大阪府と奈良県のところに直線を引いた。この線を境に、伝統的な形 LLH 型と第 5 類統合形 LHL 型が対立している。さらに詳細に述べると、大阪府では 30 代や 40 代でも第 5 類統合形 LHL 型を使っている人が多く、奈良県の 30 代以上は殆どが伝統的な形 LLH 型を使っている。このことから先に掲げた結果と比較すると、大阪市内の方が、第 5 類統合形が生じるのが早かったと推定することが出来る。地域によってことなるが、伝統的な形と第 5 類統合形の過渡的な世代は概ね 30～40 代である。なお、注意しておきたいのはこのグロットグラム表上にある大阪府の各地点は大阪市平野区も含めてすべてかつての河内地域だということである。



大阪市内中心部である摂津地域とは地域差があると考えられ、すでに田原・村中（2000）でも指摘されているが、河内地域では統合変化が大阪市内よりも遅れている可能性があることを指摘しておきたい。

項目名【息を】

地点		世代							
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代～
三重県	松阪市					●			●
	津市一志町				●		●		●
	津市白山町					●		●	
	伊賀市青山町			●		●		●	
	名張市市街地			●		● ●	●		
	名張市赤目町			●		●		●	
	宇陀市室生区					●	●		●
	宇陀市榛原区			●		●			●
奈良県	桜井市					●		●	
	大和高田市			●		●		●	
	葛城市當麻					●			
	羽曳野市						●	●	
大阪府	松原市市街地					●			●
	松原市一津屋町				●		●		●
	平野区みなみ					●		●	

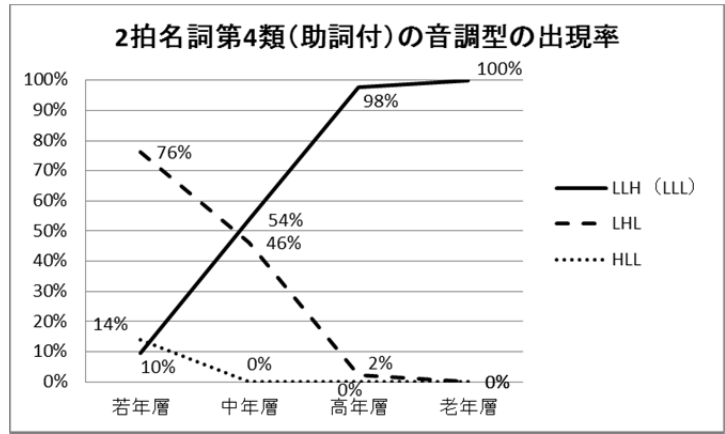
凡例 | LHL ● LLH

<図 31：第 4 類「息を」のグロットグラム<sup>34</sup>>

図 32（調査時期：2011 年 9 月から 2012 年 1 月まで）は、大阪府・奈良県・三重県の 1 府 2 県の 2 拍名詞第 4 類（助詞付）の音調型の出現率（調査法、調査語彙は本節冒頭にある通り）を年齢層<sup>35</sup>ごとに集約してグラフ化したものである。若年層のみ HLL 型があらわれてはいるものの、その割合は極めて低い。岸江（1990）の調査当時の混乱期にあれほど影響を与えていた共通語アクセントが殆ど聞かれなくなったということである。

<sup>34</sup> 伝統的な形を丸形で、新しい形を線形で、共通語の影響を受けていると思われるものを四角形で示す。以下同。

<sup>35</sup> 老年層：70 歳以上、高年層：50 歳から 69 歳まで、中年層：30 歳から 49 歳まで、若年層：29 歳以下で集計した。



< 図 32 : 2 拍名詞第 4 類 (助詞付) の音調型の出現率 >

項目名【窓】

地点		世代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代~
三重県	松阪市									○
	津市									
	一志町									
	津市									
	白山町									
	伊賀市						○		○	
	青山町									
	名張市							○		
奈良県	市街地							○		
	名張市					○			○	
	赤目町								○	
	宇陀市			田						
	室生区									
	宇陀市					○				○
	榛原区									
大阪府	桜井市					○	○		○	
	大和高田市								○	
	葛城市						○			
	當麻									
	羽曳野市			田				○	○	
	松原市									○
大阪府	市街地									○
	松原市							○		○
	一津屋町									
	平野区								○	
みなみ										

凡例 | LH ○ LF 田 HL

< 図 33 : 第 5 類「窓」のグロットグラム >

図 33 (調査時期: 2011 年 9 月から 2012 年 1 月まで) についても、大阪府・奈良県の結果に注目する (三重県については後述)。この図から拍内下降の消失の時期を知ることができる。ここでも同様に情報が読み取り易いように直線を引いた。

この線に沿って判断すると、奈良では 30 代で拍内下降が消失し、大阪府では 50 代で拍内下降が消失しているのが分かる。つまり、拍内下降の消失は奈良より大阪府の方が 20 年ほど早く起こったということになる。

以上から、拍内下降の消失が起こって間もなく、第 4 類の LHL 型化が起こっていることがここでも明らかとなった。つまり、この二つの現象は独立して起こっているものではなく、連動して起こった可能性が大きいことが分かる。

### 2.3.3 中井（1988）から見る京都旧市内の状況

ここでは 1980 年代末の京都旧市内の状況について確認しておきたい。データとして中井（1988c）を参照する。中井（1988c）では、変化率（老ではアが安定しているが、若はそれと違うアを持つ割合）の表が掲載されており、これを読み取るに、第 4 類の変化率は 17%、第 5 類の変化率は 12%であり、その音調も共通語アクセント型である HLL 型であった。氏は「真田（1987）の西宮市の場合に比べると本調査の結果は（中略）かなり保守的である」と判じている。つまり、京都旧市内のアクセント変化はその保守性から遅れており、第 4 類 LHL 型化の変化については大阪市が他の地域よりも先行しているということになる。

以上から大阪市内で行ったこれまでの調査結果も含めて考察すると、2 拍名詞第 4 類の第 5 類統合形 LHL 型は大阪市内で誕生したあと、河内地域から京都や奈良に伝播したものと考えられる。

### 7.2.4 結論

2 拍名詞第 4・5 類の統合混乱期に大阪市内では聞かれた共通語アクセントと同じ HLL 型は現在現れず、第 4 類は伝統的な形の LLH 型から第 5 類合流形の LHL 型に変化しつつある。その境目にあたる世代は大阪では S47～S57（現在の 30～40 代）生まれ、奈良では S58～H4（現代の 20 代）生まれであり、何れの地域も S58～H4 生まれ以下では統合を遂げつつある。また、2 拍名詞第 4・5 類の統合の前には必ず第 5 類の拍内下降の消失が起こっており、2 つの事象は連動していることが分かった。

## 7.3 近畿周辺部のアクセント変化

### 7.3.1 目的

近畿中央部での2拍名詞第4・5類の統合状況が確認出来たわけであるが、この現象は近畿中央部にのみ起こっているわけではないと推測出来る。この仮説を検証するため、本項では、京阪式アクセントの分布地域の周辺部にあたる、三重県（京阪式アクセントの東端）と徳島県（京阪式アクセントの西端）のアクセントについて、2拍名詞第4・5類の統合状況がどのようになっているのかを明らかにする。

### 7.3.2 取り扱うデータ

京阪式アクセント分布地域の東端にあたる三重県に関しては、前述の2011年に行った大阪府・奈良県・三重県アクセントグロットグラム調査のデータ<sup>36</sup>から取り上げる。京阪式アクセント分布地域の西端にあたる徳島県に関しては、1990年代後半に調査を行った吉野川流域南岸グロットグラム（岸江他・2010）と同じく1990年代後半に調査が行われた吉野川流域北岸グロットグラム（真田他・2002）をデータとして取り扱う。

### 7.3.3 分析

#### 7.3.3.1 分析（三重県）

まず、三重県の状況について述べる。桑名市－伊勢市間では近畿中央部で発生したとみられるアクセント変化が波及していることは中井・小泉（1992）、岸江（2001）でも指摘されていることである。

図34（調査時期2011年9月から2012年1月まで）を見ると、第4類は伝統的な形のLLH型から第5類合流形のLHL型に変化しつつあることが分かる。また、その過渡期は30代にあるようで、40代以上は伝統的な形のLLH型、20代は第5類合流形のLHL型となっている。

---

<sup>36</sup> 調査の概要は2.3.2に示した通りである。

項目名【箸を】

地点		世代							
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代~
三重県	松坂市					●			●
	津市 一志町				●		●		●
	津市 白山町					●		●	
	伊賀市 青山町			●		●		●	
	名張市 市街地			●		● ●	●		
	名張市 赤目町			●		●		●	
	宇陀市 室生区		田			●	●		●
奈良県	宇陀市 榛原区			●	●				●
	桜井市		●			●		●	
	大和高田市		田	●		●		●	
	葛城市 當麻					●			
大阪府	羽曳野市						●	●	
	松原市 市街地					●			●
	松原市 一津屋町				●		●		●
	平野区 みなみ			●		●		●	

凡例 | LHL ● LLH 田 HLL

< 図 34 : 第 4 類「箸を」のグロットグラム調査結果 >

では、拍内下降についてはどうであろうか。前掲図 33 をご覧頂きたい。三重県の部分に注目してみると、伊賀市以西では 40 代以上に拍内下降が残存し、津市にはそれが見当たらない。津市には拍内下降は存在しないのである。松坂市については 80 代の話者一人から聞かれたただけである。これは語個別の現象ではなく、同類別語の調査結果からも同様の状況が確認出来る。ここで思い出して頂きたいのが、服部（1930）と金田一（1955）の議論である。両者は三重県に拍内下降が存在するか否かについて正反対の見解を持っていた。三重県においては、服部（1930）では拍内下降はありとされ、金田一（1955）ではないとされてきた。これはどちらも正しかったのである。服部氏は三重県亀山市の生まれであり、亀山市は伊賀市に東接する。今回の調査では亀山市は調査しなかったが、服部氏の故郷亀山市では拍内下降があり、氏は幼い頃からそれを聞いて育ったのであろう。

一方、金田一氏は拍内下降の存在しない三重県津市の結果を以って、三重県には拍内下降は存在しないと断じたのであろう。三重県には、拍内下降が存在する地域と、存在しない地域がある。本当はどちらの調査結果も正しかったのである。

以上、京阪式アクセント周辺部に位置する三重県の2拍名詞第4・5類について見た。三重県の場合、大阪府など近畿中央部より少し遅れる形で、20～30代を境に第4類のLHL型化が起きていることが分かった。

### 7.3.3.2 分析（徳島県）

次に徳島県の京阪式アクセントの状況について検討する。岸江他（2010）に詳しいが、アクセント体系の分布状況を説明しておく、吉野川南岸においては徳島市から山川町までが京阪式アクセント地域であり、それ以西は京阪式アクセントと讃岐式アクセントの境界地帯、三加茂町辺りから西が讃岐式アクセントの地域となる。第4類助詞付のグロットグラムの結果を見てみると、どれも京阪式アクセント分布地域にLHL型化が起こっていることが分かる（図37・38）。具体的な世代としては30代が境界となっているようである。これは1990年代後半の調査であり、当時の30代以下の年代から第4・5類の統合が起こっているということになる。同時期に行われた調査で、吉野川流域北岸地域を対象とした真田他（2002）でもほぼ同様の結果を報告している。

なお、徳島県の京阪式アクセントには拍内下降はない為、第5類単独形は全世代・全地点でLHとなる。

本章冒頭でも述べた通り、第4類LHL型化の波は四国にまで及んでいることが明らかである。

### 7.3.4 結論

2拍名詞第4・5類の統合は、近畿中央部だけではなく、京阪式アクセントの周辺部にまで及んでいる。統合の状況としては大阪と同様で、現在その過渡期にあり、三重・徳島にあっては30代がその過渡期にあたる。

## 7.4. 京阪式アクセントとそれに接触する異体系アクセント地域の状況

### 7.4.1 目的

京阪式アクセントのほぼ全域で2拍名詞第4・5類の統合状況が確認出来たわけであるが、この現象は京阪式アクセント地域にしか起こっていないのであろうか。本項では京阪式アクセントに隣接する異体系アクセント地域に、第4類のLHL型化が起こっているか検証する。

### 7.4.2 取り扱うデータ

京阪式アクセント地域の東端と接触する異体系アクセント地域がどうなっているかを確認するため、名古屋—伊勢市間グロットグラム集である岸江他（2001）をデータとして取り扱う。また、京阪式アクセント地域の西端と接触する異体系アクセント地域がどうなっているか確認するため、大阪—岡山間アクセントグロットグラム（真田他・1993）を見る。更に、京阪式アクセントと接触する異体系アクセントとして、徳島県西部と讃岐本土に存する讃岐式アクセントの現状も見る。これには1990年代後半に吉野川南岸を対象として行ったグロットグラム調査である岸江他（2010）と、2011年に行った四国北部グロットグラム（近刊）のデータを利用する。

### 7.4.3 分析

#### 7.4.3.1 分析（名古屋市・東京式アクセント—内輪系<sup>37</sup>）

図35は名古屋市—伊勢市間のアクセントの類別体系をグロットグラム表として示したものである。桑名—伊勢間は京阪式アクセントの地域である。桑名の若年層は名古屋市からの影響を受けて東京式アクセント化しつつあるが、伊勢に近づくにつれて別の変化の波が及んでいることが分かる。伊勢市から松阪市、津市を経て鈴鹿市の辺りまで、若年層の類別体系が1/2・3/4・5に変化している。伊勢市、松阪市に至っては中年層（～40代）の話者にまで第4類LHL型化が及んでいる。つまり、岸江（2001・2002b）でも述べているとおり、京阪式アクセント地域の周辺部（東端）にも、第4類LHL型化は起こっているということが指摘出来るのである。一方、桑名以北の東京式アクセント（内輪式）地域では第4

<sup>37</sup> 秋永編（2010）のアクセント分布図（金田一春彦作図による）より判断した。

類 LHL 型化は一切起きていない。

名古屋市-伊勢市間 グロットグラム

項目 2拍名詞類別体系

凡例

- 1 (LHH) / 23 (LHL) / 45 (HLL)      ◎ 1 (HHH) / 23 (HLL) / 45 (LHL)  
 ▼ 1 (HHH) / 23 (HLL) / 4 (LLH) / 5 (LHL)      ◇ 判定不能

		世代/地点	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
愛知 県	名古屋市東区	■	■				■		■	
	名古屋市中村区	■	■		■			■		
	佐屋町	■	■			■		■		
	蟹江町	■	■		■				■	
	弥富町	■	■	■					■	
三重 県	長島町北部		■					■		
	長島町南部	■	■	■	■				■	
	桑名市旧市街	■	■			▼			▼	
	朝日町	■	◎	■				▼		
	川越町	■	◎			▼			▼	
	四日市市富田		▼	▼	■			▼		
	四日市市旧市街	◇	■	◎				▼		
	鈴鹿市	◎	▼							▼
	河芸町	■	◎						▼	
	津市白塚	▼	◎			▼			▼	
	津市柳山	◎	▼			▼			▼	
	香良洲町	◎		▼					▼	
	三雲町	◎	◎			▼				
	松阪市旧市街	◎		◎		▼			▼	
	松阪市駅部田	◎				▼			▼	
	明和町	◎	◎			◎			◎	
	小俣町	◎	◎		◎	◎				▼
	御薊村	◎	◎	◎					▼	
	伊勢市	◎	◎				▼	▼	▼	

< 図 35 : 岸江他 (2001b) より 2 拍名詞類別体系 >





中心に LHL 型が浸透してきていることが見て取れる。徳島市を中心とした徳島県東部に存する京阪式アクセントー徳島型が第 4 類 LHL 型化の影響を受けていることは然ることながら、ここでは、池田町を中心とする徳島県西部の讃岐式アクセントー池田型にも大阪で起きた LHL 型の影響が及んでいることを指摘しておきたい。

以上、見てきた通り、名古屋市や岡山県の東京式アクセントと違い、徳島県西部に存する讃岐式アクセントには第 4 類 LHL 型化の現象が起こっている。

2拍名詞第4類:傘が

	池田町 三縄	池田町 池田	井川町 辻	三加茂町 加茂	三加茂町 江口	半田町 半田	貞光町 貞光	穴吹町 穴吹	山川町 山川	山川町 山川	山川町 山瀬	川島町 学	川島町 川島	鴨島町 西麻植	鴨島町 鴨島	鴨島町 牛島	石井町 浦庄	石井町 石井	徳島市 国府	徳島市 蔵本	徳島市 佐古	徳島市 旧市内		
90代	田			田		☒			田	田	田			☒				☒			田		90代	
80代		田	田	田	☒	☒	田					☒	☒		☒	☒			☒		☒		80代	
70代	田	田	田		田		田	田					☒				☒					☒	70代	
60代	田	田	田	田	田	☒	田		田	田			☒			☒		☒	☒	田	☒		60代	
50代	田			田	田		田	田	田	田			☒		田	田		☒	☒			田	田	50代
40代		田				☒		田			田				田				田				40代	
30代	△		田	田	田	☒		△		田			田	田		△		田	田	田	田	田	30代	
20代									△			△											20代	
	三縄 池田町	池田町 池田	辻 井川町	加茂 三加茂町	江口 三加茂町	半田 半田町	貞光 貞光町	穴吹 穴吹町	川田 山川町	山川 山川町	山瀬 山川町	学 川島町	川島 川島町	西麻植 鴨島町	鴨島 鴨島町	牛島 鴨島町	浦庄 石井町	石井 石井町	国府 徳島市	蔵本 徳島市	佐古 徳島市	旧市内 徳島市		

凡例

LHL	△
LLH	田
LLL	☒
LHH	田

<図 36 : 岸江他 (2010) より「傘が」のグロットグラム>

2拍名詞第4類:(この)跡が

	池田町 三縄	池田町 池田	井川町 辻	三加茂町 加茂	三加茂町 江口	半田町 半田	貞光町 貞光	穴吹町 穴吹	山川町 山川	山川町 山川	山川町 山瀬	川島町 学	川島町 川島	鴨島町 西麻植	鴨島町 鴨島	鴨島町 牛島	石井町 浦庄	石井町 石井	徳島市 国府	徳島市 蔵本	徳島市 佐古	徳島市 旧市内	
90代	田			田		田			田	◎	△			田				田			田		90代
80代		田	田	田	田	田	田				田	田			田	田			田				80代
70代	田	△	田		田		田	田	田				田				田					田	70代
60代	田	田	田	田	田	田	田		田	田			田			田		田	田	田	田		60代
50代	田			田	田		田	田	田	☒			田	田	田		田	田				田	50代
40代		田				田		/			田					田		田					40代
30代	△		田	△	田	◎		△		△		田	田	田	田		△		田	△	△	田	30代
20代									△			△											20代
	三縄 池田町	池田町 池田	辻 井川町	加茂 三加茂町	江口 三加茂町	半田 半田町	貞光 貞光町	穴吹 穴吹町	川田 山川町	山川 山川町	山瀬 山川町	学 川島町	川島 川島町	西麻植 鴨島町	鴨島 鴨島町	牛島 鴨島町	浦庄 石井町	石井 石井町	国府 徳島市	蔵本 徳島市	佐古 徳島市	旧市内 徳島市	

凡例

HHH	/
HLL	◎
LHL	△
ELL	田
LLL	☒
LHH	田

<図 37 : 岸江他 (2010) より「(この)跡が」のグロットグラム>

加えて、香川県本土にある讃岐式アクセントについて述べる。2011年に行った四国北部グロットグラムは、香川県高松市から愛媛県愛南町までを線で結んで、その線上に調査地点をとったものである。そのデータから、香川県の若年層の部分を抽出した。その結果、若年層は読み上げ表を共通語アクセントで読むことが多かった。共通語アクセントで読んだ話者なら第4類はHLL型、讃岐式アクセントで読んだ話者なら第4類はLLH(LLL)型であり、第4類LHL型化の影響は受けていなかったと言える。

#### 7.4.4 結論

以上、見てきたとおり、京阪式アクセントを取り巻く異体系アクセント地域において第4類のLHL型化は、名古屋市・岡山県などの東京式アクセント地域には及んでいないが、徳島県西部に分布する讃岐式アクセントには影響を与えているということが分かった。京阪式アクセントの周辺部に存する東京式アクセントには、2拍名詞第4類のLHL型化の気配すら見られない。これはアクセント体系というシステムに守られた結果であると考えられる。その反面、徳島県西部に広がる讃岐式アクセントには2拍名詞第4類のLHL型化が起きている。但し、香川県本土側の讃岐式アクセント地域では第4類LHL型化は今のところ及んでいない。

#### 7.5 おわりに

これまで整然としていた京阪式アクセント体系のバランスを崩すこととなった2拍名詞第4類と第5類の統合は、近畿中央部だけで起こっているのではない。大阪府で起きた変化が、近畿周辺部にも伝播し、拡散したものである。この変化は、京阪式アクセントの分布地域ほぼ全てに起こっているといつて良い。また、京阪式アクセント地域に隣接する東京式アクセント地域には第4類のLHL型化の影響を受けず、また、その気配すらない。第4類LHL型化は京阪系アクセント地域内でのみ伝播しうるものであるということが言えるのである。これはアクセント変化として寄る波に、東京式アクセントの体系が防波堤のような役割をしており、それによって守られた結果であると言える。「メッチャ」や「チャリ」といった関西発の新方言など拡散パターンとは異なり、アクセントは体系的に変化していくものであることが分かる。

一方、異体系アクセントでも、徳島県西部に広がる讃岐式アクセントー池田型では第4類 LHL 型化が起きている。これは京阪式アクセントに起きている変化と軌を一にするものであり、注目に値する。

## 参考文献

---

- NHK 編 (1985) 『日本語発音アクセント辞典 (改訂新版)』、日本放送出版協会
- 秋永一枝 (1957) 「アクセント推移の要因について」『国語学』31、国語学会
- 秋永一枝 (1986) 「アクセント概説—史的变化と方言分布—」『講座方言学 1  
方言概説』国書刊行会
- 秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊 (1997・1998) 『日本語  
アクセント史総合資料 索引篇・研究篇』、東京堂出版
- 秋永一枝 (1991) 『新明解日本語アクセント辞典』、三省堂
- 秋永一枝 (2009) 『日本語音韻史・アクセント史論』、笠間書院
- 秋永一枝 (2010) 『新明解日本語アクセント辞典 (CD 付)』、三省堂
- 有坂秀世 (1959) 『音韻論 (増補版)』、三省堂
- 生田早苗 (1951) 「近畿アクセント圏辺境地区の諸アクセントについて」  
『国語アクセント論叢』、法政大学出版局
- 石田基広 (2008) 『R によるテキストマイニング入門』、森北出版
- 石田祐子 (1999) 『徳島県アクセントの研究』、卒業論文：徳島大学総合科学部
- 石田祐子・岸江信介 (2001) 「徳島県諸方言アクセントについて」『言語文化研究』  
第 8 巻、徳島大学総合科学部
- 犬飼隆・吉田比呂子・柿原律子 (1989) 「近畿方言若年層のアクセントの動向：  
二拍名詞五類をめぐって」『神戸大学教育学部研究集録』83、pp. 1-10、  
神戸大学教育学部
- 井上史雄 (2001) 『計量的方言区画』、明治書院
- 上野和昭・仙波光明・森重幸 (1991) 「徳島県三好郡山城谷アクセントの動向  
—二拍名詞を中心に—」『徳島大学国語国文学』4、徳島大学国語国文学会
- 上野和昭・森重幸 (1992) 「徳島県出合アクセントについて」『徳島大学総合  
科学部紀要』5、徳島大学総合科学部
- 上野和昭・仙波光明 (1993) 「徳島市における三拍動詞アクセントの変化の実態」

- 『徳島大学国語国文学』6、徳島大学国語国文学会
- 上野和昭（1994a）「徳島県木頭村の方言アクセントについて」『言語文化研究』1、  
徳島大学総合科学部
- 上野和昭（1994b）「徳島市における四拍動詞アクセントの変化の実態」『徳島大学  
国語国文学』7、徳島大学国語国文学会
- 上野和昭（1997a）『徳島県のことば』日本のことばシリーズ36、明治書院
- 上野和昭（1997b）「接合アクセントから結合アクセントへ」『島田治還暦記念  
論文集一言葉と文化一』、島田治還暦記念論文集刊行会
- 上野和昭（2000）「徳島県下の讃岐式アクセントにおける動詞アクセント体系  
について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』45-3、早稲田大学大学院  
文学研究科
- 上野和昭（2011）『平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究』、早稲田大学  
出版部
- 上野善道（1977）「日本語のアクセント」『岩波講座日本語5、音韻』岩波書店
- 上野善道（1982）「新潟県における中輪・外輪両アクセントの境界線」『金沢大学  
文学部論集（文学科編）』第2号、金沢大学
- 上野善道（1984）「類の統合と式保存」『国語研究』47、国学院大学国語研究会
- 上野善道（1985a）「香川県伊吹島方言のアクセント」『日本学士院紀要』40-2、  
日本学士院
- 上野善道（1985b）「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布（1）」  
『日本学士院紀要』40-3、日本学士院
- 上野善道（1987）「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布（2）」  
『日本学士院紀要』42-1、日本学士院
- 上野善道（1988）「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集'88』、  
東京大学
- 上野善道（1995）「伊吹島方言アクセントの年齢別変化」『東京大学言語学論集』  
14、東京大学
- 上野善道（1997）「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」『日本語音声〔2〕  
アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』、三省堂
- 上野善道（2001）「伊吹島方言の4拍体言のアクセント」『東京大学言語学論集』

## 20、東京大学

- 上野善道（2006）「日本語アクセントの再建」『言語研究』130、pp. 1-42、  
日本言語学会
- 上野善道（2007）「録音資料に基づくアクセント調査：香川県伊吹島方言の場合」  
『東京大学言語学論集』26、東京大学
- 江川清（1973）「最近二十年間の言語生活の変容—鶴岡市における共通語化に  
ついて」『言語生活』257、pp. 56 - 63
- 江川清（1973）「多変量解析の社会言語学的調査への適用例—鶴岡市における  
共通語化の調査資料を用いて—」『国立国語研究所論集 ことばの研究』  
第4集、国立国語研究所
- 江川清・米田正人（1975a）「言語の多変量解析（一）—適用例を中心に—」  
『計量国語学』73、pp. 18-28、計量国語学会
- 江川清・米田正人（1975b）「言語の多変量解析—（二）共通語化の調査分析  
から—」『計量国語学』75、pp. 23-41、計量国語学
- 奥村三雄（1990）『方言国語史研究』、東京堂出版
- 加藤信昭（1968）「境界地帯におけるアクセントの問題—吉野川流域を中心  
として—」日本方言研究会第6回発表原稿集
- 加藤信昭（1975）「四国方言」『新・日本語講座3、現代日本語の音声と方言』、  
汐文社
- 金沢治（1934）『阿波言葉のアクセント』、私家版
- 金沢治（1951）『阿波に於けるアクセントの研究』、私家版
- 金沢治（1968）「祖谷地方の方言」祖谷総合調査6
- 金沢浩生・仙波光明・岸江信介・村中淑子・野田和子・石田祐子（1999）「穴吹町  
の方言」『阿波学会紀要』45 徳島県立図書館
- 亀田裕見（2006）「四国北東部における下降音調の音声学的比較—いわゆる  
「下降式」無核型と2拍目核型のF0値の動き—」『音声研究』第10巻  
第1号、日本音声学会
- 川上蓁（1962）「京阪アクセントの分析的表記法」『音声学会会報』109、音声学会
- 川上蓁（1963）「文末などの上昇調について」『国語研究』16、国学院大学国語  
研究会（『日本語アクセント論集』汲古書院1995に再録）



- 川上 蓁 (1968) 「副次アクセント素なるものの内容」『言語研究』52
- 川上 蓁 (1973) 『日本語アクセント法』、学書房出版
- 川上 蓁 (1977) 『日本語音声概説』、桜楓社
- 川上 蓁 (1990) 「アクセント研究の新展開」『国語研究』54、国学院大学国語研究会
- 川上 蓁 (1995) 『日本語アクセント論集』、汲古書院
- 川上 蓁 (1996) 「声の高低と昇降」、国学院大学国語研究会発表要旨
- 岸江 信介 (1990) 「大阪市若年層における二拍名詞アクセント」徳川宗賢編『方言音調の諸相：西日本(1)』、pp. 27-41、科研費報告書
- 岸江 信介 (1997) 「大阪市若年層にみられるアクセント変化」『西日本におけるネオ方言の実態に関する調査研究』、科研費報告書
- 岸江 信介・石田 祐子・中井 精一・鳥谷 善史 (1999) 「エクセルとファイルメーカープロを利用した言語地図の作成—大阪府言語地図と徳島県言語地図を作る—」第15回西日本国語国文学データベース研究会発表原稿
- 岸江 信介 (2001) 「桑名—伊勢間にみられる2拍名詞4・5類のアクセント変化」『伊勢湾岸西部地域の社会言語学的研究』、pp. 1-14、近畿方言研究会
- 岸江 信介・太田 有多子・武田 拓・中井 精一・西尾 純二・半沢 康 (2001) 『名古屋—伊勢市間グロットグラム集』地域語資料5、近畿方言研究会編
- 岸江 信介 (2002a) 「第7章 地域からの提言 近畿地地方からの提言」『21世紀の方言学』、pp. 425-426、国書刊行会
- 岸江 信介 (2002b) 「名古屋市—伊勢市間にみられるアクセント変化の動向」『地域語研究論集 山田達也先生喜寿記念論文集』、pp. 99-120、港の人
- 岸江 信介他編 (2008) 『東祖谷のことば』、徳島大学国語学研究室
- 岸江 信介・仙波 光明・岡田 祐子・村田 真実 (2010) 『徳島県吉野川流域アクセントの動態—吉野川流域南岸グロットグラム調査報告(2)—』、徳島大学国語学研究室
- 岸江 信介・村田 真実 (2012) 「京阪式アクセントにおける2拍名詞の類の統合状況と低起無核型の消失傾向—大阪・奈良・三重・徳島方言を中心に—」『音声研究』第16巻第3号、pp. 34-46、日本音声学会
- 君山 由良 (2005) 『コレスポネンス分析の利用法』、データ分析研究所

- 金田一京助（1938）『新訂増補国語音韻論』、刀江書院
- 金田一春彦（1947）「語調変化の法則の探究」『Toyogo Kenkyu』、東京大学文学部  
言語学研究室
- 金田一春彦（1954）「東西両アクセントのちがいが出来るまで」『文学』第 22 卷  
第 8 号
- 金田一春彦（1955）「近畿中央部アクセント覚え書き」『東条操先生古希祝賀  
論文集』、近畿方言双書 1、pp. 323-345、近畿方言学会編  
（のちに金田一春彦（1977）『日本語方言の研究』東京堂出版に再録）
- 金田一春彦（1975）「熊野灘沿岸諸方言のアクセント」『日本の方言』、  
教育出版
- 金田一春彦（1964）『四座講式の研究』、三省堂
- 金田一春彦（1965）「讃岐アクセント変異成立考（上）」『国語研究』第 21 号、  
国学院大学国語研究会
- 金田一春彦（1966）「讃岐アクセント変異成立考（下）」『国語研究』第 22 号、  
国学院大学国語研究会
- 金田一春彦・秋永一枝・金井英雄（1966）「真鍋式アクセントの考察」『国語国文』  
第 35 卷第 1 号、pp. 1-30、中央図書出版社
- 金田一春彦（1967）『日本語音韻の研究』、東京堂出版
- 金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究 原理と方法』、塙書房
- 金田一春彦（1975）『日本語の方言—アクセントの変遷とその実相』、教育出版
- 金田一春彦（1976）「連濁の解」『Sophia Linguistica』2 号
- 金田一春彦（1977a）『日本語方言の研究』、東京堂出版
- 金田一春彦（1977b）「アクセントの分布と変遷」『岩波講座日本語 11 方言』、  
岩波書店
- 金田一春彦（1980）「日本語のアクセント」『アクセント論集日本語研究 2』、  
有精堂出版
- 金田一春彦（1983）『日本語セミナー4 方言の世界』、筑摩書房
- 金明哲（2005）「R と対応分析」<http://mjln.doshisha.ac.jp/R/26.pdf>
- 郡史郎（2011）「大阪市方言若年層の二拍名詞 4 類 5 類のアクセントについての  
一考察—特に文中でのふるまいに注目して—」『音声文法』、pp. 229-250、

- くろしお出版
- 国語学会編（1980）『国語学大辞典』、東京堂出版
- 坂本清恵・秋永一枝・上野和昭・佐藤栄作・鈴木豊編（1998）『「早稲田語類」  
「金田一語類」対照資料』、アクセント史資料研究会
- 坂本清恵（1990）「丸本を資料とするアクセント研究の問題点」『国文学研究』100
- 坂本清恵（2005）「外来語の音節構造とアクセント」『論集（I）』、アクセント史  
資料研究会
- 佐久間鼎（1915・1916）「日本語のアクセントとは果たして何物？」『心理研究』  
八巻五冊、九巻一冊
- 佐久間鼎（1916）「東京語のアクセントとその言語心理上の意味（上・中・下）」  
『心理研究』十巻一、四、六冊
- 佐久間鼎（1917）『国語アクセント』、心理学研究会出版部
- 佐久間鼎（1919）『国語の発音とアクセント』、同文館
- 佐久間鼎（1923）『国語アクセント講話』、同文館
- 佐久間鼎（1927）「アクセント論について」『心理学研究』二巻三輯
- 佐久間鼎（1929）『日本語音声学』、京文社
- 桜井茂治（1975）「複合名詞のアクセント法則」『古代国語アクセント史論考』、  
桜楓社
- 桜井茂治（1978）『日本語の旋律』、双文社出版
- 佐藤栄作（1985）「香川県伊吹島方言のアクセント体系を考える」『国語学』140、  
国語学会
- 佐藤栄作（1986）「香川県高瀬アクセントについて——三野町大見の体言  
アクセントから——」『山手国文論攷』第7号、神戸山手女子短期大学
- 佐藤栄作（1986）「香川県高瀬アクセント所属語彙（用言篇I）」  
『神戸山手女子短期大学紀要』29、神戸山手女子短期大学
- 佐藤栄作編（1989）『アクセント史関係方言録音資料アクセント史料索引別冊』  
アクセント史資料研究会
- 佐藤栄作（2005）「HLL型からアクセント史を考える」『論集I』、アクセント史  
資料研究会
- 佐藤大和（1989）「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」『講座日本語と

- 日本語教育 2 『日本語の音声・音韻（上）』、明治書院
- 真田信治（1987）「ことばの変化のダイナミズム ―関西圏における neo-dialect について―」『言語生活』429、pp. 26-32、筑摩書房
- 真田信治（1990）『地域社会の社会言語学的研究』、和泉書院
- 真田信治・都染直也・大和シゲミ（1993）『大阪―岡山間アクセントグロットグラム』、文部科学省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴との実態とその教育に関する総合的研究（研究代表者：杉藤美代子）」1992年度研究成果報告書、大阪大学文学部
- 真田信治・武田佳子・余健（2002）「徳島・吉野川流域におけるアクセントの現在」『阪大日本語研究』14、pp. 61-106、大阪大学
- 下村泰子（1970）「高知方言のアクセント尾高型を中心に―」『方言研究の問題点』平山輝男博士還暦記念会
- 下村泰子（1971）「高知県安芸郡甲浦方言のアクセントと高知市方言アクセントとの比較考察」『都立大学人文学報』80号、東京都立大学人文学部
- 妹尾修子（1966）「香川県伊吹島のアクセント」『国語研究』22、国学院大学国語研究会
- 仙波光明・岸江信介・石田祐子編（2002）『徳島県言語地図』、徳島大学国語学研究室
- 仙波光明・村田真実・坂東正康・清水勇吉・山岡雄貴（2009）「美馬市美馬町の方言」『阿波学会阿波学会総合学術調査 阿波学会紀要』第55号、pp. 181-190、阿波学会
- 仙波光明・村田真実（2010）「阿波市阿波町の方言」『阿波学会阿波学会総合学術調査 阿波学会紀要』第56号、pp. 169-174、阿波学会
- 仙波光明・村田真実（2011）「つるぎ町一字の方言」『阿波学会阿波学会総合学術調査 阿波学会紀要』第57号、pp. 165-176、阿波学会
- 仙波光明・村田真実・峪口有香子（2012）「吉野川市山川町の方言」『阿波学会阿波学会総合学術調査 阿波学会紀要』第58号、阿波学会
- 仙波光明・村田真実・峪口有香子（2013）「三加茂町の方言」『阿波学会阿波学会総合学術調査 阿波学会紀要』第59号、阿波学会
- 杉藤美代子（1982）『日本語アクセントの研究』、明治書院

- 高田豊輝（1985）『徳島の方言』、高田豊輝
- 武田佳子（2009）「大阪方言アクセントにおける二拍5類語の現在—三世代話者の読み上げデータからのケーススタディー—」『阪大日本語研究』21、pp. 109-127、大阪大学文学部
- 田中ゆかり（1999）「指向性解釈の可能性—首都圏西部域高年層アクセントデータによる検討—」『国語研究』62、国学院大学国語研究会
- 田原広史・村中淑子（2000）「大阪アクセントにおける二拍名詞IV類・V類の統合について—20代から60代までの実態—」『20世紀フィールド言語学の軌跡“徳川宗賢先生追悼論文集”』、pp. 267-288、変異理論研究会
- 玉井節子（1965）「香川県のアクセント」『国語研究』20、国学院大学国語研究会
- 徳川宗賢（1962）「“日本諸方言アクセントの系譜”試論—「類の統合」と「地理的分布」から見る—」『学習院大学国語国文学会誌』6、学習院大学
- 徳川宗賢（1981）『日本語の世界8 言葉・東と西』、中央公論社
- 徳高平蔵・岸田悟・藤村喜久郎（1996）『自己組織化マップ』、シュプリンガー
- 徳高平蔵・藤村喜久郎・山川烈監修（2002）『自己組織化マップ応用事例集 SOM による可視化情報処理』、海文堂
- 豊田秀樹（2008）『データマイニング入門—Rで学ぶ最新データ解析—』、東京図書株式会社
- 中井幸比古（1982）「真鍋島方言と佐柳島方言のアクセントについて—中間報告—」『言語学研究』第1号、京都大学
- 中井幸比古（1984）「真鍋式アクセントについて—名詞を中心に—」『言語学研究』第86号、京都大学
- 中井幸比古（1984）「真鍋式アクセントの所属語彙」『言語学研究』第3号、京都大学
- 中井幸比古（1985）「香川県高見島のアクセント—名詞を中心に—」『国語研究』第48号、国学院大学国語研究会
- 中井幸比古（1986）「愛媛県新居浜市におけるアクセントの境界について」『言語学研究』5、京都大学
- 中井幸比古（1988a）「現代京都方言のアクセント資料2」『アジア・アフリカ文法研究』23、AA研

- 中井幸比古 (1988b) 「京都方言における外来語のアクセント」『言語学研究』7、  
京都大学
- 中井幸比古 (1988c) 「京都旧市内における若年層のアクセント(2)」『国語研究』  
51、pp. 1-37、国学院大学国語研究会
- 中井幸比古 (1990a) 「式の音調に関する二三の問題について」『香川大学教育学部  
研究報告』1-79、香川大学
- 中井幸比古 (1990b) 「大学生のアクセント(1)：近畿地方の中央式諸方言について  
(1)」『香川大学一般教育研究』38、pp. 17-52、香川大学
- 中井幸比古 (1990・1991) 「京都府における、いわゆる垂井式諸アクセントに  
ついて (1)・(2)」『国語研究』54・55、国学院大学国語研究会
- 中井幸比古・小泉明子 (1992) 「三重県中部における中学生のアクセント」  
『音声学会会報』201、pp. 20-26、日本音声学会
- 中井幸比古 (1996) 「京都アクセントにおける式保存について」『日本語研究  
諸領域の視点 下』、明治書院
- 中井幸比古 (1996) 「京阪アクセントにおける低接非上昇調について」『神戸外大  
論叢』47 巻 1～4 号、神戸市外国語大学研究会
- 中井幸比古 (1996) 「京阪アクセントにおける低接平坦調について」『神戸外大  
論叢』47 巻 1～4 号、神戸市外国語大学研究会
- 中井幸比古 (1997) 『高知市方言アクセント小辞典』科研報告書
- 中井幸比古 (1997) 「讃岐式アクセントと中央式アクセントの対応について」  
『言葉と文化』、『言葉と文化』刊行会
- 中井幸比古 (1998) 『香川県方言アクセント小辞典』、科研報告書
- 中井幸比古 (1998) 「中央式諸方言における複合名詞のアクセントについて」  
『神戸外大論叢』第 49 巻、第 3 号 神戸市外国語大学研究会
- 中井幸比古・高田豊輝・大和シゲミ (1999) 『徳島市方言アクセント小辞典  
一方言アクセント小辞典 (3) 一』、科研報告書
- 中井幸比古 (2001) 「香川県伊吹島方言のアクセント資料」『消滅に瀕した方言  
アクセントの緊急調査研究』、科研報告書
- 中井幸比古 (2002) 『京阪系アクセント辞典』、勉誠出版
- 中井幸比古 (2002) 『京阪系アクセント辞典 データ CD-ROM』、勉誠出版

- 中井幸比古 (2008) 「京都方言の形態・文法・音韻 (1) — 会話録音を資料として (1) —」『方言・音声研究』1、方言・音声研究会
- 中井幸比古 (2009) CD-ROM 内: 「録音・京都アクセント辞典 (1) 解説」  
科研報告書
- 中井幸比古 (2009) CD-ROM 内: 「和田實・妹尾修子による伊吹島方言  
アクセント録音資料解説」 科研報告書
- 中井幸比古 (2009) 「京都方言の形態・文法・音韻 (2) — 会話録音を資料として (2) —」『方言・音声研究』第2号、方言・音声研究会
- 中井幸比古 (2009) 「高知方言のアクセント」『方言・音声研究』第2号、  
方言・音声研究会
- 野元菊雄・江川清 (1974a) 「パターン分類による音声の分析—鶴岡市における  
共通語の調査から—」『電子計算機による国語研究』VI、国立国語研究所  
報告 51、pp. 18-36
- 野元菊雄 (1974b) 「言語と行動計量学」『数理科学』12-2、pp. 19-26
- 服部四郎 (1930) 「近畿アクセントと東方アクセントとの境界線」『音声の研究』  
第3号、日本音声学会
- 服部四郎 (1931) 「国語諸方言アクセント概観 (三)」『方言』1-4
- 服部四郎 (1933) 『国語科学講座 7 アクセントと方言』明治書院
- 服部四郎 (1937) 「原始日本語の二音節名詞のアクセント」『方言』第7巻第6号
- 服部四郎 (1951) 『音声学』岩波書店
- 服部四郎 (1979) 「表層アクセント素と基底アクセント音調型」『言語の科学』  
第7号
- 服部四郎 (1985) 「日本語諸方言のアクセントの研究と比較方法」『月刊言語』  
第14巻第9号
- 平山輝男 (1940) 『全日本アクセントの諸相』育英書院
- 平山輝男 (1957a) 「四国方言のアクセント体系とその系譜 付. アクセント  
境界線」『音声の研究』VIII、日本音声学会
- 平山輝男 (1957b) 『日本語音調の研究』、明治書院
- 平山輝男 (1967) 『国語の音声』、岩崎書店
- 平山輝男 (1970) 『全国アクセント辞典』、東京堂出版

- 福良真依子・村田真実（2008）「徳島県西部・香川県西部方言のアクセント」  
『徳島・香川両県西部のことば』、徳島大学国語学研究室
- 松森晶子（1995）「下降式アクセントの由来と四国東北部諸方言の系統—3 モーラ  
語第 5 類の 2 種の音調型をもとにした考察—」『東京大学言語学論集』14
- 松森晶子（1997）「徳島県脇町・三加茂町のアクセントと本土祖語のアクセント  
体系」『国語学』第 189 集、国語学会
- 松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古（2012）『日本語アクセント入門』、  
三省堂
- 宮城文雄（1961）「香川・徳島」『方言学講座 3、西部方言』、東京堂出版
- 虫明吉次郎（1954）『岡山県のアクセント（その 1）』、山陽図書出版
- 村内英一（1982）「和歌山県の方言」『講座方言学 近畿地方の方言』、国書刊行会
- 村田真実（2008a）「徳島市の方言アクセントについて」、卒業論文：早稲田大学  
第一文学部
- 村田真実（2008b）「東祖谷のアクセントについての一考察」『東祖谷のことば』、  
徳島大学国語学研究室、pp. 198-208
- 村田真実（2010）「吉野川流域の方言アクセント—京阪式アクセントと讃岐式  
アクセントの境界—」、修士論文：徳島大学大学院人間・自然環境研究科
- 村田真実（2011a）「徳島県旧貞光町端山の方言アクセント」『言語文化研究』(19)、  
徳島大学総合科学部、pp. 191-208
- 村田真実（2011b）「志摩市のアクセント」『三重県志摩市のことば』、徳島大学  
日本語学研究室、pp. 222-294
- 村田真実（2012a）「徳島県旧東祖谷山村のアクセント」『徳島大学国語国文学会』  
(25)、徳島大学総合科学部国語国文学会、pp. 62-77
- 村田真実（2012b）「徳島県吉野川流域のアクセント—京阪式アクセントと讃岐式  
アクセントの境界—」『文理シナジー』16-2、文理シナジー学会
- 森重幸（1958）「徳島県のアクセント概観」『国語論叢』(7)、pp. 39-65、  
神戸大学文学部国語国文学会
- 森重幸（1962）「徳島県のアクセント—2 音節名詞の考察—」『郷土研究発表会  
紀要』6・7・8 合併号、阿波学会・徳島県立図書館
- 森重幸（1964）『分布図から見た徳島県の方言 4—アクセント』私家版



- 森重幸（1982）「徳島県の方言」『講座方言学 8、中国・四国地方の方言』  
国書刊行会
- 森重幸（1984）「徳島県三好郡三縄（旧三縄町）出合アクセントと川崎  
アクセント—二音節名詞アクセント体系の変化—」私家版
- 森重幸（1989）「徳島県の方言アクセント概観—32年後の動向—」私家版
- 森重幸（1991）「讃岐式池田型アクセントの周辺—一字村二拍名詞の音調考察—」  
『阿波郷土会報ふるさと阿波』146
- 山口幸洋（1976）「南近畿アクセント局所方言の成立」『国語研究』第 39 号
- 山口幸洋（1982）「アクセントにおける移行性分布の解釈」『国語学』130
- 山口幸洋（1985）「東京式諸方言の分節アクセント体系」『国語学』第 142 集
- 山口幸洋（1988）「垂井式諸アクセントの性格」『国語学』155
- 山口幸洋（2001）「徳島県吉野川流域アクセントの解釈—下降式アクセントは  
実在するのか—」『国語研究』第 64 号、国学院大学国語研究会
- 大和シゲミ（1990）「徳島県西部におけるアクセントの研究」、卒業論文：  
金沢大学
- 大和シゲミ（1993）「低起式語の音声的変種—徳島県阿南市宝田町の場合—」  
『待兼山論叢』27 日本学篇、大阪大学
- 大和シゲミ（1996）発表資料「徳島県出合アクセントにおける無核語の 2 種類」、  
第 35 回音声言語研究会
- 山名邦男（1954）「四国方言アクセントの研究（その 1・2）」『音声学協会会報』  
84 号
- 山名邦男（1956）「徳島県下の音調」『兵庫方言』1、兵庫方言学会
- 和田實（1942）「近畿アクセントに於ける名詞の複合形態」『音声学協会会報』71
- 和田實（1943）「複合語アクセントの後部成素として見た 2 音節名詞」  
『方言研究』7
- 和田實原案（1950）「アクセント調査語彙（案）」『近畿方言』5
- 和田實（1951）「兵庫県下のアクセントについて」『論苑』第 1 巻第 1 号、  
神戸大学教育学部明石分校
- 和田實（1956）「複雑なアクセント体系の解釈」『国語学』第 32 集、国語学会
- 和田實（1966）「第一次アクセントの発見—伊吹島」『国語研究』22、

国学院大学国語研究会

和田實（1980）「辞のアクセント」『論集日本語研究 2 アクセント』、有精堂

和田實（1984）「辞アクセントの記号化」『金田一春彦博士古稀記念論文集 2』、三省堂

Murtagh, Fionn（2005） *Correspondence Analysis and Data Coding*

*with Java and R*, Chapman&Hall/CRC

Okuda, Kunio（1971） *Accentual Systems in the Japanese Dialects A Generative Approach*, Bunka Hyoron Publishing Co. Ltd.

## 資 料

---

東祖谷山村と一字村のアクセント聞き取りデータを、資料として附す。調査の概略は以下の通りである。

### 【東祖谷山村のデータ】

2006年から2007年にかけて徳島大学国語学研究室で行われた調査の結果を資料として利用した。話者は両親共に東祖谷山村出身で、東祖谷山村で生まれ育った人に限定した。話者番号は、はじめ2桁が調査時の話者の年齢、次のアルファベットが性別（M：男性、F：女性）、最後の数字は便宜上の識別番号である。

### 【一字村のデータ】

2010年に徳島方言研究会が行った調査の結果であり、一字村在住者2名にご協力を頂いて得たものである。ご協力下さった話者の詳細は以下の通りである。調査は読み上げ式の面接調査であった。

ID	現住所	生年月	性別	職業	父出身地	母出身地
1	一字 字切越	1930年 3月	男	林業	一字	一字
2	一字 字蔭	1939年 6月	男	農業 役場	香川県	一字

以下、東祖谷山村、一字村の順でデータを掲載する。

<1 拍名詞>

東祖谷	下瀬	久保	久保	京上	九鬼
血が	77M9	61F3	71M2	64F13	74F5
出る	LH	LH	LH	LH	LH
この血は	HH	HH	HH	HH	HH
赤い	LH+HH	LH+HH	LH+HH	LH+HH	LH+HH
血	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
毛が	・	・	・	・	・
長い	HH	LH	LH	LH	LH
この毛を	HHL	HLL	HLL	HLL	HLL
切った	LH+HH	LH+HH	LH+HH	LH+HH	LH+HH
毛	LLH	HHH	LLH	HHH	HHH
蚊が	・	・	・	・	・
飛ぶ	LH	LH	LH	LH	LH
この蚊に	HH	HH	HH	HH	HH
刺された	LH+HH	LH+HH	LH+HH	LH+HH	LH+HH
蚊	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
蚊が	・	・	・	・	・
出る	LH	LH	LH	LH	LH
蚊が	HL	HH	HH	HH	HH
死ぬ	LH	LH	LH	LH	LH
矢が	HH	HH	HH	HH	HH
当たる	HL	HL	HL	HL	HL
この矢は	HHH	HHH	HHH	HHH	LHH
長い	LH+HL	LH+HL	LH+HL	LH+HL	LH+HL
矢	LHL	HLL	HLL	HLL	HLL
目が	・	・	・	・	・
経つ	HL	HL	HL	HL	HL
この目を	LH	LH	LH	LH	LH
選ぶ	HH+HL	HH+HL	HH+HL	HH+HL	HH+HL
日	HHH	HHH	HLL	HHH	HHH
絵を	・	・	・	・	・
描いた	LH	LH	LH	LH	LH
この絵は	LLH	HHH	LHL	LHL	LHL
上手い	HH+HH	LH+HH	HH+HL	LH+HH	LH+HH
絵	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
根が	・	・	・	・	・
生える	LH	LH	LH	LH	LH
この根を	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
切る	LH+HL	LH+HH	LH+HL	LH+HL	LH+HL
根	HL	HH	LH	LH	LH
	・	・	・	・	・

東祖谷	九鬼	栗枝渡	若林	名頃	名頃
血が	76M4	73M8	78F16	80M18	78F19
出る	LH	LH	LH	LH	HL
この血は	HL	HH	HH	HH	LH
赤い	LH+HH	LH+HH	LH+HH	LH+HH	HH+HL
血	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
毛が	・	・	・	・	・
長い	LH	LH	LH	LH	HH
この毛を	HLL	HLL	LHL	HLL	HLL
切った	LH+HH	LH+HH	LH+HH	LH+HL	LH+HL
毛	HHH	LLH	LLH	LLH	LLH
蚊が	・	・	・	・	・
飛ぶ	LH	LH	LH	LH	HL
この蚊に	HH	HH	HH	HL	HL
刺された	LH+HH	LH+HH	LH+HH	LH+HL	LH+HL
蚊	HLL	HLL	HLL	LHLL	HLL
蚊が	・	・	・	・	・
出る	LH	LH	LH	HL	HL
蚊が	HH	HL	LH	LH	HH
死ぬ	LH	LH	LH	HL	HL
矢が	HH	HL	HL	HL	HL
当たる	HL	HL	HL	HL	HL
この矢は	LHH	LHH	LLH	LHL	HHH
長い	LH+HL	LH+HL	LH+HL	HH+HL	HH+HL
矢	HLL	HLL	HLL	LHL	HLL
目が	・	・	・	・	・
経つ	HL	HL	HL	HL	HL
この目を	LH	LH	LH	LH	LH
選ぶ	LH+HL	LH+HL	LH+HH	LH+HL	HH+HL
日	HHH	HHH	HHH	LHL	HLL
絵を	・	・	・	・	・
描いた	LH	LH	LH	LH	LH
この絵は	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
上手い	LH+HH	LH+HH	LH+HH	LH+LH	HH+LH
絵	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
根が	・	・	・	・	・
生える	LH	LH	LH	LH	LH
この根を	HLL	HLL	LLH	LLH	LHL
切る	LH+HH	LH+HH	LH+HH	LH+LH	HH+HL
根	HH	HL	LH	LH	LH
	・	・	・	・	・

<2 拍名詞第1類・第2類>

東祖谷	下瀬	久保	久保	京上	九鬼	東祖谷	九鬼	栗枝渡	若林	名頃	名頃
	77M9	61F3	71M2	64F13	74F5		76M4	73M8	78F16	80M18	78F19
竹が	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH	竹が	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
はえる	HHL	HLL	HLL	HLL	HLL	はえる	HLL	HLL	HLL	LHH	LHH
この竹は	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	この竹は	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
短い	HHHL	HHHL	HLLL	HLLL	HHHL	短い	HHHL	HHHL	HLLL	HLLL	HLLL
竹	LH	LH	LH	LH	LH	竹	LH	LH	LH	LH	LH
鳥が	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH	鳥が	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
飛ぶ	HL	HH	HH	HH	HH	飛ぶ	HH	HH	HH	HH	HH
この鳥を	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	この鳥を	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
見る	HL	HH	HH	HH	HH	見る	HH	HH	HH	HH	HH
鳥	LH	LH	LH	LH	LH	鳥	LH	LH	LH	LH	LH
箱が	LHL	LHL	LHL	LHH	LHH	箱が	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
小さい	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	小さい	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
この箱は	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	この箱は	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
重い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	重い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
箱	LH	LH	LH	LH	LH	箱	LH	LH	LH	LH	LH
端を	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH	端を	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
削る	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	削る	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
この端を	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	この端を	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
持った	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	持った	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
端	LH	LH	LH	LH	LH	端	LH	LH	LH	LH	LH
水が	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH	水が	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
良い	HL	HL	HL	HH	HH	良い	HH	HH	HH	HL	HL
この水は	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	この水は	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+LHH	LH+LHH
美味しい	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL	美味しい	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL
水	LH	LH	LH	LH	LH	水	LH	LH	LH	LH	LH
歌を	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	歌を	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
作る	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	作る	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この歌が	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	この歌が	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL
聞こえる	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH	聞こえる	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH
歌	HL	HL	HL	HL	HL	歌	HL	HL	HL	HL	HL
人が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	人が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
違う	LHL	HHH	HHH	HHH	HHH	違う	HHH	HHH	HHH	LHL	LHL
この人が	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	この人が	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
勝つ	LH	LH	LH	LH	LH	勝つ	LH	LH	LH	LH	LH
人	HL	HL	HL	HL	HL	人	HL	HL	HL	HL	HL
音を	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	音を	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
聞く	HH	HH	HH	HH	HH	聞く	HH	HH	HH	HL	HL
この音が	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	この音が	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL
出た	HL	HL	HL	HL	HL	出た	HL	HL	HL	HL	HL
音	HL	HL	HL	HL	HL	音	HL	HL	HL	HL	HL
冬は	LHL	HLL	HLL	HLL	HLL	冬は	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
長い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	長い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この冬で	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	この冬で	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL
終わる	LHL	LHL	LHL	HHH	HHH	終わる	HHH	HHH	HHH	LHL	LHL
冬	HL	HL	HL	HL	HL	冬	HL	HL	HL	HL	HL
北が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	北が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
良い	LH	HL	HL	HL	HL	良い	HL	HL	HL	HL	HL
この北に	HH+HHH	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	この北に	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL
進む	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	進む	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
北	HL	HL	HL	HL	HL	北	HL	HL	HL	HL	HL
蝉が	LHL	HLL	HLL	HLL	HLL	蝉が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
飛ぶ	HH	HH	HH	HH	HH	飛ぶ	HH	HH	HH	HL	HL
この蝉は	HH+LHL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	この蝉は	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL
綺麗	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	綺麗	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
蝉	HL	HL	HL	HL	HL	蝉	HL	HL	HL	HL	HL
雪が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	雪が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
降る	LH	LH	LH	LH	LH	降る	LH	LH	LH	LH	LH
この雪は	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	この雪は	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL
白い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	白い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
雪	HL	HL	HL	HL	HL	雪	HL	HL	HL	HL	HL
梨が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	梨が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
ある	LH	LH	LH	LH	LH	ある	LH	LH	LH	LH	LH
この梨は	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	この梨は	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL
美味しい	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL	美味しい	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL
梨	HL	HL	HL	HL	HL	梨	HL	HL	HL	HL	HL

<2 拍名詞第3類・第4類>

東祖谷	下瀬	久保	久保	京上	九鬼
耳が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
聞こえる	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH
この耳に	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL
あてる	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
耳	HL	HL	HL	HL	HL
犬を	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
飼う	LH	LH	LH	LH	LH
この犬が	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL
吠える	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
犬	HL	HL	HL	HL	HL
山に	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
登る	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH
この山で	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL
遊ぶ	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
山	HL	HL	HL	HL	HL
亀が	LHH	HLL	HLL	HLL	HLL
集まる	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL
この亀が	LH+HHH	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL
逃げる	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
亀	HL	HL	HL	HL	HL
足が	HHH	HLL	HLL	HLL	HLL
汚れる	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL
この足を	LH+HHH	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL
洗う	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
足	HL	HL	HL	HL	HL
花が	LHL	HLL	HLL	HLL	HLL
咲いた	HHH	LHL	LHL	LHL	LHL
この花を	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL
飾る	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
花	HL	HL	HL	HL	HL
朝は	LHH	LHL	LHL	LHH	LHH
冷たい	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL
この朝を	LH+HHH	LH+HLL	LH+HLL	LH+HHH	LH+HHH
待った	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
朝	LH	LH	LH	LH	LH
糸を	LLL	LLL	LLL	LLL	LLL
付ける	LHL	HLL	HLL	HLL	HLL
この糸は	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
長い	HHL	HLL	HLL	HLL	HLL
糸	LH	LH	LH	LH	LH
海が	LHH	LLL	LLL	HLL	HLL
綺麗	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この海を	-	LH+HHH	LH+HHH	LH+HLL	LH+HLL
歩く	LHH	HHH	HHH	HHH	HHH
海	LH	LH	LH	HL	HL
針が	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
ある	HH	HH	HH	HH	HH
この針を	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
抜く	HH	HH	HH	HH	HH
針	LH	LH	LH	LH	LH
息を	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
する	HL	HL	HL	HL	HL
この息が	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
白い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
息	LH	LH	LH	LH	LH
肩が	LHH	LLL	LLL	LLL	LLL
痛い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この肩を	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
撫でる	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
肩	HL	HL	HL	HL	HL
箸を	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
握る	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
この箸を	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
持った	HHL	HHL	HHL	HHL	HHL
箸	LH	LH	LH	LH	LH
跡が	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
消える	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
この跡が	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
ない	HL	HL	HL	HL	HL
跡	LH	LH	LH	LH	LH
松が	LHH	LLL	LLL	LLL	LLL
枯れる	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
この松を	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
切る	HL	HL	HL	HL	HL
松	LH	LH	LH	LH	LH
数を	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
数える	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL
この数は	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
小さい	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL
数	LH	LH	LH	LH	LH

東祖谷	九鬼	栗枝渡	若林	名頃	名頃
耳が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
聞こえる	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH
この耳に	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL
あてる	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
耳	HL	HL	HL	HL	HL
犬を	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
飼う	LH	LH	LH	LH	LH
この犬が	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL
吠える	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
犬	HL	HL	HL	HL	HL
山に	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
登る	LLH	LLH	LLH	LHL	LHL
この山で	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL
遊ぶ	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
山	HL	HL	HL	HL	HL
亀が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
集まる	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL
この亀が	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL
逃げる	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
亀	HL	HL	HL	HL	HL
足が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
汚れる	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL
この足を	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL
洗う	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
足	HL	HL	HL	HL	HL
花が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
咲いた	LHL	LHL	HLL	HLL	LHL
この花を	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL
飾る	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
花	HL	HL	HL	HL	HL
朝は	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
冷たい	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL
この朝を	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
待った	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
朝	LH	LH	LH	LH	LH
糸を	LLL	LLL	LLL	LLL	LLL
付ける	HLL	HLL	HLL	LHL	LHL
この糸は	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+LHL	LH+LHL
長い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
糸	LH	LH	LH	LH	LH
海が	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
綺麗	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この海を	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL
歩く	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
海	LH	LH	LH	LH	LH
針が	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
ある	HH	HH	HH	HH	HH
この針を	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+LLL	LH+HHH
抜く	HH	HH	HH	HH	HH
針	LH	LH	LH	LH	LH
息を	LHH	LHH	LHH	LLL	LHH
する	HL	HL	HL	HL	HL
この息が	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+LLL	LH+HHH
白い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
息	LH	LH	LH	LH	LH
肩が	LLL	LLL	LLL	LLL	LHH
痛い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この肩を	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+LLL	LH+HHH
撫でる	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
肩	HL	HL	HL	HL	HL
箸を	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
握る	HHH	HHH	HHH	LHL	LHL
この箸を	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
持った	HHL	HHL	HHL	LHL	LHL
箸	LH	LH	LH	LH	LH
跡が	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
消える	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
この跡が	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
ない	HL	HL	HL	HL	HL
跡	LH	LH	LH	LH	LH
松が	LLL	LLL	LLL	LLL	LLL
枯れる	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
この松を	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+LHL
切る	HL	HL	HL	HL	HL
松	LH	LH	LH	LH	LH
数を	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
数える	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL
この数は	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH	LH+HHH
小さい	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL
数	LH	LH	LH	LH	LH

<2 拍動詞第 5 類>

東祖谷	下瀬	久保	久保	京上	九鬼
	77M9	61F3	71M2	64F13	74F5
声が	LHL	HLL	HLL	HLL	HLL
あがる	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
この声が	HH+LHL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL
入る	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
声	HL	HL	HL	HL	HL
井戸を	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
掘る	LH	LH	LH	LH	LH
この井戸が	LH+HHL	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL
枯れる	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
井戸	LH	LH	LH	LH	LH
窓が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
くもる	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
この窓を	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL
飾る	LHL	HHH	HHH	HHH	HHH
窓	HL	HL	HL	HL	HL
秋が	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
来る	HL	LH	LH	LH	LH
この秋が	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL
待ち遠しい	LHHHHL	LHHHHL	LHHHHL	LHHHHL	LHHHHL
秋	LH	LH	LH	LH	LH
鍋が	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
熱い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この鍋を	HH+LHL	HH+LHL	HH+LHL	HH+LHL	HH+LHL
捨てる	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
鍋	LH	LH	LH	LH	LH
蜘蛛が	LHL	HLL	HLL	HLL	HLL
出た	HL	HL	HL	HL	HL
この蜘蛛は	LH+HHH	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL
消えた	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
蜘蛛	HL	HL	HL	HL	HL
ツルを	HLL	HLL	HLL	LHL	LHL
折る	HL	HL	HL	HL	HL
このツルを	HH+HHH	LH+HLL	LH+HLL	LH+LHL	LH+LHL
ぶらさげる	LHHLL	LHHLL	LHHLL	LHHLL	LHHLL
ツル	LH	LH	HL	LH	LH

東祖谷	九鬼	栗枝渡	若林	名頃	名頃
	76M4	73M8	78F16	80M18	78F19
声が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
あがる	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
この声が	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL	HH+HLL
入る	LHL	LHH	LHH	LHH	LHH
声	HL	HL	HL	HL	HL
井戸を	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
掘る	LH	LH	LH	LH	LH
この井戸が	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL
枯れる	HHH	HHH	HHH	LHL	LHL
井戸	LH	LH	LH	LH	LH
窓が	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
くもる	LHL	HLL	HLL	HLL	HLL
この窓を	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL
飾る	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
窓	HL	HL	HL	HL	HL
秋が	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
来る	LH	LH	LH	LH	LH
この秋が	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL
待ち遠しい	LHHHHL	LHHHHL	LHHHHL	LHHHHL	LHHHHL
秋	LH	LH	LH	LH	LH
鍋が	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
熱い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この鍋を	HH+LHL	HH+LHL	HH+LHL	HH+LHL	HH+LHL
捨てる	HHH	HHH	HHH	LHL	LHL
鍋	LH	LH	LH	LH	LH
蜘蛛が	HLL	HLL	HLL	LHL	LHL
出た	HL	HL	HL	HL	HL
この蜘蛛は	LH+HLL	LH+HLL	LH+HLL	LH+LHL	LH+LHL
消えた	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
蜘蛛	HL	HL	HL	LH	LH
ツルを	LHL	LHL	LHL	LHL	HLL
折る	HL	HL	LH	LH	LH
このツルを	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL	LH+LHL	LH+HLL
ぶらさげる	LHHLL	LHHLL	LHHLL	LHHLL	LHHLL
ツル	LH	LH	LH	LH	HL

<3 拍動詞第1類・第2類>

東祖谷	下瀬	久保	久保	京上	九鬼
魚を	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
刺す	LH	LH	LH	HH	HH
この魚は	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
美味しい	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
魚	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
形が	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
ある	LH	LH	LH	LH	LH
この形は	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL
良い	LH	LH	LH	LH	LH
形	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
着物が	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
ある	HH	HH	HH	HH	HH
この着物は	LH+HHHH	LH+HHHH	LH+HHHH	LH+HHHH	LH+HHHH
古い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
着物	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
鼻血が	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
出る	LH	LH	LH	HH	HH
この鼻血は	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
止まらない	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL
鼻血	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
車が	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
走る	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この車は	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
速い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
車	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
二つは	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
欲しい	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
この二つが	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL
良い	LH	LH	LH	LH	LH
二つ	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
二人を	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
待つ	LH	LH	LH	LH	LH
この二人は	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL
親しい	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL
二人	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
毛抜きが	LHLL	LHLL	LHLL	LHHH	LHHH
ある	LH	LH	LH	HH	HL
この毛抜きは	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHHH	LH+LHHH
古い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
毛抜き	LHL	LHL	LHL	LHH	LHH
蜥蜴が	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
歩く	LHH	LLH	LLH	LLH	LLH
この蜥蜴は	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL
可愛い	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL
蜥蜴	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL

東祖谷	九鬼	栗枝渡	若林	名頃	名頃
魚を	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
刺す	HH	HH	HH	LH	LH
この魚は	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
美味しい	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL
魚	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
形が	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
ある	LH	LH	LH	LH	LH
この形は	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL
良い	LH	LH	LH	LH	LH
形	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
着物が	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
ある	HL	HL	LH	LH	LH
この着物は	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
古い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
着物	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
鼻血が	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
出る	HH	HH	HH	HH	HH
この鼻血は	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
止まらない	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL
鼻血	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
車が	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
走る	HLL	HLL	HLL	LHL	LHL
この車は	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
速い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
車	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
二つは	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
欲しい	LHL	LHL	LHL	HLL	HLL
この二つが	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL
良い	LH	LH	LH	LH	LH
二つ	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
二人を	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
待つ	LH	LH	LH	LH	LH
この二人は	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL
親しい	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL
二人	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
毛抜きが	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	HLLL
ある	HL	HL	HL	HL	HL
この毛抜きは	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL
古い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
毛抜き	LHL	LHL	LHL	LHL	HLL
蜥蜴が	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
歩く	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH
この蜥蜴は	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL
可愛い	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL
蜥蜴	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL



<3 拍動詞第3類・第4類>

東祖谷	下瀬 77M9	久保 61E3	久保 71M2	京上 64F13	九鬼 74F5
二十歳に	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
なった	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH
この二十歳は	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL
幼い	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL
二十歳	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
力が	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
入る	LHH	LHL	LLH	LLH	LLH
この力に	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+LHLL	HH+HLLL
負ける	LHH	HHH	HHH	HHH	HHH
力	HLL	HLL	HLL	LHL	HLL
小麦が	LHLL	LHLL	LHLL	LHHH	LHLL
ない	LH	LH	LH	LH	LH
この小麦を	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	LH+LHHH	HH+LHLL
使う	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
小麦	LHL	LHL	LHL	LHH	LHL
鏡が	LHLL	LHLL	LHLL	LHHH	LHLL
ある	LH	LH	LH	LH	LH
この鏡は	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHHH	HH+LHLL
小さい	HLL	HLL	HLL	HLL	HHHL
鏡	LHL	LHL	LHL	LHH	LHL
刀が	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
ない	LH	LH	LH	LH	LH
この刀は	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL
古い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
刀	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
女を	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
見た	HL	HL	HL	HL	HL
この女に	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL
頼む	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
女	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
袋が	LHLL	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
ある	LH	HL	HL	HH	HH
この袋は	LH+LHLL	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
綺麗だ	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
袋	LHL	LHH	LHH	LHH	LHH
男が	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
良い	LH	LH	LH	LH	LH
この男は	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL
すごい	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
男	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
サザエを	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
探す	LHL	LHL	LHL	HHH	HHH
このサザエを	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL
焼く	LH	LH	LH	LH	LH
サザエ	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL

東祖谷	九鬼 76M4	栗枝渡 73M8	若林 78F16	名頃 80M18	名頃 78F19
二十歳に	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
なった	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH
この二十歳は	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL
幼い	LHHL	LHHL	LHHL	HHHL	HHHL
二十歳	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
力が	LHL	HLLL	HLLL	HLL	HLLL
入る	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH
この力に	HH+LHLL	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL
負ける	HHH	HHH	HHH	LHL	LHL
力	LHL	HLL	HLL	HLL	HLL
小麦が	HLLL	HLLL	LHLL	HLLL	LHHH
ない	LH	LH	LH	LH	LH
この小麦を	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+LHLL	HH+HLLL	HH+LHHH
使う	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
小麦	HLL	HLL	LHL	HLL	LHH
鏡が	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
ある	LH	LH	LH	LH	LH
この鏡は	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL
小さい	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL
鏡	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
刀が	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
ない	LH	LH	LH	LH	LH
この刀は	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL
古い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
刀	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
女を	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
見た	HL	HL	HL	HL	HL
この女に	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL
頼む	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
女	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
袋が	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHLL
ある	HH	HH	HH	HH	HH
この袋は	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHLL
綺麗だ	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
袋	LHH	LHH	LHH	LHH	LHL
男が	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
良い	LH	LH	LH	LH	LH
この男は	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL
すごい	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
男	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
サザエを	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
探す	HHH	HHH	HHH	LHL	HHH
このサザエを	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL
焼く	LH	LH	LH	LH	LH
サザエ	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL

<3 拍名詞第 5 類・第 6 類・第 7 類>

東祖谷	下瀬 77M9	久保 61F3	久保 71M2	京上 64F13	九鬼 74F5
朝日が	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
入る	LHL	LLH	LLH	LLH	LLH
この朝日は	LH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL
素晴らしい	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL
朝日	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
心が	HHLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
晴れる	HLL	HLL	HLL	HHH	HHH
この心は	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL
尊い	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL
心	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
油が	LHLL	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
ない	LH	LH	LH	HH	LH
この油は	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
新しい	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL
油	LHL	LHH	LHH	LHH	LHH
簾が	LHLL	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
見える	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この簾は	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL
大きい	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
簾	LHL	LHH	LHH	LHH	LHH
柱を	LHLL	LHHH	LHLL	LHLL	LHLL
建てる	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この柱は	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL
細い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
柱	LHL	LHH	LHL	LHL	LHL
兎を	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
運ぶ	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
この兎が	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
逃げる	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
兎	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
蛙が	LHLL	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
飛ぶ	LH	LH	LH	LH	LH
この蛙を	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
捕まえる	LHHLL	LHHLL	LHHLL	LHHLL	LHHLL
蛙	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
雀が	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
飛んだ	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この雀が	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
止まった	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL
雀	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
鼠が	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
出る	HL	LH	HH	HH	HH
この鼠は	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
怖い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
鼠	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
キツネに	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
会う	HL	HL	HL	HH	HH
このキツネは	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
可愛い	HHLL	HHLL	HHLL	HHHL	HHHL
キツネ	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH

東祖谷	九鬼 76M4	栗枝渡 73M8	若林 78F16	名頃 80M18	名頃 78F19
朝日が	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
入る	LHL	LHL	LLH	LLH	LLH
この朝日は	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL	HH+HLLL
素晴らしい	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL
朝日	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
心が	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HHLL
晴れる	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この心は	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL
尊い	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL
心	HLL	HLL	HLL	HLL	HHL
油が	LHHH	LHHH	LHHH	LHLL	HLLL
ない	LH	LH	LH	LH	LH
この油は	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHLL	LH+HLLL
新しい	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL
油	LHH	LHH	LHH	HLL	HLL
簾が	LHLL	LHLL	LHLL	LHHH	LHHH
見える	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この簾は	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL	HH+LHLL
大きい	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL
簾	LHL	LHL	LHL	LHH	LHH
柱を	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
建てる	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この柱は	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL
細い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
柱	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
兎を	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
運ぶ	HHH	LHH	LHH	LHL	LHL
この兎が	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHLL	LH+LHHH
逃げる	HLL	HLL	HLL	LHH	HLL
兎	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
蛙が	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
飛ぶ	LH	LH	LH	HL	HL
この蛙を	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
捕まえる	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
蛙	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
雀が	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
飛んだ	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
この雀が	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
止まった	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL
雀	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
鼠が	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
出る	HH	HH	HH	HH	HH
この鼠は	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
怖い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
鼠	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
キツネに	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
会う	HH	HH	HH	HH	HH
このキツネは	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH	LH+LHHH
可愛い	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL
キツネ	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH

東祖谷	下瀬 77M9	久保 61F3	久保 71M2	京上 64F13	九鬼 74F5
蚕を	LHLL	LHHH	HLLL	HLLL	HLLL
見る	LH	LH	LH	LH	LH
この蚕は	LH+LHLL	LH+LHHH	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL
小さい	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
蚕	LHL	LHL	HLL	HLL	HLL
兜が	HLLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
欲しい	LHL	HLL	LHL	LHL	LHL
この兜は	LH+HLLL	HH+LHLL	LH+HLLL	LH+LHLL	LH+HLLL
安い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
兜	HLL	LHL	HLL	LHL	HLL
後ろに	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
立つ	LH	LH	LH	LH	LH
この後ろは	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL
狭い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
後ろ	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
鯨を	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
売る	HH	HH	HH	HH	HH
この鯨を	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL
捨てる	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
鯨	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
便りを	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
待つ	LH	LH	LH	LH	LH
この便りは	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL
長い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
便り	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL

東祖谷	九鬼 76M4	栗枝渡 73M8	若林 78F16	名頃 80M18	名頃 78F19
蚕を	LHLL	HLLL	HLLL	LHLL	HLLL
見る	LH	LH	LH	LH	LH
この蚕は	LH+LHLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+LHLL	LH+HLLL
小さい	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
蚕	LHL	HLL	HLL	LHL	HLL
兜が	HLLL	HLLL	HLLL	LHLL	LHLL
欲しい	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
この兜は	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+HLLL	LH+LHLL	LH+HLLL
安い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
兜	HLL	HLL	HLL	LHL	HLL
後ろに	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
立つ	LH	LH	LH	LH	LH
この後ろは	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL
狭い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
後ろ	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
鯨を	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
売る	HH	HH	HH	HH	HH
この鯨を	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL
捨てる	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
鯨	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
便りを	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL
待つ	LH	LH	LH	LH	LH
この便りは	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL	LH+LHLL
長い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
便り	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL

< 4 拍名詞 >

東祖谷	下瀬 77M9	久保 61F3	久保 71M2	京上 64F13	九鬼 74F5
飴玉	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
飴玉を	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
なめる	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
さいころ	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
さいころで	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
遊ぶ	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
ぞうきん	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
ぞうきんを	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
絞る	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
栓抜き	LHHH	LHHL	LHHH	LHHL	LHHH
栓抜きを	LHHHH	LHHLL	LHHHH	LHHLL	LHHHH
なくす	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
爪きり	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
爪きりを	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
買う	HH	HH	HH	HH	HH
絵日記	LHHL	LHHL	HLLL	LHHL	LHHL
絵日記を	LHHLL	LHHLL	HLLLL	LHHLL	LHHLL
つける	HLL	HLL	HLL	HLL	LHL
矢印	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	LHLL
矢印に	HLLLL	HLLLL	HLLLL	HLLLL	LHLLL
従う	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH
家計簿	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL
家計簿を	LHHLL	LHHLL	LHHLL	LHHLL	LHHLL
見つめる	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
玉ねぎ	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL
玉ねぎを	LHHLL	LHHLL	LHHLL	LHHLL	LHHLL
育てる	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
にんじん	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
にんじんを	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
抜く	LH	LH	LH	LH	LH
針金	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
針金が	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
太い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
焼酎	HLLL	LHHH	LHHH	HLLL	LHHL
焼酎を	HLLLL	LHHHH	LHHHH	HLLLL	LHHLL
飲む	LH	LH	LH	LH	LH
かまぼこ	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
かまぼこを	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
食べる	LHL	LHL	LHL	HLL	HLL
日本語	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
日本語を	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
話す	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
ふりそで	HLLL	LHHH	HLLL	LHHH	HLLL
ふりそでを	HLLLL	LHHHH	HLLLL	LHHHH	HLLLL

東祖谷	九鬼 76M4	栗枝渡 73M8	若林 78F16	名頃 80M18	名頃 78F19
飴玉	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
飴玉を	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
なめる	HLL	HLL	HLL	LHL	HLL
さいころ	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
さいころで	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
遊ぶ	LHH	HHH	LHH	LHH	LHH
ぞうきん	LHHH	LHHH	LHHH	HLLL	HLLL
ぞうきんを	LHHHH	LHHHH	LHHHH	HLLLL	HLLLL
絞る	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
栓抜き	LHHH	LHHH	LHHH	LHHL	LHHH
栓抜きを	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHLL	LHHHH
なくす	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
爪きり	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
爪きりを	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
買う	HH	HH	HH	HH	HH
絵日記	HLLL	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL
絵日記を	HLLLL	LHHLL	LHHLL	LHHLL	LHHLL
つける	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
矢印	HLLL	HLLL	HLLL	LHLL	LHLL
矢印に	HLLLL	HLLLL	HLLLL	LHLLL	HLLLL
従う	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH
家計簿	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL
家計簿を	LHHLL	LHHLL	LHHLL	LHHLL	LHHLL
見つめる	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
玉ねぎ	LHHL	HLLL	LHHL	LHHL	LHHL
玉ねぎを	LHHLL	HLLLL	LHHLL	LHHLL	LHHLL
育てる	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
にんじん	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
にんじんを	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
抜く	LH	LH	LH	LH	HLL
針金	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
針金が	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
太い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
焼酎	LHHH	LHHH	LHHH	HLLL	HLLL
焼酎を	LHHHH	LHHHH	LHHHH	HLLLL	HLLLL
飲む	LH	LH	LH	LH	LH
かまぼこ	LHHH	LHHH	LHLL	LHHH	LHHH
かまぼこを	LHHHH	LHHHH	LHLLL	LHHHH	LHHHH
食べる	LHL	LHL	HLL	LHH	HLL
日本語	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
日本語を	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
話す	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
ふりそで	HLLL	LHHH	HLLL	LHHH	HLLL
ふりそでを	HLLLL	LHHHH	HLLLL	LHHHH	HLLLL

< 4 拍名詞 >

東祖谷	下瀬	久保	久保	京上	九鬼
	77M9	61F3	71M2	64F13	74F5
着る	HH	HH	HH	HH	HH
青空	LHHH	LHHH	LHHL	LHHH	LHHH
青空を	LHHHH	LHHHH	LHLLL	LHHHH	LHHHH
思い出す	HLLLH	HLLLH	HLLLH	HLLLL	HLLLH
足跡	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
足跡を	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
消す	LH	LH	LH	LH	LH
胃袋	HLLL	LHLL	HLLL	LHLL	LHLL
胃袋が	HLLLL	LHLLL	HLLLL	LHLLL	LHLLL
痛い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
市役所	LHLL	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL
市役所に	HLLLL	LHLLL	LHLLL	LHLLL	LHLLL
行く	HH	HH	HH	HH	HH
消しゴム	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHL
消しゴムを	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHLLL
借りる	LHH	LHH	LHH	LHH	LHH
折り紙	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
折り紙は	HLLLL	HLLLL	LHLLL	HLLLL	LHLLL
おもしろい	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL
目印	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
目印を	HLLLL	HLLLL	HLLLL	HLLLL	LHLLL
つける	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
ひょうたん	LHHH	LHHH	LHHL	LHHL	LHHH
ひょうたんを	LHHHH	LHHHH	LHLLL	LHLLL	LHHHH
買う	HH	HH	HH	HH	HH
耳かき	LHHH	LHHH	LHHH	LHHL	LHHL
耳かきが	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHLLL	LHLLL
ない	LH	LH	LH	LH	LH
餅つき	LHHH	LHHL	LHHH	LHHH	LHHL
餅つきを	LHHHH	LHLLL	LHHHH	LHHHH	LHLLL
する	HH	HH	HH	HH	HH
くちびる	LHHL	LHHL	LHHL	LHLL	LHHL
くちびるが	LHLLL	LHLLL	LHLLL	LHLLL	LHLLL
乾く	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
お菓子屋	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
お菓子屋が	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
ある	LH	LH	LH	HH	LH
かつ丼	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
かつ丼を	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
頼む	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
満月	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
満月は	HLLLL	HLLLL	HLLLL	HLLLL	HLLLL
美しい	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL

東祖谷	九鬼	栗枝渡	若林	名頃	名頃
	76M4	73M8	78F16	80M18	78F19
着る	HH	HH	HH	HH	HL
青空	LHHH	LHHH	LHLL	LHHH	LHHH
青空を	LHHHH	LHHHH	LHLLL	LHHHH	LHHHH
思い出す	HLLLL	HLLHL	HLLLL	HLLLH	HLLLH
足跡	LHHH	LHHH	LHHH	LHHL	LHHH
足跡を	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHLLL	LHHHH
消す	LH	LH	LH	LH	HL
胃袋	HLLL	HLLL	LHLL	HLLL	HLLL
胃袋が	HLLLL	HLLLL	LHLLL	HLLLL	HLLLL
痛い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
市役所	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL
市役所に	LHLLL	LHLLL	LHLLL	LHLLL	LHLLL
行く	HH	HH	HH	HL	HH
消しゴム	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
消しゴムを	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
借りる	LHH	LHH	LHH	LHL	LHH
折り紙	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
折り紙は	HLLLL	HLLLL	HLLL	HLLLL	HLLLL
おもしろい	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL
目印	HLLL	HLL	HLL	HLL	HLL
目印を	HLLLL	LHLLL	HLLL	LHLLL	HLLLL
つける	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
ひょうたん	LHHH	HLLL	LHHH	HLLL	HLLL
ひょうたんを	LHHHH	HLLLL	LHHHH	HLLLL	HLLLL
買う	HH	HH	HH	HH	HH
耳かき	LHHH	LHHH	LHHH	LHHL	LHHH
耳かきが	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHLLL	LHHHH
ない	LH	LH	LH	LH	LH
餅つき	LHHH	LHHH	LHHH	LHHL	LHHH
餅つきを	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHLLL	LHHHH
する	HH	HH	HH	HH	HH
くちびる	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL	LHHL
くちびるが	LHLLL	LHLLL	LHLLL	LHLLL	LHLLL
乾く	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
お菓子屋	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
お菓子屋が	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
ある	LH	LH	LH	LH	LH
かつ丼	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH	LHHH
かつ丼を	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH	LHHHH
頼む	HLL	HLL	HLL	LHL	HLL
満月	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL	HLLL
満月は	HLLLL	HLLLL	HLLL	HLLLL	HLLLL
美しい	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL	LHHHL

< 動詞・形容詞 >

東祖谷	下瀬 77M9	久保 61F3	久保 71M2	京上 64F13	九鬼 74F5
着る	LH	LH	LH	LH	LH
する	LH	LH	LH	LH	LH
煮る	LH	LH	HL	LH	LH
いる	LH	LH	LH	LH	LH
似る	LH	LH	HL	LH	LH
寝る	LH	LH	LH	LH	LH
来る	LH	LH	LH	LH	LH
出る	LH	LH	LH	LH	LH
見る	LH	LH	LH	LH	LH
得る	LH	LH	HL	LH	LH
売る	LH	LH	LH	LH	LH
買う	LH	LH	LH	LH	LH
積む	LH	LH	LH	LH	LH
飛ぶ	LH	LH	LH	LH	LH
乗る	LH	LH	LH	LH	LH
打つ	LH	LH	LH	LH	LH
飼う	LH	LH	LH	LH	LH
書く	LH	LH	LH	LH	LH
読む	LH	LH	LH	LH	LH
切る	LH	LH	LH	LH	LH
住む	LH	LH	LH	LH	LH
歌う	LHH	LHH	HHH	LHH	LHL
困む	LHL	LHH	HHH	LHH	LHL
並ぶ	LHH	LHH	HHH	LHH	LHL
使う	LHL	LHH	HHH	LHH	LHL
のぼる	LHL	LHH	HHH	LHH	LHL
余る	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
思う	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
泳ぐ	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
作る	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
困る	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
挙げる	LHH	HHH	-	HHH	HHH
着せる	LHH	HHH	LHH	HHH	HHH
負ける	LHH	HHH	LHH	HHH	HHH
燃える	LHH	HHH	LHH	HHH	HHH
受ける	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
降りる	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
起きる	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
逃げる	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
固まる	LHHH	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH
教える	LHHH	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH
並べる	LHHH	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH
忘れる	LHHH	HHHH	HHHH	HHHH	HHHH
調べる	LHHH	HLLH	HLLH	HLLH	HHHH
助ける	HLLH	HLLH	HLLH	HLLH	HLLH
別れる	HLLH	HLLH	HLLH	HLLH	HHHH
破れる	HLLH	HLLH	HLLH	HLLH	HLLH
抱える	LHLL	LHHH	LHHH	LHHH	LLHL
支える	LHLL	LHHH	LHHH	LHHH	LLHL

東祖谷	九鬼 76M4	栗枝渡 73M8	若林 78F16	名頃 80M18	名頃 78F19
着る	LH	LH	LH	HL	HL
する	LH	LH	LH	HL	HL
煮る	LH	LH	LH	HL	LH
いる	LH	LH	LH	HL	HL
似る	LH	LH	LH	HL	LH
寝る	LH	LH	LH	HL	HL
来る	LH	LH	LH	LH	LH
出る	LH	LH	LH	LH	LH
見る	LH	LH	LH	LH	LH
得る	LH	LH	LH	HL	HL
売る	LH	LH	LH	HL	HL
買う	LH	LH	LH	HH	HL
積む	LH	LH	LH	HL	HL
飛ぶ	LH	LH	LH	HL	HL
乗る	LH	LH	LH	HH	HL
打つ	LH	LH	LH	LH	LH
飼う	LH	LH	LH	HL	HL
書く	LH	LH	LH	LH	LH
読む	LH	LH	LH	LH	LH
切る	LH	LH	LH	LH	LH
住む	LH	LH	LH	LH	LH
歌う	LHH	LHH	LHH	LHL	HHH
困む	LHH	LHH	LHH	LHL	HHH
並ぶ	LHH	LHH	LHH	LHL	HHH
使う	LHH	LHH	LHH	LHL	HHH
のぼる	LHH	LHH	LHH	LHL	LLH
余る	HLL	HLL	HLL	LHL	HLL
思う	HLL	HLL	HLL	LHL	HLL
泳ぐ	HLL	HLL	HLL	LHL	HLL
作る	HLL	HLL	HLL	LHL	HLL
困る	HLL	HLL	HLL	LHL	HLL
挙げる	HHH	LHH	LHH	LHL	HHH
着せる	HHH	LHH	LHH	LHL	HHH
負ける	HHH	LHH	LHH	LHL	HHH
燃える	HHH	LHH	LHH	LHL	HHH
受ける	HLL	HLL	HLL	LLH	HLL
降りる	HLL	HLL	HLL	LLH	HLL
起きる	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
逃げる	HLL	HLL	HLL	LLH	HLL
固まる	HHHH	LHHH	LHHH	HHHH	LHHL
教える	HHHH	LHHH	LHHH	HHHH	HHHH
並べる	HHHH	LHHH	LHHH	HHHH	LHHH
忘れる	HHHH	LHHH	LHHH	HHHH	LHHH
調べる	HLLH	HLLH	HLLH	HLLH	HLLH
助ける	HLLH	HLLH	HLLH	HLLH	HLLH
別れる	HLLH	HLLH	HLLH	HLLH	HLLH
破れる	HLLH	HLLH	HLLH	LLH	LLHH
抱える	LHHH	LHHH	LHHH	LLH	LHHH
支える	LHHH	LHHH	LHHH	LHLL	LHHH

東祖谷	下瀬 77M9	久保 61F3	久保 71M2	京上 64F13	九鬼 74F5
ない	LH	LH	LH	LH	LH
良い	LH	LH	LH	LH	LH
ええ	LH	LH	LH	LH	LH
赤い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
浅い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
甘い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
暗い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
厚い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
薄い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
重い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
白い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
熱い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
痛い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
多い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
黒い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
近い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
太い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL

東祖谷	九鬼 76M4	栗枝渡 73M8	若林 78F16	名頃 80M18	名頃 78F19
ない	LH	LH	LH	LH	LH
良い	LH	LH	LH	LH	LH
ええ	LH	LH	LH	LH	LH
赤い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
浅い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
甘い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
暗い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
厚い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
薄い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
重い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
白い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
熱い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
痛い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
多い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
黒い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
近い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
太い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL

一字村	1	2
実	H	H
実が	HL	HL
この実が	HL+HL	HL+HL
この実が	HL+HL	HL+HL
落ちる	LHL	LHL
実	HH	HH
落ちる	LHL	LHL
蚊	H	H
蚊が	HL	HL
この蚊が	HL+HL	HL+HL
この蚊が	HL+HL	HL+HL
嫌い	HHH	HHH
蚊	HH	HH
嫌い	HHH	HHH
血	H	H
血が	HL	HL
この血が	HL+HL	HL+HL
この血が	HL+HL	HL+HL
出る	LH	LH
血	HH	HH
出る	LH	LH
名	H	H
名が	HL	HL
この名が	HL+HL	HL+HL
この名が	HL+HL	HL+HL
聞こえる	HHLL	HHLL
名	HL	HL
聞こえる	HHLL	HHLL
葉	H	H
葉が	HL	HL
この葉が	HL+HL	HL+HL
この葉が	HL+HL	HL+HL
枯れる	HHHH	HHHH
葉	H	H
枯れる	HHHH	HHHH
日	H	H
日が	HL	HL
この日が	HL+HL	HL+HL
この日が	HL+HL	HL+HL
暮れる	HHH	HHH
日	HL	H
暮れる	HHH	HHH
絵	H	H
絵が	HL	HL
この絵が	HL+HL	HL+HL
この絵が	HL+HL	HL+HL
上手い	HLL	HLL
絵	H	H
上手い	HLL	HLL
木	H	H
木が	HL	HL
この木が	HL+HL	HL+HL
この木が	HL+HL	HL+HL
倒れる	HHLL	LLHL
木	H	H
倒れる	HHLL	LLHL
手	L	L
手が	LH	LH
この手が	HL+LH	HL+LH
この手が	HL+LH	HL+LH
握る	LHL	LHL
手	LL	LL
握る	LHL	LHL

一字村	1	2
飴	LH	LH
この飴が	HL+LLH	HL+LLH
梅	LH	LH
この梅が	HL+LHL	HL+LHL
枝	LH	LH
この枝が	HL+LHL	HL+LHL
顔	LH	LH
この顔が	HL+LHL	HL+LHL
風	LH	LH
この風が	HL+LHL	HL+LHL
酒	LH	LH
この酒が	HL+LHL	HL+LHL
鼻	LH	LH
この鼻が	HL+LHL	HL+LHL
桃	LH	LH
この桃が	HL+LHL	HL+LHL
中	LH	LH
この中が	HL+LLH	HL+LLH
柿	LH	LH
この柿が	HL+LHL	HL+LHL
首	LH	LH
この首が	HL+LHL	HL+LHL
鳥	LH	LH
この鳥が	HL+LHL	HL+LHL
水	LH	LH
この水が	HL+LHL	HL+LHL
道	LH	LH
この道が	HL+LHL	HL+LHL
歌	HL	HL
この歌が	HL+HLL	HL+HLL
音	HL	HL
この音が	HL+HLL	HL+HLL
川	HL	HL
この川が	HL+HLL	HL+HLL
下	HL	HL
この下が	HL+HLL	HL+HLL
寺	HL	HL
この寺が	HL+HLL	HL+HLL
人	HL	HL
この人が	HL+HLL	HL+HLL
村	HL	HL
この村が	HL+HLL	HL+HLL
石	HL	HL
この石が	HL+HLL	HL+HLL
紙	HL	HL
この紙が	HL+HLL	HL+HLL
夏	HL	HL
この夏が	HL+HLL	HL+HLL
垣	LH	LH
この垣が	HL+LHL	HL+LHL
橋	LH	HL
この橋が	HL+LHL	HL+HLL
雪	HL	HL
この雪が	HL+HLL	HL+HLL
冬	HL	HL
この冬が	HL+HLL	HL+HLL
町	HL	HL
この町が	HL+HLL	HL+HLL
泡	LH	LH
この泡が	HL+LHL	HL+LHL
池	LH	LH
この池が	HL+LHL	HL+LHL

一字村	1	2
色	LH	LH
この色が	HL+LHL	HL+LHL
腕	LH	LH
この腕が	HL+LHL	HL+LHL
馬	LH	LH
この馬が	HL+LHL	HL+LHL
皮	LH	LH
この皮が	HL+LLH	HL+LLH
草	LH	LH
この草が	HL+LHL	HL+LHL
雲	LH	LH
この雲が	HL+LHL	HL+LHL
倉	LH	LH
この倉が	HL+LHL	HL+LHL
事	HL	HL
この事が	HL+HLL	HL+HLL
玉	LH	LH
この玉が	HL+LHL	HL+LHL
花	LH	HL
この花が	HL+LHL	HL+HLL
腹	LH	LH
この腹が	HL+LHL	HL+LHL
山	LH	LH
この山が	HL+LHL	HL+LHL
足	LH	LH
この足が	HL+LHL	HL+LHL
犬	LH	LH
この犬が	HL+LHL	HL+LHL
鬼	LH	LH
この鬼が	HL+LHL	HL+LHL
貝	LH	HL
この貝が	HL+LHL	HL+HLL
神	HL	HL
この神が	HL+HLL	HL+HLL
靴	LH	LH
この靴が	HL+LHL	HL+LHL
髪	LH	HH
この髪が	HL+LHL	HL+HHH
鯛	LH	LH
この鯛が	HL+LHL	HL+LHL
月	LH	LH
この月が	HL+LHL	HL+LHL
年	LH	LH
この年が	HL+LHL	HL+LHL
波	HL	HL
この波が	HL+HLL	HL+HLL
蚤	LH	LH
この蚤が	HL+LHL	HL+LHL
耳	LH	LH
この耳が	HL+LHL	HL+LHL
栗	LH	LH
この栗が	HL+LHL	HL+LHL
糸	LH	LH
この糸が	HL+LLH	HL+LLH
稲	LH	LH
この稲が	HL+LLH	HL+LLH
笠	LH	LH
この笠が	HL+LLH	HL+LLH
肩	LH	LH
この肩が	HL+LLH	HL+LLH
今日	LH	LH
この今日が	HL+LLH	HL+LLH

一字村	1	2
下駄	LH	LH
この下駄が	HL+LLH	HL+LLH
空	LH	LH
この空が	HL+LLH	HL+LLH
舟	LH	LH
この舟が	HL+LLH	HL+LLH
息	LH	LH
この息が	HL+LLH	HL+LLH
海	LH	LH
この海が	HL+LHL	HL+LHL
帯	LH	LH
この帯が	HL+LHL	HL+LLH
父	LH	LH
この父が	HL+LHL	HL+LLH
箸	LH	LH
この箸が	HL+LHL	HL+LLH
松	LH	LH
この松が	HL+LHL	HL+LLH
雨	LH	LH
この雨が	HL+LHL	HL+LHL
井戸	LH	LH
この井戸が	HL+LHL	HL+LHL
桶	LH	LH
この桶が	HL+LHL	HL+LHL
声	LH	LH
この声が	HL+LHL	HL+LHL
蜘蛛	LH	LH
この蜘蛛が	HL+LHL	HL+LHL
琴	LH	LH
この琴が	HL+LHL	HL+LHL
鮎	LH	LH
この鮎が	HL+LHL	HL+LLH
窓	LH	LH
この窓が	HL+LHL	HL+LLH
鮎	LH	LH
この鮎が	HL+LHL	HL+LHL
秋	LH	LH
この秋が	HL+LHL	HL+LHL
鯉	LH	LH
この鯉が	HL+LHL	HL+LHL
猿	LH	LH
この猿が	HL+LHL	HL+LHL
蛇	LH	LH
この蛇が	HL+LHL	HL+LHL
筏	LHH	LHH
この筏が	HL+LHHH	HL+LHHH
柳	LHH	LHH
この柳が	HL+LHHH	HL+LHHH
鯛	LHH	LHH
この鯛が	HL+LHHH	HL+LHHH
飾り	LHL	LHL
この飾りが	HL+LHLL	HL+LHLL
霞	LHL	LHL
この霞が	HL+LHLL	HL+LHLL
形	HLL	HLL
この形が	HL+HLLL	HL+HLLL
着物	LHH	LHH
この着物が	HL+LHHH	HL+LHHH
煙	LHL	LHL
この煙が	HL+LHLL	HL+LHLL
都	LHL	LHL
この都が	HL+LHLL	HL+LHLL

一字村	1	2
子牛	LHL	LHL
この子牛が	HL+LHLL	HL+LHLL
氷	LHH	LHH
この氷が	HL+LHHH	HL+LHHH
魚	LHL	LHL
この魚が	HL+LHLL	HL+LHLL
机	LHL	LHL
この机が	HL+LHLL	HL+LHLL
鼻血	HLL	HLL
この鼻血が	HL+HLLL	HL+HLLL
羊	LHL	LHL
この羊が	HL+LHLL	HL+LHLL
間	LHL	LHL
この間が	HL+LHLL	HL+LHLL
小豆	LHL	LHL
この小豆が	HL+LHLL	HL+LHLL
毛抜き	HLL	LHH
この毛抜きが	HL+HLLL	HL+LHHH
釣瓶	LHL	LHH
この釣瓶が	HL+LHLL	HL+LHHH
蜥蜴	LHL	LHL
この蜥蜴が	HL+LHLL	HL+LHLL
二つ	LHL	LHL
この二つが	HL+LHLL	HL+LHLL
二人	LHL	LHL
この二人が	HL+LHLL	HL+LHLL
黄金	LHL	LHH
この黄金が	HL+LHLL	HL+LHHH
小麦	LHL	HLL
この小麦が	HL+LHLL	HL+HLLL
力	HHL	HHL
この力が	HL+HHLL	HL+HHLL
二十歳	HLL	HLL
この二十歳が	HL+HLLL	HL+HLLL
岬	HLL	HLL
この岬が	HL+HLLL	HL+HLLL
頭	LHL	HHL
この頭が	HL+LHLL	HL+HHLL
恨み	HHL	HHL
この恨みが	HL+HHLL	HL+HHHLL
男	HHL	LHL
この男が	HL+HHLL	HL+LHLL
表	HHL	LHL
この表が	HL+HHLL	HL+LHLL
思い	HHL	LHL
この思いが	HL+HHLL	HL+LHLL
女	HLL	HLL
この女が	HL+HLLL	HL+HLLL
刀	HHL	LHL
この刀が	HL+HHLL	HL+LHLL
言葉	HLL	HLL
この言葉が	HL+HLLL	HL+HLLL
宝	LHL	LHL
この宝が	HL+LHLL	HL+LHLL
鋏	LHL	LHL
この鋏が	HL+LHLL	HL+LHLL
東	HLL	HLL
この東が	HL+HLLL	HL+HLLL
光	HHL	HHL
この光が	HL+HHLL	HL+HHLL
袋	LHH	LHH
この袋が	HL+LHHH	HL+LHHH

一字村	1	2
仏	LHL	LHL
この仏が	HL+LHLL	HL+LHLL
鏡	LHL	LHL
この鏡が	HL+LHLL	HL+LHLL
朝日	HLL	HLL
この朝日が	HL+HLLL	HL+HLLL
命	LHL	LHL
この命が	HL+LHLL	HL+LHLL
胡瓜	HLL	HLL
この胡瓜が	HL+HLLL	HL+HLLL
心	HLL	HLL
この心が	HL+HLLL	HL+HLLL
姿	HLL	HLL
この姿が	HL+HLLL	HL+HLLL
涙	LHL	LHL
この涙が	HL+LHLL	HL+LHLL
兎	LLH	LLH
この兎が	HL+LLHH	HL+LLHH
鰻	LLH	LLH
この鰻が	HL+LLHH	HL+LLHH
鳥	LLH	LLH
この鳥が	HL+LLHH	HL+LLHH
狐	LLH	LLH
この狐が	HL+LLHH	HL+LLHH
高さ	LLH	LLH
この高さが	HL+LLHH	HL+LLHH
鼠	LLH	LLH
この鼠が	HL+LLHH	HL+LLHH
雀	LLH	LLH
この雀が	HL+LLHH	HL+LLHH
背中	LHL	LHL
この背中が	HL+LHLL	HL+LHLL
母	LHL	LHL
この母が	HL+LHLL	HL+LHLL
蚕	LHL	LHL
この蚕が	HL+LHLL	HL+LHLL
後ろ	LHL	LHL
この後ろが	HL+LHLL	HL+LHLL
鯨	LHL	LHL
この鯨が	HL+LHLL	HL+LHLL
薬	LHL	LHL
この薬が	HL+LHLL	HL+LHLL
病	LHL	LHL
この病が	HL+LHLL	HL+LHLL
兜	LHL	LHL
この兜が	HL+LHLL	HL+LHLL

一字村	1	2
売る	HL	HL
置く	HL	HL
買う	HL	HL
泣く	HL	HL
打つ	LH	LH
書く	LH	LH
切る	LH	LH
飲む	LH	LH
植える	LHL	LHL
借りる	LHL	LHL
消える	LHL	LHL
捨てる	LHL	LHL
生きる	LHL	LHL
起きる	LHL	LHL
落ちる	LHL	LHL
余る	LHL	LHL
痛む	LHL	LHL
祈る	LHL	LHL
動く	LHL	LHL
遊ぶ	LHL	LHL
登る	LHL	LHL
拾う	LHL	LHL
運ぶ	LHL	LHL
歩く	LHL	LHL
隠す	LHL	LHL
入る	LHL	LHL
無い	LH	LH
良い	LH	LH
赤い	HLL	HLL
浅い	HLL	HLL
甘い	HLL	HLL
青い	HHL	HLL
白い	HHL	HHL
狭い	HHL	HHL



統計手法を用いた諸方言アクセント分類の実証的研究―京阪式アクセントと讃岐式アクセントを中心に―  
村田真実